

共産主義

共産主義者同盟理論機関誌

さらに歩を進めよ！

綱領討議を組織するにあたって

共産主義者同盟綱領草案

労働運動の中に前衛党を組織せよ！

左翼平和屋の破産（八・六大会）

現代における革命と労働組合

プロフインテルンの教訓

時評 新版「ソ党史」にみる

革命史の歪曲

国際共産主義運動入門講座2

西イリアン解放闘争と

インドネシア共産党 上

さらに歩を進めよ

—現情勢と革命党建設の道—

六月の参議院選挙の終了は、警職法闘争以後、なされるべくしてなされなかった政治的再編成に、両階級をして急速にとり組ませる合図となった。

第三次岸内閣の成立、それにもなう自民党の派閥の再編、安保改訂交渉をめぐるジグザグ、社会党、共産党の激しい党内論議、各労組大会における政治論議、大田、岩井発言に端を発した社共統一論争の再燃、安保改訂闘争にともなう統一戦線論争などは、この政治的再編の過程が急速に、しかも現在の再階級の力関係を正確に反映して進行していることを示す指標である。

参議院選挙における政治的世論調査の結果が、警職法闘争からの約半年の階級闘争の推移における敵味方の力関係の変化を正確に反映したのと同じように、参議院選挙後に進められているこの政治的再編の過程と現状勢もまた、現在の階級的闘いと状況をいとも明瞭な形でわれわれの前に提示している。

すなわち、警職法闘争時における力関係は逆転し、ブルジョアジーは、経済的安定の基盤の上に立ちつつ、政治的安定を完全にとり戻して、派閥の第一段の再編成を短期に終了し、「安保改定」等の政治攻勢をもつて真正面から労働者階級に挑み、さらに小ブルジョアに対しては脅迫をもつて動揺せしめる自信に満ちた正面攻撃を挑んできている。

安保改定をめぐる交渉のジグザグは昨年におけるジグザグとは同じではない。ブルジョアジーに有利に展開している現在の情勢のなかにあって、いかに強力に、いかに彼らにとって、巧妙に、いかに長期にわたって労働者階級を、武装解除の状態におくかという判断の差を示すものでしかない。

他方、警職法闘争を議会主義のリンクに閉じこめることによってブルジョアジーの安定に手をかし、その後春季闘争における再度の裏切りによって労働運動を危機に導いた労働者階級指導部の再編の事業も一見するならば、階級的力関係を反映して、「平和裡に」右よりへ右よりへ進んでいくかのごとくである。

しかしまた、警職法闘争の中から、真の革命的前衛—共産主義者

同盟をうみだした労働者階級は、決して、この過程を拱手して傍観しているのではない。

彼らは、一方では、資本家階級との激しい闘いに立上り、(日鉄志免、全通三生、炭炭、主婦と生活社、田原など中小企業等々)、他方、この闘いを組織する既成指導部への大衆的批判に立上りつつ、この両者への闘いの非妥協的推進者である共産主義者同盟に大衆的に結集しつつある。

一つの幽霊であった同盟(フロント)は、プロレタリア階級の政治的再編の事業を担うもつとも革命的な部分を結集して、いまやあきらかに一つの政治的勢力として登場しつつある。

かかる担い手—共産主義者同盟によって発せられた、——「真の革命的前衛政党をつくれ」、という言葉は、現情勢にあってますます労働者階級の切実な、さしせまったものになってきている。

一

三月の「合理化から拡大へ」のスローガンを、「安定した拡大へ」とかきあらためた日本ブルジョアジーの自信は、五六一五七年の「神武景気」時のピークを遙かにオーバーし、戦前水準の三倍に達した鉱工業生産指数、本年度経済成長率の見通し十%以上、昨年春来の上昇率二〇%、外貨準備十億ドル突破といった指標にせめられる日本資本主義の最近の動向によって生みだされている。

この経済情勢は、「日本経済の体質改善」「長期安定」をめざす資本家どもを、基幹産業鉄鋼等における新技術革新、機械導入による生産方法の全面的更新を伴う合理化(第二次合理化から第三次合

理化へ)、国鉄、電通における五カ年計画などにみられる高次合理化、国際的不況産業部門—炭鉱における廃止、企業整備、大規模の首切りによる合理化等へと駆りたて、これにもなう激しい資本攻勢が労働者に襲いかかっている。

さらには、このような経済的基盤のもとに海外市場進出への強力な意欲は、彼らをして、さまざまな外交的、金融的、財政的措置をとらしめている。(東南アジア賠償、輸出入銀行の融資条件の緩和)

激化する世界市場争奪戦に、わりこむために日本の資本は、岸首相をして、世界を駆けめぐらせさせた。

かかる段階にいたっている日本資本主義の動向こそ、弱化している政治委員会を急速に強化し、安定した帝国主義政府をつくりだすことを支配階級の焦眉の課題としているのだ。

ブルジョアジーによって進められている政治的再編はかかる資本の要求を背後に行われていたのであって、「資本主義の廃絶」を目標にして一世紀前に宣言したかの「共産党」の名前を僭称する今日の共産党によっていわれる、村芝居の善玉が、その仇役に投げつけるような、「一部の国民の裏切りもの」「売国奴」たちの仕業や、外国ブルジョアジーのみの外部からの悪戯によってなされているのではない。

「両階級に分裂した国民の統一」を語り「民族」と「国家」の中立を語る今日の共産党は、かつてレーニンが、汚濁にまみれたが故に、その名前と旗を引きさかねばならなかった社会民主党と同じように、現代の労資協調党、社会排外主義者に転落してしまっているの

だ。

警職法闘争による政治的動揺によって、当然のプログラムを大きく変動せざるをえなかったブルジョアジーは、社会党の裏切りによって辛くも一時的安定をとり戻しはしたものの、一時は、政治的委員会の全面的改編をも考慮しさえしたが（一月―二月）、約六カ月の経済的攻勢と政治的作戦の予想以上の成功が再度の労働運動指導部の手助けによってもたらされ、地方選挙、（なかならずく知事選）参議院選挙の勝利となって眼前にその結果をみるに至って、小躍りしつつ政治的分野へ、大きな顔をあらわし始めた。

約六カ月の政治的低姿勢の仮面をなげすてたブルジョアジーは、三度岸に賭け、同時に、国家官僚に基盤にもつ池田派を含めて急速に自民党の派閥を再編成し、彼らの政治的位置を強化するための第一段階として「安保改定」を政治攻勢の前面にだしてきてきた。

一つには世界資本主義内における自己の対外的地位の強化のため二つには、その民族的スローガンによって、小ブルジョアを引きつけるため、永年の課題としてきた「安保改定」は、それまでの外務官僚による交渉段階から、いまや完全な政治的中心問題として第三次岸内閣によって調印、批准へと進められようとしている。彼らは、この改定によって、帝国主義政治体制の強化をかつらうとしているのだ。

現在の自民党、政府内の意見のくいちがいと、プログラムのジグザクの停滞は、この強行によって触発されるであろう労働者階級を中心とした人民の反対闘争のエネルギーの計算と、現在の交渉ではあまりにも少いかこれらの「民族的利害」と「民族的スローガンの魅

力のなき」に対する評価の相異でしかない。決して、「人民の闘いの昂揚による支配階級の分裂」なる代物ではない。

政治的低姿勢への再度の転換などを見るのは大きな誤りである。余裕にあふれた彼らの小憎らしい顔をみつめよ。

「月給二倍論」をぶつ池田通産相の自信にあふれた「経済安定計画」に基く来年度予算の編成は進んでいる。

ナイキ、ホークの核兵器装備を歯に衣せず発表した第二次国防計画の発表をみよ。

六カ月前の小ブルジョア懐柔策はいま憶面もなくなげすてられ、泣き役の婦人を従えて「誤解を解くため」に懇願した小ブル平和主義者、原水協理事長安井郁の頬へ、すげない平手打ちが真向から浴びせられる。

「国民」を啓発するための「民族の独立を願うための安保改定」の宣伝文書が何百万とまかれる。臨時国会から通常国会へ、彼らももしこの安保改定のプログラムを、彼の支配を揺り動かすまでに発展爆発する人民の抵抗なしに進ませることに成功するならば、かれらはさらに、予算案の通過、選挙法改正を始めとする政治的攻勢を一挙にかけ、そのことによって帝国主義安定支配体制を強化し、資本の支配を安泰ならしめるであろうことは疑いのないことであろう。

三

「労働運動の曲り角」「転換期に立つ労働運動」という言葉はい

まや誰によっても語られている。

しかし、春季闘争における未曾有の資本攻勢の成功が、組合幹部と既成政党たちの恥廉恥な行動によってもたらされた直後には語られずに、ふたたび三、四カ月の「冷却期間」の後に、小綺麗に準備された演壇の上から、かかる「反省」が語られることにこそ、現在の「危機」の内容が蔵せられているといえよう。かくて歴史は二度繰返される。一度は激しい血塗れの階級闘争のなかで、二度目は、この闘争から導く結論を討議する討論のなかで!!

明らかに、今年の春季闘争は、私鉄東急等における新型労資協調協定の導入と国鉄、電通にみられる「闘いはない方が得をする」闘いの終結と、鉄鋼、金属、炭炭にみられる下部労働者の「ネルギー」の抑圧による「闘いの不均等」等によって、民間幹部のみならずからみめるように、「スケジュール、春闘方式ききゆきずまり」を示し「民同脱皮論」さえ告白する、長期的展望における労働運動の危機をつくりだした。

闘いを忘れ、参議院選挙運動に血道をあげたのち、その敗北ののちの大会シーズン期になってやっとひらかれた相継ぐ労組大会は、かかる労働運動の危機的状況と、この状況に対する下部労働者の幹部批判の存在を予想した民間幹部によって「自己批判大会」として周到に準備されたが、危機を到来させた幹部への激しい批判と不満は、既存反対派の日和見主義と無理論のために、またまた有効に組織されずに、総評民同の政治的マヌーヴァーの前にやぶれさってゐる。

すなわち、日教組大会に始った主要単産、労組大会の殆どは、春

闘の敗北の原因が幹部たちの議会主義、労資協調主義、右翼日和見主義にあったことも暴露されず、警職法闘争の教訓も討論されず、選挙の真の敗因も追求されずに、安保闘争、合理化反対闘争等のさしさまった労働者階級の利害のための真剣な闘いも討論されず、日和見主義方針に対する革命的方針と戦術の対置もなしに、ただ「左翼」のしるしを一手に引上げた形で「政党支持の自由」「社共両党の統一戦線」論議が闘わされたのみといつても過言ではない。

国鉄帯広大会を見よ――志免闘争がたった三十分でも「社共両党支持」の際の乱闘騒ぎと同じ関心で討論されたか?!

全電通富山大会をみよ?! 本社支部三役の首切りに先頭に立った中闘の裏切りに対して「組合の統一」を説教して是認した「左翼」たちの助けによって「大会が無事にのりきれた」ザマを注視せよ!!

非常事態宣言をだし組織をあげて一九五八年の前半の階級闘争を彩った勤評闘争を経た日教組大会において、この闘いの何の革命的総括もちださないで「社共両党支持」論議に「最も白中した討論」が展開された光景を思い浮べよ!!

総評太田、岩井のいわゆる下呂談話、常幹の「社共両党への要望」なる一連の「左翼化」は、下部労働者の幹部批判の存在と、この基盤に立つ既成左翼の唯一の攻め所を見てとった民間幹部の政治性を示す以外のなものでもない。

労働運動の危機の克服を討議すべき労組大会が、このような民同左派と革同、共産党との政党支持論争に終始したそのことこそ、現存の既成指幹部が労働運動の再編の事業においても全く労働者階級を裏切るものであることを如実に示した光景であり、再編の過程そのものが一層の危機を再醸成しつつあることを示しているのだ。

さらに参議院選挙の敗北を機に、開始された社会党、共産党の論議と党内闘争をみよう。

「敗北」を認とめるのに中央委員会十日間の論議によってもなお決着がつかなかった共産党とは逆に、選挙の終了のその翌日から開始された社会党の党内闘争は、敗北の原因の究明から口火がきられた。だがしかしこの究明が「総評に引きずられる社会党」の自民党のスローガンの尻馬にのった右派(全労派)の左派攻撃から開始され、この「防戦」のための応酬となったこの論争の行先は、その当初から決定されていた。といってもよいだろう。

五八年の偉大な労働者階級の闘争が否定され、労働運動の危機的状況を反映する土俵の上で行われたこの論争はせいぜいのところ「階級政党か、国民政党か、大衆的階級政党か階級的大衆政党か」と交錯して、結局「階級的大衆政党」との状況規定で、第一段の幕といった道をたどることしかできなかったのだ。

約十日間の激論と、二十日間の「冷却期間」をおいて漸く、二カ月以上経て発表された共産党中央の「参議院選挙の総括」は、参議院選挙の「敗北」を語った春日(庄)の「前衛」論文の取消しの後に、「党の不振」の原因をさぐって、またまた「わが党の方針は基本的に正しかった」と「共産主義者としての戦闘的精神がたらず」「下部黨員の行動が消極的であった」ことに見出しただけだった。いやそれだけでなかった。強引に頰かぶりきめこんだ代々木官僚どもは「党の強化のために」「労働運動に反革命的毒手をのばすトロッキスト」との闘いと「現代の理論」に果敢う修正主義分派との闘争をよびかけ、党内左派への集中砲火を浴びせ始めたのだ。

ピッチに労働者の本来の力を發揮しつつ政治闘争が全国に燃え上り始め、自民党をして俊巡させていることは、「労働運動の危機」ということが労働者階級のエネルギーの低下消滅を、意味しているのではないことを、「危機」を説教する人々は知らねばならない。

安保改定反対の闘いが、散発的に爆發する労働者の闘いをつにつなぎ、個々の資本への憎しみを、階級ブルジョアジーへの憎悪に發展させ、改良を望む要求をしてブルジョア支配のテンプレクへと發展しかねない政府打倒へとつなげ、階級と階級との戦闘へと導くことをおそれた資本家階級と自民党は、今、全力をあげ、あの手この手をつかって、この闘いへ挑んできている。

若干のプログラムの後退——しかし同時に小ブルジョアへの威嚇と脅迫がなされる。

進め!!——自分たちのエネルギーを常に無益に放散されつつけてきた労働者はこう叫ぶ、そして、なお捨てきれない指導者たち!! 政党への執着を残して、「どうするんだ」と、後に、いる、かれらをつぶさる。

答はきままっている。しかし、敵の攻撃の露骨さの前に、この答えの露骨さも暴露される。

敵が退いた! 味方も退け! 「力をたくわえろ」かくて、「スト権確立は急がずにやれ」「九月ゼネストなんて早すぎる」「調印、批准段階のゼネストを!!」注意深い口実の下、左翼の仮面を被って、労働者の闘いの昂揚のタイミングは巧妙にはずされる。

さらに驚くべきことが!!

「原水爆禁止大会で安保改定をするなど怪しからん」と自民党が

参議院選挙の敗北を機に、既成政党の中に訪れるであろうと予想された危機は、かくて、社、共両党においても、右派攻勢のものと再編成の道によって覆い隠されたかのようにみられた。

このようなブルジョアジーの再編、攻勢、労働運動指導部の再編論争は、労働者階級は全く疎外されたままでスムーズに進んでいようか、彼らは拱手して観客の位置にひきさがったままなのだろうか?

否/否/否/否/

労働者は自分たちの生活にかかわる資本家の攻勢を黙ってはみていない。

裏切られ、裏切られ、裏切られてきた労働者は、沈黙を守って、「指導者たち」の遊戯にも似た論争を眺めつづける程お人好しではない。国鉄志免鉾売山に反対して闘ったあのブルジョア秩序を嘲笑した闘いを見よ。

資本家の手先としてきた調査団を追いかけたその実力のなかで同時に醜い幹部の取引きを暴露したあの闘いを行った志免の労働者は特別性の労働者ではない。

七月真夏の炎天下、三重全県に繰りひろげられた全通労働者の闘いのエネルギーは、至るところの工場の中に存在している。

百日、二百日、飯もロク食わず、暴力団と官憲によって血塗れになりながらなお闘う、中小企業労働者の資本への憎しみは、全国の労働者の胸に叩きこまれていく。

ブルジョアの歯をむきだした攻勢が「安保改定」の挑戦状となつて行われたのに対して、六・二五から七・二五、八・六への急

小ブルジョアを威嚇すれば、小ブルジョアを気兼ねする共産党が即座にこれに和して合唱する。「安保改定は原水禁世界大会で反対決議をするべきではない」。自民党と共産党の結婚!! ブルジョア政党と「プロレタリア前衛党」の癒着による国民の統一、万歳!! 社会党が、大みえきつてこれをなだめる「共産党は敗北主義だ。戦略的に見ても安保改定反対をとるのは当然だ。」しかし、後でそつと訂正する「社会党は原水禁大会で無理に安保改定反対をとるものではない。」

みごと成就した自、社、共の三党統一戦線!!

革命的労働者は、もはやかかる愚弄に黙ってはいなかった。

東京地評を始めとした労働者、全学連に結集した学生たちは、ブルジョアたちに立ちむかい、その経済的、政治的攻勢と徹底的に闘うためには、このような猿芝居を行う「労働者党」を先づ粉砕することから始めなければならないことを知って、大衆的に闘い始めていく。

資本家階級の合理化攻勢と闘うためには、「先ず幹部を合理化せよ!!」という言葉が革命的労働者の合言葉となり始めた。

ブルジョアジーの政治的再編を伴う政治攻勢、激化してくる現状をみ、今後の展望するとき、もし、これに立ちむかい闘いを成功的に指導する革命的前衛がつくりだされないうままに闘いを成功的に激発し、個々の闘いが昂揚し、部分的高揚の局面があらわれようとも、結局は勝利しえないばかりか、またまた、苦い屈伏を上げらるであろうことを、そして、この革命的部分をくりだす仕事は、一切既成の幹部に任せられないことを知り始めてきているのだ。

ブルジョアジーの経済的、政治的攻勢が次々と行われているとき

これを一つ一つ打破り、あらゆる闘いを、彼らの支配の打倒へと進め、労働者階級の本来的エネルギーを解放す真の解放を保障するためには、革命的理論に武装された指導部の創設にかかっていることが認識されつつあるのだ。

指導部の余りにも明白な裏切りと、大衆的労働者の批判によってふたたび労働者政党の党内闘争は、再燃しつつある。

安保改定闘争の発展にともなう社会党右派—全労派—西尾派に対する左派、青年部からの攻撃がそれであり、原水禁大会、安保闘争にみられる極端な共産党右派の日和見主義と、中央代々木派の気遣いじめた反対派—購造的改良派への圧迫を機とした代々木反対派の党内闘争の芽生えがそれである。

さらには、総評大会をひかえての革同派の右左への分解がそれであり、地評、果評など下部組合幹部の中央への激烈な批判と左翼化がその現象である。

この芽生えをすくすくとのばせ、既成政党の危機を醸成し真の階級政党誕生へと向かわしめる可能性はここでも成熟しつつあるのだ。

「労働運動の危機」は「指導部の危機」に還元される。

「安保改定」を中心に攻めてくるブルジョアジーに対して、既成指導部にはつきりとみきりをつけ、闘いの妨害者、破壊者として大衆的に断罪し、革命的前衛を結集して、安保改定の闘いをして全階級の闘いに発展させようかいか、こそ、日本労働者階級の未来はかかっているのだ。

四

このような状況にあつて共産主義者同盟が負うべき任務はますます大きくなってきている。

「全プロレタリア階級の利益から離れた利益をもっていない」わが同盟は、ブルジョアジーのあらゆる政治的、経済的政策から労働者階級の利益を守るために総力をあげて闘うであろう。

「プロレタリア運動をその型にはめようとするような特別の原則をかかげるものではない」わが同盟は、労働者階級のあらゆる闘いを、さまざまな形態をとる闘いをよりごみすることなく、もっとも勇敢に、資本への憎しみをこめて闘うであろう。

われわれは、現状勢のなかですでに開始されているブルジョアジーの攻撃と労働者の闘いの現状から、「安保改定」阻止の全国的階級の闘いの展開の先頭に立ち、帝国主義政治体制の強化をもくろむ岸ブルジョアの打倒への闘いの発展せしめるであろう。

わが同盟は、資本家階級による海外市場進出のための、「安定経済」のための合理化によって労働者に加えられている資本攻勢のその一つ一つのあらわれに対し、全力をあげて労働者の利益を守るために闘い、一企業の闘いを全産業への闘いへ一産業の闘いを全階級の闘いとして闘うことによって、この攻勢に立ちむかうであろう。そしてこれらの闘いにおいて、集会、デモ、スト、ゼネスト座りこみスト等々議会的な、非議会的な、平和的な、強力的な、総じて労働者が生みだすさまざまな闘争の形態において闘うであろう。

共産主義者同盟に結集せよ!!

それとともに、状況の新しい展開は、共産主義者同盟の二百日の短い歴史にも新しい頁をひらかせずにはおかないだろう。

「一匹の幽霊」から「反革命の毒手」をもった政治勢力に成長してまた同盟は、それにふさわしい頭脳と心臓、手と足をもつために飛躍をなしとげなければならない。

それでは、この飛躍をなすためにはなにが必要か、新しい頁はなにによってひらかれるのか、

同盟は、代々木共産党内において激しい党内闘争を経て、形成された左翼反対派を中心に、現存するスターリン主義に毒された公認の共産主義指導部と理論的組織的に断絶することを宣言し、新しい革命的階級政党の結成をめざして結成された。そのとき以来、同盟は、当然のことながら既成の政党、なかんずく代々木官僚どもからの異常なまで激しい攻撃と中傷を浴びながら進んできた。

われわれはかれらとの非妥協的な闘争なしには進み得なかったであろうし今後またそうであろう。

しかし、われわれは単なる批判者たるための批判者とは無縁であった。

批判の武器を武器の批判にとって代えるために、既成政党からの組織的分離をかりとりながら、労働者の中、学生の中に真のマルクス主義的前衛組織を確立するための努力が続き、同盟はブルジョアジーとの非和解的闘争を寸時も休みなく進めてきた。

この過程は当然のことながら、新しい日和見主義の潮流—第四イ

9 さらに歩を進めよ

それとともに、「常に全プロレタリアートの利益を強調し、それを貫徹し」「常に運動全体の利益を代表する」わが同盟は、運動の全過程において、「もっとも断固とした、推進部分としてあらわれ他のいかなる集団にまさって」「運動の条件、進行および一般の結果への洞察力をもって」あらわれるが故に、運動を害し、全プロレタリアートの利益を裏切ろうとするすべての集団—労働者団体への苛借のない批判者たるであろう。

わが同盟は、現在の労働運動の危機を招来せしめている社会党、共産党の幹部たちを断罪する。

安保闘争のなかで、「中立」「民族、国民の統一」なるブルジョア・イデオロギーで労働者階級に立向っている自称前衛党日本共産党を糾弾する。

議会主義の中に運動をとじこめ、運動全体の利益を常に裏切っている社会党、共産党、総評民同幹部を弾劾する。

小ブルジョアの意識におもねることによってプロレタリアートの運動を阻害し、ブルジョアジーに屈伏する社会党、共産党幹部への幻想をさいいたちきり、自分の世界的使命を自覚し、みずからの闘いを徹底的に遂行することによって、小ブルジョアを引きつけるプロレタリア独裁の思想を名実ともによみがえらせ資本家階級を震撼せしめることを労働者階級によびかける。

そしてよびかける。

日本ブルジョアジーの打倒プロレタリアートの独裁の樹立。

世界プロレタリア革命の突破口をひらけ、この任務をなし遂げるために、あらゆる既成政党への幻想をふりすて、浅沼、鈴木、西尾らの社会党、野坂、宮本らの日共官僚を打倒し、真の革命的前衛—

ンターにつながる「革命的共産主義者同盟」「国際主義共産党」——との闘争として展開された。

一九九〇年代のロシアにおける革命的マルクス主義的潮流の形成が、一方ではナロードニキ、無政府主義に対する闘争として遂行されるから、同時に「合法マルクス主義」との密月として「種々なる要素」が結合されてなされていったがゆえに、「この東の間のマルクス主義の全盛にもたらせた温和な急進分子との同盟」をたちきりつつ真のマルクス主義政党確立のためのレーニンの活動が必要であったと同じように、スターリン主義からの分離と闘争の過程においてなされた「反スターリン主義」の名の下の「様々な要素との密月」への訣別をつけるためには、現実の階級闘争の鉄火での経過と新しい論争と闘争が必要であったのである。

さらに、同盟の発展は実体的には革命的學生から革命的労働者への結集へと進んでいる。

一 地方的グループの確立から全国的組織への確立へと拡大していった。

既成政党への批判者から、労働者階級のあらゆる闘争における現実の指導的前衛へ。

一 時的、部分的左翼から、革命的理論に武装された真正の左翼へ
個々の、人的に結合されたグループの結集から、全国的に単一に指導された、労働者階級、学生、工場、経営にしっかりと根をおろした戦闘的前衛政党へ。

同盟の経過した時日は極めて短い。

この短い期間に急速に成長しつつありながら、現在の状況は、新しい飛躍を要求し、同盟の主体もまた新たな歩を進めることを要求しているのだ。

革命的學生からの結集——それは公認されたマルクス主義的理論的潮流への全面的批判が絶対的に必要であったがゆえに、必然でもあった。この革命的學生の結集は、革命的労働者への結集へと進んだ。すでに部分的にも労働運動の現実の指導部隊としてさえ登場するに至った。基幹全産業へ同盟は確立された。さらに進め!!

極度に集中された資本の存在する、しかも中央集権下された国家を有し、国家独占資本主義として発展している日本資本主義の現状では、地方グループの形成から全国的組織化の過程は、ロシア・ボルシェヴィキの過程とは比較にならない速度をもって進んだ。しかも、全国的な強固な學生運動を指導下においた現在の段階では、われわれはロシアの経験を真似る必要はない。

だが満足するな——現在では一つの企業の経済闘争でも、一つの工場の労働者の闘いも、直ちに国家権力と衝突する——闘いは全産業のもとに統一された闘いなしには進み得ない。

かかる状況では、地方グループの融合から全国的単一の前衛戦闘組織への発展という言葉は、ただ全国的組織を有していることによっただけでは実質を伴はない。

現実の単一の全国的前衛政党への発展は、一つの闘い、一つの事件に対して全階級の意識を速刻に暴露し宣伝し煽動し組織しうる内容を備えてこそ始めてありうる。

かかる飛躍をなしとげよ!!

「批判は容易い、創造は困難である」

既成政党への批判——一方では大企業に依拠し、龐大な官僚組織を確立し独占利潤のおこぼれに依拠する社民幹部、他方ではモスクワの官僚の物質力と権威に依拠しつづける三十数年の伝統の旗を錦の御旗とする日本共産党が存在し、労働者大衆がこれらの政党のよってとらわれているなかにあつては、革命的前衛の確立の事業は、かかる政党への容赦のない、系統的な批判と弾劾なしにはありえない。

批判的勢力の結集から始つた同盟の活動はより強力により徹底的により系統的に続けられるであろう。

だが「批判は自己目的たりえない」

批判的勢力への結集から、もっとも優れた、もっとも革命的理論と政治方針を有する革命党への脱皮が、いまやなしとげられねばならない。

さらに歩を進めよ!!

戦術左翼から真正左翼へ

既成労働者党のすべてが、現状勢の中で戦術的左翼として立ちあらわれ事々に労働者を裏切っているときに、同盟によせられる批判が「極左冒険主義者」「戦術左翼」「ブランキスト」であることをわれわれは誇りに思う。

革命的労働者が戦術「左翼化」によって、諸々の政党の革命的言辞の日和見主義を見破りつつ「左翼」としての同盟に結集するのは当然である。

しかしさらに一歩進んで注視せよ、この労働者の左翼化の中に、果して、どこまで「資本主義的秩序破壊」のための思想と理論とが

貫かれているか。〇〇組合の反対派、全通の、国鉄の日教組の左翼であったとしても、この産業組合の枠を破って全階級闘争を組する左翼がなん人もいるか!!

自然成長性の理論と労働組合主義!! われわれはレーニンとも、これに反対して、目的意識性と共産主義的政治意識を声を大にせねばならぬ。

学生活動家の最左翼の集団からプロレタリア革命遂行のために労働者階級の本隊から学生の中に派遣された分遣隊として学校細胞への実質的転化が、いまやかちとらねばならぬ。

戦術左翼から真正左翼——プロレタリアの前衛へ歩を進めねばならぬ。

さらにこの内容は組織そのものに貫徹されねばならぬ。

ブルジョア階級との非妥協的闘争を行う戦闘組織——全国的単一の前衛政党たるためには労働者階級の階級意識を全国的に有しているところの全体から区分されたかぎられた部分の強固な組織——革命家の組織たる実体を備えねばならぬ。

スターリン的「一枚岩」のポロエロになった規律の強制ではなく一人一人の階級の自覚にもとづいた一〇〇%の自発性のもとになされる鉄の規律、生き生きとして情熱と革命的エネルギーに溢れ、激しい討論によって団結し前進する前衛の組織へ。かかる組織への発展の中で、同盟は自己の利益のためにシエンジョンする臆病者や、才喋りだけで革命を幻想する小ブルジョア分子の存在を許さず、放逐するであろう。

かかる戦闘組織への上から下までの発展がなされなければならぬ。

同盟の確立のための努力は、創造期にあっては、個々の人的結合を通じてなされることをある程度不可避にした。

あらゆる方法を通じての革命的左翼の同盟への結集は、同盟の発展に大きく寄与した。しかしわれわれは進まねばならぬ。

個人の人的結合から、政治的方針を明確に持ち経営のなかで学校のなかで、大衆としっかりと結びつき、大衆の影響を与え宣伝し煽動する細胞の強固な確立に基いた全国的組織化へ、われわれは、このような同盟の質的發展を獲るべき重要な段階にいる。

一言でいうならば、革命階級政党としての本質を表現して「真の革命的前衛政党を確立せよ」と公然と訴え活動を続けてきたわが同盟は、現状勢と同盟の九ヶ月の歴史の経過に応じて、いま、革命的階級政党としての実体を形成する方向を明らかにしつつ、同じ言葉で、「真の革命的前衛政党を確立せよ」と叫ばなければならぬのである。

前衛政党として実体を形成する道—上述した諸々な飛躍をなしとげるための道、すでに発せられた「なにをなすべきか」の間に答える現在の段階の同盟の任務の鍵はなにか。

第一、同盟綱領の確定である。

われわれは同盟の創立大会において小ブルのお喋り達に対してこう宣言した。

「理論と綱領との単なる論筆によってのみ組織をつくらうとする小ブル的なお喋りグループたちが綱く「組織の前に綱領を、行動の前に綱領を」という言葉に反対して、われわれは、日々生起す

る階級闘争の課題にこたえつつ、その実践の火の試練の中でのみプロレタリアート解放の綱領が生れよう、われわれは闘争の保証を「戦略規定」ではなく諸階級の相互関係のうちに求めると答える」

まさに九カ月の実践の火の試練の中で、諸階級の相互関係を明確にしたプロレタリアートの解放の綱領の確定が今、まさに必要不可欠のものになってきたのである。

かかる綱領の決定によって同盟は、プロレタリアートの運動において常に運動全体の利益を与え全プロレタリアートの利益を代表するものとして、ブルジョア階級の一つの攻撃一つの行為の暴露を、一貫した全ブルジョア社会の暴露としてなすことが出来る。かくして現存する政党の非革命性を常時的に、理論的かつ全般的に暴きうる政党たりうるであらう。

同盟の綱領の決定は現在の最も重要な問題である。

第二、職業的、革命家を中心とした組織への発展である。

すでに同盟の中央、および若干の地方ではレーニンの職業革命家を中心とした組織へと進みつつある。

しかし情勢の発展、労働者の自然発生的運動の巨大な量に比するならば同盟結集への事業、労働者の中の同盟の宣伝、煽動は極度におくれている。

もし、同盟の結集がただ経営の中での、学生の中での同盟員の獲得といった形のみ進んだとしても、同盟が現在要求されている飛躍を勝ちとるためには、そして実体的に革命的階級政党への建設の道を歩むためには、強固な共産主義的思想をも、理論をもち、一さの食うための「職業」に妨げられず、廿四時間を革命運動に捧げ

自由に「労働者運動の中で、共産主義的理論と思想を宣伝、煽動しうる、専門的に訓練された職業的革命家を数多くつくりだし、彼らを中心として、組織をつくることを抜きにしてはありえない。

工場の中の経営細胞、学校細胞に存在する大衆と直接の紐帯をもつ同志たちも、このような職業的革命家のもとに組織されてこそその力を数倍発揮しうるし、さらにこのような革命家の存在があつてこそ、労働組合(トレード・ユニオン)の書記となりさがつた現在の左翼を真の左翼になしうるのである。

同盟の組織の飛躍はかかる職業革命家の中心と組織への発展いかんにかかっているとよいだろう。

第三、全日本的、単一の全国的な政治新聞の発行の機が今や熟したということだ。

同盟は共産主義プロレタリア通信等のさまざまな文書ピラ、パンフによってその見解を宣伝し、労働者階級の運動へ影響を考えつつその組織を拡大してきた。

しかし、すでに先述したような同盟の質的發展を勝ちとるためには、「原則の上で一貫した、全面的な宣伝煽動を系統的に行う」全国的な政治新聞の発行が絶対的に必要になってきた。

個人的な働きかけや、地方的なリーフレット、ピラ、理論雑誌などによるバラバラな煽動を一般化された規則たらしい煽動によって補う必要性を、今ほど痛感することはない。

われわれは、各地のなんらの政治的組織なしに、新聞を発行することのみ満足している形式主義者とは無縁である。

確かに、各地に各産業に、政治的組織が建設されないならば、いかなるよい新聞もなんらの意義をもたないであらう。

しかし、まさに同盟の現段階は定期に発行される全国的な政治新聞によるのでなければ、この政治的組織を強固に建設する方法はないといわなければならない。

この新聞は、定期的に規則正しく発行されるものでなければならぬであらう。

さらにこの新聞は、全国的な新聞でなければならない。地方の、場所と職業によって異なる形で形成され活動しているグループ、組織を全国的な単一政治方針によって統一し、地方的細分性を克服し、地方的運動を、全国的運動にすることは、現在の状況のなかですすまなければならない。

さらに、必要なことは政治新聞でなければならないことだ。

あらゆるブルジョアジーの行動を、一つの事件を、一つの労働者の闘いをとらえて、その階級の意識を全面的に暴露し、一つの事件一つの企業、一つの経営の事象を、全ブルジョア社会の暴露と結びつけてとりあげ、闘いの方向を明らかにするためのそのような新聞でなければならない。

労働者階級に与えられている政治新聞は、辛うじてアカハタのみであらう。

日本共産党の驚くべき日和見主義と、小ブル思想が一定の根強さをもってなお先進的労働者をとらえているのは、現在の労働者階級に与えられている定期的な全国的な政治新聞がアカハタのみであることから由来している。

われわれは、系統的に根張り強く労働者のなかから非マルクス主義的思想を追い出すためにも、定期的な全国的な政治新聞の発行を遂げなければならない。「一九頁へ続く」

綱領討議を組織するに当って

共産主義者同盟中央委員会

① 全同盟員諸君

中央委員会は、六月の同盟第二回大会の決定に従って、わが同盟の綱領を作成する努力を開始した。

われわれが昨年十二月、公認のマルクス主義党たる代々木共産党から、自らを分離して、真に革命的な前衛党を創建するためにその活動を開始した時、われわれは全世界のプロレタリアートを資本主義への決然たる闘争に決起させることをはばんでいるスターリン主義に対して、明確な革命の方針を対置することによって、プロレタリアートの前衛を結集することを何よりもその任務とした。

資本主義社会そのもの止揚、そのための全世界のプロレタリアートによる社会主義革命の完遂と、プロレタリア独裁の確立、それを通して真に人間の解放される社会、共産主義社会の建設を目ざすことをわれわれは、わが同盟の基本的任務と考えて活動を開始したのであった。このようなプロレタリア運動の基本的な展望、マルクス主義のきわめて常識的な、そして公然と語られることの余りにも少ないプロレタリアートとその前衛の遂行すべき任務は、簡潔に同盟規約にのべられている。このような政治的任務は同時に組織路線の

上で厳密な前衛組織の確立なしに遂行し得ないことはあまりにも当然であった。だからこそ、われわれは唯一の前衛党として自らをきたえる道を選んだのである。この道は公認の前衛との明確な別軌の道に他ならなかった。十月革命の成果をゆがめながらロシアボルシェヴィキの党内闘争の中で、官僚的な支配を確立していったスターリンとその一党に代表される公認の「マルクス・レーニン主義」政党こそ、革命的プロレタリアートの利益をうらぎり、ブルジョア権

力への明確な非妥協的闘争を組織することをはばんでいるものである。彼らの克服を通ることなしに、プロレタリアートは自らの解放をかちとることもできないからこそ、われわれは、組織の厳密な独立性を主張したのであった。

そして、とくに同盟は、日本プロレタリアートの前衛として自らをきたえ、日本資本主義権力の打倒と日本社会主義革命の勝利を指して同盟の基礎を労働者階級の中におくために具体的な活動をはじめたのである。

このような同盟の創立と活動の方向はいうまでもなく、半年の実践の中で、明確な革命的意義を發揮してきた。われわれはすでに新たな左翼前衛党としての地歩を民同、代々木の度重なる裏切りの中で苦闘する戦闘的労働者と、日本ブルジョアジーとの対決の方向を断固たる戦闘的立場なしに、非妥協的な闘争を遂行する意志と必要のないところに、運動を指導する理論も、一般の理論活動も、発展するはずがないのである。このような実戦的立場を、われわれは今後も更に強く固めねばならぬ。全同盟員は何よりもブルジョアやすべての腐りきった社会的汚物どもに対して、もえるような憎しみをもち、プロレタリア階級に対する利己心ない厭身的情熱をもって武装せねばならない。そして同盟は実践的な戦闘精神をもって労働者大衆の闘争をプロレタリア革命にまで指導せねばならないのだ。

しかし、われわれが打倒すべき資本主義社会は、それ自身一つの法則的過程である経済関係を、その社会的基礎としている。そしてプロレタリアートは、資本家階級の支配を打倒するために闘うことによつて、このような資本主義社会のいわば自律的な法則性そのものの止揚のために闘うのである。勿論それはプロレタリアートの主体的な決意と行動なしに、客観的必然的に自動的に行われるものときめこむことはできない。プロレタリアートの革命的行動以外にブルジョア階級をうち倒すことはできない。だからこそプロレタリアートは、なによりも自己の組織的力量以外に依拠すべき力をもたないのである。資本主義は自然成長的には自己の体系運動を継続する傾向をもっている。それは資本家階級が労働者の労働活動までも商品形態で支配することによって、人間の意志とは独立に法則的に社会関係を行うことが可能となつているのである。そこではプロレタリアートは主体的な意志をもたぬ単なる商品にすぎなくざれている。だからプロレタリアートは単に無意識的に抵抗するだけでは、このような資本主義のくびきからぬけ出すことはできない。

求めて、急速な左翼化をすすめてはじめている革命的學生の中で着々ときづきつつある。

われわれは現在までの成果の上に立って、今こそ同盟の活動を飛躍的に強化するために全力をあげねばならない。同盟創立の基本方向を堅持して、われわれは闘いぬかねばならないのだ。

しかし、暫定期約に代表されるわれわれの創立の方向が、きわめて不十分なものであることは、すでに早くから明かであった。

われわれは決してマルクス主義の一般的理念に基いてわが同盟をつくったのではない。それは階級闘争をすすめる上で必然的にはげしく衝突せざるを得なかつた代々木共産党との徹底的な党派闘争の中で、真にプロレタリア前衛を結集することが焦眉の急務であるという実践的な任務から行われたのである。

われわれは、マルクス主義の理論一般から、われわれの活動方向をきめることはできなかった。われわれは闘争をうらぎる日和見主義を克服するという実践的必要から、自らの理論的蓄積をはかったのである。

解決を迫られた現実的問題の解決の中で、はじめて革命運動の理論も成長しうるのである。われわれはすべてを解決してから行動をはじめようという懐疑論者とは全く無縁であった。全国的で正確な政治綱領を明確に成文化することをまたずに、われわれが直ちに同盟の組織化に取りくんだのは、きわめて当然なことである。

資本主義社会への科学的批判たる革命的理論が、労働者大衆を真に階級意識で武装させるものであると同時に、プロレタリアートとその前衛の、解放へのあくことのない闘志と革命的決意こそ、プロ

プロレタリアートは資本主義をまず正確に知り、明確な主体的意志をもってブルジョア支配を打倒し、彼等を収奪するためにそのような客観的な法則性の支配する社会そのものをかえるために闘わねばならないのである。プロレタリアートは、資本主義の客観的な現実とその法則を正確に把握し、資本主義の現実を科学的に分析し得てこそ、はじめて自己の行動を適確で真に強力なものとすることができ資本主義そのものも打倒できるのだ。

プロレタリアートのブルジョアジーに対する決定的闘争は単なる恣意的偶然的な行動ではない。それは階級社会の歴史そのものを止揚する行動であり、そのこと自体が客観的な歴史の必然的な発展を実現するものである。だから運動を単なる個人的革命家の主観的願望や、野心的情熱によるだけで真に成功に導くことはできない。

プロレタリアートとその前衛は、客観的な現実とその発展の方向に対する科学的な認識をその運動の基底にすえなければならぬのである。滅びゆく階級であるブルジョアジーや、両階級の間を動揺する小ブルジョア階層には、資本主義社会の科学的認識を利用しえず、ましてやその現実的な変革の展望も持ちえないのは当然である。

われわれは真に日本プロレタリアートの革命的前衛として自らを鍛え、世界プロレタリア革命を勝利に導くためには、資本主義社会の客観的な運動法則を完全に理解し、さらにそれを現実に変革する行動にプロレタリアートを結集する運動指導の方針―戦略と戦術―をきたえ上げねばならない。プロレタリア運動が、単なる空想的な運動から、真に現実的なものとなるためには明確な科学的方針が重要なのである。

て又、ドイツ労働者党の綱領批判やエルフルト綱領の作成の中で示したプロレタリア運動の基本方針を明らかにする活動を再び新たな理論的力をもって、世界プロレタリアートの上によみがえらせる事である。そしてエンゲルスの死後腐りはてた第二インターの諸党の中で、無慈悲な非妥協的闘争を通してポリシエヴィキを建設したレーニンの科学的綱領を明らかにするための二十世紀初頭の活動を無限の教訓をもって撰取する事である。レーニンの直接指導下に作られたロシア共産党(IIポリシエヴィキ)の現行綱領はスターリン官僚の手によって、今やまったく無視されているありさまである。世界革命とプロレタリア独裁への主張こそ、レーニン主義の真髄として、われわれは学びとらねばならぬ。

われわれは、このようなマルクスとエンゲルス・レーニンの活動をプロレタリア運動のはかり知れない宝庫として学ばねばならないのだ。

第二に、われわれはレーニン死後ゆがめられ、誤たれてきたコミンテルンとその諸党の活動を批判的に検討し、とくに日本プロレタリア運動の戦闘的な闘争の歴史と、それだけに悲痛をきわめた指導部の無能と誤りを明らかにしなければならぬ。壮大なプロレタリア世界革命の口火となるべきロシア十月革命も、スターリニストの度重なる裏切りによって孤立させられゆがめられてしまった。帝国主義は、国家独占資本主義として新たな延命を続けている。

打倒すべき資本主義の現実―日本独占資本主義の形成過程は、プロレタリアートの公認指導部の無惨なうらぎりの歴史をはなれては絶対に理解できるものではない。ドイツの、フランスの、イギリスのイタリアの、幾度びかの決戦に、スターリニストの手によって苦

全同志諸君！

同盟の思想的組織的結集の最初の段階は終わった。われわれは自らを革命的決意に燃えた戦闘的集団として結集する任務の上で、すでに一定の成果を上げた。

われわれは、今やこの基礎の上に立って、同盟の活動の基本方向をより一層明確にしなければならぬ。

われわれが可能な力をあげて、同盟の基本的活動方針―綱領―を明らかにするために努力してこそ、今後の活動は一層の前進をもたらすであろう。

それは同盟を、単なる左翼反対派の集団としてではなく、近代的前衛政党に発展させる決定的要因となるだろう。

日本ブルジョア権力の打倒によって、プロレタリア世界革命の偉大な尖兵となるために、日本プロレタリアートは、今こそ明確な革命の方針を明らかにせねばならない。

そしてブルジョアジーに対する一切の妥協を排除して、断乎たる戦闘的方針によって自らを武装せねばならないのだ。

中央委員会は、このような観点から同盟暫定規約の改正と共に、同盟の基本的な活動方針―綱領の作成に具体的な努力を開始することにしたのである。

②

われわれが綱領を生み出してゆくためにとりくまねばならない点はなにか、その第一は、マルクス・エンゲルスが「共産党宣言」・第一インターの創立宣言、規約やその他第一インターの文書におい

杯をなめた全世界プロレタリアートの四十年の経験を、われわれは、今こそ学ばねばならないのだ。

コミンテルン第六回大会以来、公認マルクス主義―スターリニストの中では、一国革命路線の必然的な帰結として世界プロレタリアートの一般の方針、世界党の綱領の存在自身を無視し、無用視する傾向が広まっている。それは一九五七年のモスクワ一二ヶ国宣言や、平和の呼びかけに見られる通り、たかだか各国の運動の共通点を、それも誤って羅列したり、一般的な「全ての平和愛好の人々」によびかけるにすぎない。そこには、マルクスがなしたげた資本主義批判の偉大な科学的所産も、ゆがめられぬ社会主義への展望もなければ、プロレタリアートに、ブルジョアジーへの決然たる闘争をよびかける革命的決意もない。あるのはプロレタリア世界革命の代りに、一国革命と平和的共存、ブルジョア権力との非妥協的闘争の代りに、ブルジョアとの階級協調、議会主義、平和主義の雑炊ばかりであるそこでは、内容の是非をいう前に、すでに、国際的な帝国主義を分析し、国際的階級闘争の一般の指針を持つ努力自体が否定され、プロレタリアートの闘争は、民族的枠の中にそれも日和見的にとじこめられるようきめられているのだ。

われわれの綱領は、このような点からいうならば、なによりも国際プロレタリアートの綱領、プロレタリア世界革命への展望を明らかにするものとして作られねばならぬだろう。

第三に、そのような国際プロレタリア革命の展望の上に、われわれは、日本プロレタリアートの具体的任務を明らかにせねばならない。それは、日本資本主義の分析の上に日本プロレタリアートの苦難にみちた闘争の経験を科学的に総括することによって明らかとな

ることだろう。

戦前、スターリン主義者によって暴力的に抑圧された三テーゼ草案にみられる通り、日本のプロレタリア運動は科学的綱領を持つために少なからぬ努力を払ってきた。しかし、二十七テーゼ、三二テーゼ等とつづくクレムリンの官僚主義者の強圧は、わが日本の理論戦線をも不毛なものにせずにはおかなかった。

戦後のスターリン主義者のドグマをこつけないまでに戯画化した五一綱領から、現在の党章に至るまで、日本共産党は、その基本戦略において何一つ正しいことを語りえぬ、その理論的無能を決定的に立証している。帝国主義戦争の決定的前夜に絶対主義「天皇制打倒」と二段階革命論のドグマによって、いうに足るほどのプロレタリアートの闘争が組織することができなかった日本のマルクス主義的前衛は第二次大戦中の決定的瞬間も無為にすごすしかなかった。

第二次大戦後、四六、四七年の革命的昂揚の時期を、共産党の右翼日和見によって、決定的混乱においやられた日本プロレタリアートは、四九年のブルジョアとの決戦に無惨に敗れて以来、未だに続く共産党と社会民主主義者の日和見主義的指導によって苦闘している。社会民主主義者が誇称する「旧左社綱領」は「社会主義革命」を名のるとはいえ、すでに証明済みの第二インターの改良主義を基本的のりこえることができなかった。彼らの政治的破産は、もはや革命的プロレタリアートにとっては常識である。

日本のプロレタリアートは、ただの一度も正確な戦術方針で自らを武装したことはなかった。

この様な時、われわれが、マルクス・レーニンの革命的方针の上

べき綱領を自らの手にしうるであろう。

中央委員会は、以上の一般的な方針に基いて綱領作成の努力を開始し、綱領起草委員会を任命した。

われわれは綱領作成を中心議題の一つとして同盟第三回大会を組織するであろう。

第一次草案は、まもなく作成されるであろう。

われわれは、ブルジョア権力に対するにくしみの精神で、プロレタリアートをきたえるために、来たるべき日本革命とプロレタリア世界革命の勝利のために、わが同盟の旗の下に、プロレタリアートの結集をはかるために、綱領の討議を、大衆的に、公然と展開せねばならない。

ブルジョア権力の転覆と、プロレタリア世界革命の勝利のため、共産主義者同盟を強化せよ！

科学的指針の確立のため、全同盟の力を結集せよ！

一九五九、七月十二日

アートの任務を明らかにし、その不可分の一環としての日本プロレタリアートの任務を明確にすることは、何よりも正確な方針をまちつづける日本のプロレタリアートにとって最初の正確な方針として、その解放闘争に決定的な武器となることだろう。

それは、依然として国民党論などとの論争に主要な精力を注がねばならない社会党労働者にとっても、「日本」の民族的解放と民主主義的変革のための任務を絶対視する党章に悩む共産党労働者にとっても大きな力となることだろう。

われわれは、この様な期待に応えうるものをつくるために綱領作成に真剣な努力を注がねばならないのだ。

③

われわれの綱領は、何よりもまずマルクスの偉大な科学的経済学—資本主義批判—に立脚せねばならない。そして同時にそれは、階級闘争の歴史的教訓を十分に検討し、摂取したものでなければならぬだろう。ロシア十月革命の成果も、世界革命の度重なる敗北も貴重な教訓として、われわれは学ばねばならない。そうして、日本の現実の資本主義とプロレタリア運動の展望を語るために、全力をあげねばならないのだ。

帝国主義時代の現実の客観的過程は、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争の過程として、とくにプロレタリア前衛の活動という主体的要因をはなれては、明らかにすることはできない。

われわれは、この様なプロレタリアートの闘争の総括としても、自らの綱領を明らかにすることによって、始めて、それは単なる資本主義批判の教科書としてではなく、現実の階級闘争の武器となる

〔一三頁から続く〕

すでに同盟中央委員会によって召集された共産主義者同盟第三回全国大会は、このような現状勢における革命的階級建設の任務を明確にうちだすことによって、要求されている同盟の質的飛躍をなしとげる歴史的大会となるであろう。

この大会によって、飛躍の発条を与えられた同盟は、一九五九年の秋を、労働者階級の転機たらしめるための戦闘態勢に入るのである。

そして、確信をもって、「真の革命的政党は樹立された。戦闘的労働者はその党—共産主義者同盟に結集せよ」

と、そのスローガンを書きあらためる日を近い将来に來らしめるであろう。「誇るべき民族の旗」を引き裂き、あらゆる黄色の、桃色の、うす汚れ、色褪せた朱白色の旗の立ちならぶなかで、階級の血で浸された真紅の幟を高く掲げて、若き革命家の組織—共産主義者同盟は、労働者階級の階級前衛政党となり、ブルジョアジーを震撼せしめるであろう。

さらに歩を進めよ!!

一九五九年八月

共産主義者同盟綱領草案

1. 資本主義と共産主義

ブルジョア権力の打倒とプロ

レタリア独裁の樹立

人類の最後の階級社会である資本主義社会は、資本家階級によって、労働者階級が搾取される社会である。

資本主義は前資本主義社会にみられた身分的束縛、経済的強制を撤廃し、形式的には人格の自由と、身分的平等をもたらした。しかし、社会の基本的な財貨を生産する労働者階級は、労働し生産するための生産手段から、まったく切り離されている。生産手段は、資本家や、土地所有者によって支配されている。だから労働者は、無産労働者として、自己の労働力を商品として資本家に売る以外に生きてゆく方法をもっていない。資本家階級は、労働者に、労働力の価値として、生きるだけに足る賃金を支払うだけですべての生産物を商品として、自己の支配下におくことができる。労働者が最低生活に甘んずる一方、彼らはすべてを搾取する。

資本家階級は商品交換を通じて、地球のあらゆるところと関係を結び、地方的であり、民族的であった昔の自足と隔絶を、あらゆる方面との交易や民族相互のあらゆる面にわたる依存関係におきかえた。資本家階級は、世界市場の搾取を通じて、まばゆいばかりの富を蓄え、彼らはこれを土地所有者や、利子寄食者と分けあって、所有者階級を構成している。

だが、このような富の蓄積は、本来人間のもっとも自然な活動である労働 \parallel 生産活動を商品による商品の生産として、資本による資本の生産として、労働者自身にとっては自分を商品にしてゆく苦痛に満ちたものとするることによってなすとげられてきたのである。働いても働いても、それは資本家階級を富みこやすだけである。それだけではない。資本家階級はこうして得た富を、新たな資本として蓄積し、労働者を新たに支配し、搾取する手段とする。労働者は働くことによって、益々資本家の鉄のくびきを強めていくのだ。

社会の一方には、益々目もまばゆい享樂とぜいたくが集中するのに、他方では働けば働くほど労働者の地位は惨め

なものになる。資本主義は、本来人間的活動である労働そのものを、労働者にとってたえがたいものにし、彼を非人間的な存在にしてしまう。あらゆる貧困と絶望と墮落した諸現象も、二大階級の対立した資本主義社会の根本的矛盾にもとづいている。

この貧困と、抑圧の増大と共に、労働者の反抗も増大する。だが労働者階級は、無意識的に、資本家階級に抵抗するだけでは自己を解放できない。なぜなら賃金奴隷の地位から抜けだすために決然とした行動に起ち上ることなしには、彼はいつまでも市場の動搖にさらされる商品であり、機械の附屬物にすぎないからである。

しかし世界市場の形成は自由な協同社会におけるすばらしい発展の可能性を予見させる物質的富を蓄積すると共に、この世界市場そのものに対立するプロレタリアートの国際的団結を作りだす。資本主義は何よりも、それ自身の墓掘人を生産するのだ。資本家階級の没落と労働者階級の勝利は、ともに不可避である。

労働者階級は、その団結した力によって、私的所有を廃止し、生産手段を全社会の所有に移し、生産を資本による生産としてではなく、全社会の共同の生産として組織しなければならぬ。このような労働者階級の行動は、資本家階級に抑圧され収奪されるすべての勤労人民をも、最終的に

解放するものである。それと共に人類の前史は終りを告げ、人間性の完全な開花をもたらす真の人類史が切りひらかれる。

生産力が高度に発達し科学技術の飛躍的上昇と教育の普及によって、肉体労働と精神労働の対立が消滅した時、労働は完全に自由意志にもとづいた人間の自然に対する最も主体的な活動となる。そこでは、もはや何の強制もなく、働きたいだけ働き、必要なだけ生産物をとることができ

る。各個人に固着した人間の職業的分割は、当然ここには存在しない。各個人は、民族のおよび地方的制限から解放され、それぞれの自由な発展が、すべての人々の自由な発展にとつての条件となる共同社会が作られる。

労働者階級は、資本主義を打倒して、このような階級社会を止揚した社会 \parallel 共産主義社会を実現するために、全力をあげねばならぬ。

もちろん生産力が未発達なままで完全な共産主義に進むことはできない。さしあたり労働者階級は、社会的生産を共同の生産活動として組織し、唯一の基準、労働の量に従って生産物を分配する社会、社会主義社会を作らねばならぬ。

この社会ではすべての人は各人の能力に応じて働き、働

きに応じて生産物をうけとる。ここには病人や不具者でもないのに働かずに他人に寄食する者の入る余地はない。社会主義社会では、もはや生産は価値関係を媒介にした商品の生産という廻り道をとる必要はない。直接労働量に従って、社会的労働は配分され、生産物も分配される。貨幣、賃銀といった旧社会の遺物はもはや存在できない。

労働者階級は「自由」や「民主主義」「平等」といったブルジョアイデオロギーにだまされることなく、資本家階級を打倒し、全く和解できない二大階級労働者の対立を中軸とした資本主義社会を止揚するために非妥協的に闘う以外に自己の解放の道をもたない。

搾取者を収奪するため、階級社会そのものを止揚するために、労働者階級は闘わねばならぬ。

国家は、階級社会にあって、支配階級が自己の所有と利益を全社会の名を潜称して貫徹するための組織である。資本主義にあっては私有財産の安全の名のもとに、各民族国家は所有者階級の利益を守るために彼らが作った支配機構である。

従って労働者階級は、資本家階級を打倒するためには、まず資本制国家権力を粉碎し、自己の階級的権力を作らねばならぬ。

資本家階級を収奪し、すべての勤労人民を味方にひきつけて、共同生産を組織し、反革命を粉碎するプロレタリア独裁の道を通ずることなしに、共産主義社会建設にすむことはできない。

一民族国家におけるブルジョア権力の打倒と、プロレタリア独裁の権力樹立は、必然的にブルジョア的な民族国家の障壁を打ち破る世界社会主義革命の導火線とならねばならない。

社会主義や、ましてや共産主義が一国において組織されると考えるのは愚劣な空想である。

それは、全世界の主要地点でのプロレタリアートの共同行動として、はじめてもたらさるべきものである。

わが共産主義者同盟は、資本制国家権力を転覆し、全世界にわたるプロレタリア独裁権力の樹立と、それを通じた全世界の社会主義・共産主義建設を、基本的な任務とする。

われわれは当然万国のプロレタリアートの団結と、全世界の資本家階級に対する闘争の結合を達成するため努力する。

われわれは、すべてのくさりきった社会の汚物、資本家を始めとした所有階級に対する火のような憎悪と闘争の精神をもって武装し、闘争においてプロレタリアートの利益を守ることを無条件の義務とする。いかなる理由によるに

もせよ、両階級の対立を緩和し、おおいかくそうとする反動的幻想と徹底的に闘う。

資本主義の改良や改革ではなしに、資本家階級との融和や協調ではなしに、われわれは資本主義そのものの打倒のために、資本家階級に対する明確な敵対の意識をもってわれわれは闘うのである。

2. 帝国主義と国家独占資本主義

プロレタリアートはどう闘うべきか

ブルジョア階級は、イギリスでもフランスでも、近代の市民社会（資本主義社会）を作るため旧来の絶対主義的な権力を打倒する闘争に加っていた。

だが、ブルジョア民主革命は、新しいより高度の階級支配をもたらすものにすぎなかった。階級支配そのものを打倒するために、プロレタリアートは、パリケードをへだてて、ブルジョア階級と闘わねばならなかった。

一八四八年の革命で、パリコミューンで、西欧のプロレタリアートは、新しい歴史の担い手として登場しはじめた。一九世紀になると、資本主義はもはや変革するべきもの、消滅すべきものとしてのその性格を一層明かにしたのであ

る。資本主義は自らの自由な政策を基調とした産業資本主義の時代に代って、帝国主義の時代に入ったのである。

一九世紀末には、資本主義はもはやイギリスだけに止まらなかった。ドイツが、アメリカが、そしておかれて日本が次々と資本主義的発展の道を進んだのである。おかれて資本主義に成長した諸国では、資本主義は自由な産業資本主義にはならなかった。

資本主義が発達し、技術水準が高まる時、固定資本の規模は巨大となる。こういう時資本主義に成長する国々では資本の蓄積は、もはや自己資本と単なる貸付資本の交流によって行われるだけでは充分ではない。株式会社形式を通して、一挙に巨大な資本を集中、集積し、産業資本を従えた銀行資本による金融資本が確立される。そして、カルテル、トラストといった資本の独占的結合が進み、金融独占資本の支配する資本主義の最高発展段階としての帝国主義となるのである。このようにして、おかれて資本主義に成長する国は一挙に最も近代的な帝国主義国となる。

帝国主義は、固定資本が巨大化するために、生産力水準の圧倒的な上昇にもかかわらず、産業予備軍は一層龐大なものとなり、恒常化する。

停滞した失業者の重圧は、前資本主義的な諸関係がブル

ジョアの分解することを妨げ、独占価格等による農民や小企業家の収奪や、労働者の賃下げを独占資本に許すことになる。

慢性化した失業、食うにも食えない労働条件のおしつけは、労働者階級にも、一般労働人民にも、はげしくおそいかかってくる。

長くいつまでもつづく不況、恐慌は、もはや資本主義が全くその歴史的生命を終ったこと、新たな社会関係、社会主義の条件が熟しつつあることを示している。帝国主義はプロレタリア革命の前後である。

プロレタリアートは、ブルジョアジーを打倒する以外にもはやいかなる前進の道もたない。

資本主義的分解を阻止されたまま、独占資本に収奪される農民や一般労働人民の要求も、プロレタリア革命によってのみ解決される。人民の一般民主的要求をみたすものも、もはやブルジョアジーではない。

プロレタリアートこそ、社会主義革命によってすべての社会的問題を解決しうる能力を持った唯一の階級であることは決定的に明らかとなる。

広汎に資本主義以前の関係をのこしたまま帝国主義国となる後進資本主義国においても、もはやプロレタリア革命以外に、いかなる社会的矛盾の解決もありえない。

第一次世界大戦において帝国主義諸列強の中で、最も弱い環ロシアにおけるプロレタリアートの勝利は、壮大な全世界社会主義革命の勝利の口火となるべきものであった。レーニンとトロツキーに指導されたロシアプロレタリアートの闘争は、資本主義に直接危機の時代をもたらしたのである。「偉大な時代がはじまった。全世界社会主義革命の時代が！」とコミンテルンの宣言は万国のプロレタリアートに呼びかけたのであった。

だが社会主義革命は、資本主義の危機の機械的自動作用によつては起らない。階級全体からの意識的前衛の組織的独立と、その前衛の正しい政治指導は、労働者階級の解放の第一条件である。

事実、ブルジョア民主主義革命の完遂をまっけて、プロレタリア権力の樹立のための非妥協的な闘争を怠ったメンシェヴィキや、四月の古参ボルシェヴィキの日和見をのりこえたレーニンの帝国主義段階におけるプロレタリア革命の戦術によつてこそ、ロシア革命は勝利したのである。だがこのロシア革命によつて口火が切られ、硝煙のくすぶりのまだやまぬヨーロッパの廢墟の上で闘われたドイツ、ハンガリー、イタリアの革命運動は、旧制度を転覆するに十分なほど強力なものであったにもかかわらず、これを指導する党の生長がおくれたために、いずれも重大な敗北を喫し

とくに後進資本主義国が帝国主義列強として、世界市場の争奪戦に参加することによつて、世界は分裂した諸市場圏の激烈な闘争の場となる。商品と資本の市場を確保するために、金融資本は、国家権力を動員して、武力による世界制覇をおそれぬようになる。

市場の再分割のための激烈な競争と闘争は、必然的に帝国主義の武力衝突と、帝国主義世界戦争をひきおこす。

資本主義の危機的様相——帝国主義世界戦争において、端的に示されるその深刻な危機は、ただ帝国主義戦争を内乱へ、ブルジョア権力の敗北と打倒のために闘うプロレタリアートが、自ら権力を握ることによつてのみはじめて解決される。

分割された世界市場は、そのはげしい競争と衝突の中で全世界の階級闘争をより強くむすびつける。一国のプロレタリアートの闘争は、全世界プロレタリアの闘争の一環である。一国におけるプロレタリア革命は全世界プロレタリア革命の直接の導火線となり、プロレタリアートは、全世界的にのみ勝利しうることは益々明らかとなる。

プロレタリア革命を一民族社会の域内での、自足的なものと考えるの幻想は、帝国主義世界の現実の前に、決定的にその破綻を曝露せざるをえない。

一九二三年、社会民主主義者とのあやまてる統一戦線の維持のために、決定的瞬間における行動に逡巡したドイツ労働者階級の敗北を最後に、革命運動は退潮しはじめ、ロシアのプロレタリア権力は孤立した。

この孤立化したプロレタリア権力の維持を自己目的化し、レーニン死後、ついに、ロシア共産党とコミンテルンを支配するにいたったスターリン主義者の誤謬によつて、ロシアプロレタリアートにつづくべき全世界プロレタリアートの闘争は、敗北の歴史をたどることとなった。

一九二五年、イギリスの炭坑労働者のゼネストは、大衆の革命化のために、失われた信望を、ロシア労働組合の名のもとにつなぎとめておこうとした改良的幹部の策略（英露委員会）と、彼等との統一を求めたスターリン主義者の手によつて苦杯をなめさせられた。

中国では民族ブルジョアジーに追従するスターリン主義者の方針はプロレタリアートに血の犠牲をしいた。

社会民主主義者とスターリン主義者との裏切りに助けられて、金融独占資本は、自己の社会体系を救いつつ、熱狂的な投資によつて最後の蓄積の努力をつづけた。しかしこの熱狂は、やがて大恐慌による沈滞をもってうけつがれた。資本の破壊の影響は、巨大なる新設固定設備による生産能力の過剰として現象し、数百万の労働者が街頭に投げ

だされる一方で、機械は、何十カ月にもわたって運転を休止せざるをえなかった。支払手段調達のための株式の大量売却が生みだした株式恐慌の危機の様相は、資本市場に規制される従来の金融資本の蓄積の様式をもってしては、もはやこの巨大に発達した生産諸力を処理することができなくなったことをしめしていた。

大恐慌の混乱から生みだされた階級対立の激化は、帝国主義戦争と十月革命にひきつづく国際的な階級決戦が迫りつつあることをあきらかにした。ドイツの金融ブルジョアジーは、国家の強力な介入によって搾取する条件を大巾に拡大するために、ファシズムを自ずからの政治的支配の道具として利用することを決意した。しかしスターリン主義者は改良的指導下にある社会民主党労働者との反ファシズム統一戦線の実現によって、革命的危機における情勢を一変するために闘うのではなくて、「社会ファシズム」論にもとづく最後通牒主義によって、かたくなにその統一戦線を阻止し、全世界プロレタリアートの注視の中に、最大の敗北を喫したのである。

一方、フランスのプロレタリアートは巨大な階級的力量を撥揚してたちあがり、ファシストの力を徹底的にくじき、統一戦線政府を実現しはした。しかし、崩壊しかけているブルジョア民主主義を支えることをめざして、プロレタリ

アの綱領をすてた人民戦線政府は、既にその生命を終えた帝国主義段階の資本主義の法則性に答える政策も採用できぬままに、みずからの命を断った。

かくして社会主義革命によって、とってかわられるべき世界資本主義は、プロレタリア革命の挫折によって、新しい延命の形式を見出した。

一九二九年、大恐慌とそれにひきつづく階級対立の激化の中で、深刻化する危機を、資本主義は、国家独占資本としてのりこえようとした。それは軍事技術の一層の発展、オートメーション、原子力産業等の導入による固定設備の一層の巨大化と景気の不安性から生ずる投資リスクの増加を、資本家社会的な方法で、現実的に解決しながら、ますます生産力と、所有形態との矛盾を激しくせざるをえないという蓄積の様式を展開する。

支配権を握る株主は、中小株主を無力化し、会社の利益を必ずしも配当にあてることなく、会社自身の財産に留保し、固定資本の巨大化にともなう莫大なる資金を調達する機構としてそれを確立する。この自己金融の結果、資金は資本市場の制約から解放されて、企業の拡張をきわめて容易なものになると共に、資本は異常に高度な集中をなしとげる。国家機関によって補完された自己金融の蓄積の様式

は、金融資本が、株式資本を動員した状況の一層発展したものであり、資本所有と経営機能のより新たな関係に伴って、あたかも資本の社会化が行われるかのような幻想が生れる。

しかしもともと株式制度に必然的な群小株主のレントナリ化が進められ、小数の支配的株主の利害が、会社それ自体の利害としてあらわれるとゆう外観の下で、少数の株主の私的所有が一層強化される。

ここに権力による強制措置によって、租税等によって集中された莫大な社会的資金を、低利長期の国家資金として重要産業部門に供給したり、あるいは税制や、金利政策によって独占利潤を維持し、もしくは蓄積を促進するなどの措置が講ぜられたり、また私的資本によってはもはや担当しえないが、資本主義再生産の存続には不可欠の部門は、会社所有より高度の国家所有に移される等の手段によって、国家の直接の介入がおこなわれれば、これらの私的所

有はますます強化されるであろう。これは私的所

有の基礎の上における私的所

有と、国家的所

有の結合という資本主義の性格の変化をもたらすのであり、これが国家独占資本と呼ばれるものに他ならない。

国家独占資本主義は、資本主義がすでに巨大に発展した生産力を自らの自由な運動様式の中に包摂しえなくなった

ア

の綱領をすてた人民戦線政府は、既にその生命を終えた帝国主義段階の資本主義の法則性に答える政策も採用できぬままに、みずからの命を断った。

かくして社会主義革命によって、とってかわられるべき世界資本主義は、プロレタリア革命の挫折によって、新しい延命の形式を見出した。

一九二九年、大恐慌とそれにひきつづく階級対立の激化の中で、深刻化する危機を、資本主義は、国家独占資本としてのりこえようとした。それは軍事技術の一層の発展、オートメーション、原子力産業等の導入による固定設備の一層の巨大化と景気の不安性から生ずる投資リスクの増加を、資本家社会的な方法で、現実的に解決しながら、ますます生産力と、所有形態との矛盾を激しくせざるをえないという蓄積の様式を展開する。

支配権を握る株主は、中小株主を無力化し、会社の利益を必ずしも配当にあてることなく、会社自身の財産に留保し、固定資本の巨大化にともなう莫大なる資金を調達する機構としてそれを確立する。この自己金融の結果、資金は資本市場の制約から解放されて、企業の拡張をきわめて容易なものになると共に、資本は異常に高度な集中をなしとげる。国家機関によって補完された自己金融の蓄積の様式

ことを示すと共に、同時に国家機関を動員した公共的性格の強化の中で、資本主義的生産様式が新たな生産力の動員を可能としたものにほかならない。

国家独占資本主義は、直接に社会主義を準備するものである。

プロレタリアートは自己の階級支配をうちたてれば、中心的な産業を収奪することによって、労働量による社会的労働の配分と、生産物の分配という社会主義的原则を、きわめて容易にみちびきいれることを可能にするに違いない。

その際、国家独占資本主義につきものの信用、財政等は、ただちに死滅しないで、その階級的内容を変えつつ、管理、簿記、計算等の経済的変革の道具として、利用されるものとなるにちがいない。又、国家独占資本主義のもとでは、農民その他の小商品生産者の収奪機構である配給管理制度や、財政は、労働者階級が権力を奪取し、自らを支配階級に高めた時には、急速にこれらの小商品生産者を、自己の側にひきつける横杆に転化することができるに違いない。

このように国家機構との結合を強めた公共的性格の強化の中で、社会主義の物質的準備は、完全に爛熟しきっている。

プロレタリアートの決然たる行動と、政治権力の奪取こそが、全ての可能性を切り開く。国家独占の「公的性格」

に眩惑された一部の「現代マルクス主義者」が流布するようになり、政治権力の奪取の展望を欠いた単なる企業の「国有化」の促進はそれ自体決してプロレタリアートの解放の道を切り開くものではない。個別的金融資本のそれぞれの有形無形の抵抗があるにしても、国家独占資本主義は権力によって私的所有を集中的に擁護するものに他ならないからである。

それ故に公企業、大独占部門の労働者の行動に一切の鍵がにぎられている。そしてそれらの労働者の行動は、容易に国家権力との対立をまねき、自らの決然たる行動なしには、いかなる矛盾の解決もありえないことを、日々の階級闘争の現実の中で明らかにせずにはおかないであろう。

さらに国家独占資本段階では、生産力の発展は直接に民族領域と衝突せざるをえない。

ブルジョア経済の国家的障壁をこえた結合は、この段階では一層進む。

一国のプロレタリア革命は、必然に世界プロレタリア革命の一環となり各国のプロレタリアートの連帯は、客観的に益々強く要請されることとなるであろう。

ブルジョア的な国家的分割を止揚し、全世界を単一の共同体、社会主義社会に組織する任務はプロレタリアートの直接の任務となっているのだ。

の上にたち、包括的に政治権力を掌握する特殊な官僚層の出現として直接に現象している。

現在のソヴェト社会を支配するものは、十月革命の成果を棄奪し、世界革命の展望を放棄して、一国革命の幻想の中で、自己の特権的な支配を固めてきたこのスターリン主義官僚である。彼らの政策追求の目標は、自己の特権を維持するために、現状を維持し、均衡を維持することである。そのために彼らは、国際的には、政治的マヌーヴァーを通じて、死滅しつつあるブルジョアジーと取引をし、各国の党をしてブルジョアジーに圧力をかけさせるための外交政策の道具にかえてしまうことによって、階級闘争を救いがたい改良主義の道にひき入れる。国内的にも、国有化経済の発展にもかかわらず、労働時間の社会的配分と、労働給付に比例した生産物の分配の原則は採用されず、価値法則による生産と消費の規制が依然として、通用している実状である。しかも、数次の五ヶ年計画の成功によって、生産力の高度の発展がcaちとられたにもかかわらず、M T S解散、工場管理機構の改革等は、独立採算制の強化によって価値法則の一層の貫徹の方向を追求するものである。

現在のソヴェトは社会主義ではない。それは社会主義への歪められた過渡的存在である。

ソヴェトのプロレタリアートは、まだ完全に自らの解放

後進国における民族革命の中で、自己のブルジョアの発展をとげようとする民族ブルジョアも、必然に国家資本主義的な方策をとるようになった。プロレタリア運動は、こころでも明確に自己の権力の確立の任務に直面しているのである。

植民地の民族革命運動も、本国のプロレタリア革命とともに、単一のプロレタリア革命を形成する方向に進んでこそ、勝利の道はひらけるのである。

民族ブルジョアジーによる国家資本主義的安定の道か、プロレタリアートの権力の掌握か、道はこの二つの方向にしかない。いかなる平和主義的幻想をまねのけて、階級闘争の現実を、プロレタリアートに非妥協的な独自の闘争の決定的な重要性を教えているのである。

後進資本主義国、ロシアにおけるプロレタリア権力は、ドイツ革命の挫折によって、レーニンが「全くこっけいなことである」と嘲笑したロシア一国の経済的独立を強制することになった。プロレタリアートはただ全世界的規模にわたる勝利によってのみ、自己を解放しうる。従って、孤立化した過渡期社会は、そのままでは共産主義社会に徹底的に進むとはいえない傾向をもつこととなり、さまざまな歪曲化現象を生みだした。そしてそれはプロレタリアート

をかちとってはいない。労働は極度の差を伴った賃銀制度と、きびしい労働規律によって維持されている。

世界革命の勝利の中で、ソヴェトプロレタリアートは、特権的な官僚支配を打倒し、奪われた自己の政治的支配を回復するであろう。

特権官僚の存在は、プロレタリア権力の孤立とブルジョア権力の残存という特殊な事態を、物質的基盤としているのであるから、その闘いは、当然に、プロレタリアートの全世界的規模での解放と固く結合することなくして、勝利することはできない。

第二次大戦は、ブルジョア世界に、重大な打撃をあたえた。

東欧、中国の帝国主義体制からの離脱、植民地諸国の政治的独立と経済的強化は、帝国主義の支配をゆるがせた。

なによりも、アメリカをのぞく主要な資本主義国は、すべて戦争によって重大な損害をこうむった。

アメリカ帝国主義の決定的な優位の確立は、このようにしてもたらされたのである。

世界は、ソヴェト、中国を中心とした陣営と、資本主義世界とに分裂した。

しかし、現在の世界の発展を決定するものは、決して、

いわゆるソヴェト・ブロックと、アメリカ・ブロックとの体制間の生産力の競争ではない。

両体制を共通する単一の陣営、世界プロレタリアートが国際ブルジョアジーに挑む階級闘争こそ、世界史の帰趨を決するものである。

帝国主義の打倒と、全世界プロレタリア革命の完遂、という共通の目標に向って、先進資本主義国のプロレタリアートも、植民地従属諸国のプロレタリアートも、ソヴェト、中国、東欧のプロレタリアートも一致して進まねばならぬこの闘争の中で、ソヴェト社会を支配する特権的官僚層の支配を打倒し、プロレタリア権力を復活するため闘かねばならぬ。

アメリカを中心とした帝国主義諸列強は、戦後の再建過程を基本的に終り、新たな資本の蓄積の強化の中で、再び激烈な市場再分割の闘争に入りつつある。

もちろん、帝国主義列強の闘争は、直ちに軍事的対立にまでは進まないかも知れぬ。

しかし、あらゆる幻想をうちやぶって、激化する資本の競争は、相互の公然たる衝突と、なによりもプロレタリアートとの決定的な階級対立をあらわなものとするだろう。

共産主義者同盟は、平和共存とソヴェトの生産力の上昇によって、世界社会主義を建設するというような、全く非

革命的な見解をみとめない。

先進国と植民地におけるプロレタリア革命の勝利のために、ブルジョア階級に対する決定的な闘争を、プロレタリアートは準備せねばならないのだ。

3. 日本革命の展望と日本

プロレタリアートの任務

日本は高度に発達した資本主義国である。その発展の特異な形態から、そこでは完全に資本主義的経営になりきらぬ農民や、小企業者の龐大な存在をむしろ条件として、全経済は完全に帝国主義的資本主義経済となっている。

日本資本主義が、このような異常に高い発展段階に到達したことは、帝国主義の打倒を、プロレタリアートの唯一の課題たらしめるものである。革命の困難がどれほど大きく、一時期にどれほど大きな敗北を招くことがあろうとも、あるいはまた反革命の波がどれほど強力であろうともプロレタリア革命をかちとることなしに、帝国主義が作りだした社会的袋小路から脱け出る道はないのである。

日本における資本主義の発展は、明治維新によってその端緒が切りひらかれたが、それは先進資本主義諸国がまさ

に帝国主義段階に移行しようとする時期であった。これら先進資本主義諸国間の競争の激化による圧迫と植民地化の危険に抗しつつ、本源的蓄積の過程を強行した日本の資本主義は、自由な政策を基調とした産業資本主義には成長しなかった。

近代的生産様式の移植、育成は、始めから、官営による機械制大工業によって行われ、それに要する莫大な資金は財政、株式会社、機関銀行等の機構を通じて集中せしめられた。

こうして移植された大工業は、有機的構成が高く、大量の労働者を相対的に必要とはしなかった。そして、必要とする労働力も、繊維部門等では婦女子の労働力を徹底的にしぼりつくすことによってまかなうことも出来た。それは自由な労働力商品を生みだす原始的蓄積の過程をゆがめ、農業における資本主義的経営の発展をおしとどめた。地租改正、紙幣整理の過程で没落した農民は、高い小作料にかかわらず土地にしがみつき、それに寄生する「寄生地主制」を成長せしめることになった。

食うにも食えない賃銀と悲惨な労働条件にあえぐ労働者と、高額の小作料に悩む貧農の犠牲の上に、蓄財をつづけた日本の資本主義は、次第に近代的帝国主義として、自らをきたえあげていった。それは、国家の支援による本源的

蓄積を楨杆として、始めから政商的利権を基礎とする株式会社企業として出発し、持株支配会社を頭にいたしながら、銀行との封鎖的な結合を強めた財閥コンツェルンという特殊な形態で確立した。

しかし、第一次帝国主義戦争で、帝国主義諸列強の闘争の間隙をぬって、漁夫の利をえた日本帝国主義も、増大してゆく労働者階級の団結と、激化する市場争奪戦の中で、自らの延命をますます必死に、あがき求めざるをえなくなる。

第一次大戦の比較的順調な資本蓄積の過程が生みだしたデモクラシー運動と、政党政治は、公然たる軍事的警察的独裁によっておきかえられた。それは明確な革命的展望をもちえなかったが、果敢な闘いをもって反抗をつづけてきたプロレタリアートの戦闘組織を野蛮にせん滅しつくすことによってなされた。

また、極東における市場分割の死闘は、やがて日米帝国主義者の公然たる軍事的対立をまねいた。戦時経済の要請は、巨大な重化学工業の発展を促した。これらの部門への進出は、龐大な固定資本の調達にこたえる大規模な資金の集中を必要とし、財閥の封鎖性を桎梏たらしめずにはおかなかった。株式公募、信用体系に対する国家統制、国家資金の散布等の手段により、日本帝国主義は、国家独占資本

主義へと推転した。

これらの努力にもかかわらず、最大の資本家的富を集積したアメリカ帝国主義者の力量の前に、日本帝国主義者はついに屈服せざるをえなかった。

しかし、第二次大戦によって壊滅的な打撃をこうむった日本資本主義は、おそいかかるプロレタリアートの攻勢を、いくつもの譲歩によってきりぬけることに成功した。彼らは農民に土地を解放し、小農として若干の保ごを与えることによって、プロレタリアートの闘争をきりはなし天皇制権力を背景にひっこめ、人民にブルジョア民主主義的権利を与えることによって、自己の政治的威信をつなぎとめようとした。

このような方向は、第二次大戦での仇敵日本の弱体化を狙うアメリカ帝国主義者の意図とも一致した。

しかし、敗戦、占領という事実は、日本ブルジョアジーにいくつもの後退をよぎなくさせたといえ、日本資本主義の合法的発展を無視したアメリカ帝国主義の専横なるまいや、「全一的支配」を結果しはしなかった。むしろアメリカ帝国主義者の占領政策は、「民主化」の偽装のもとに、日本資本主義者の合法的発展を、劇的に促進した。財閥の解体は、国家独占資本主義の発展が、財閥の封鎖的性格を、解消せしめる方向に進むことをはやめ、徹底

化した。復金再融資、見返り資金特別会計等の国家による資金の援助は、戦争経済によって推転を必然とされていた国家独占資本主義の機構を保存せしめようとする意図からでもものに他ならなかった。

四七年の決定的高揚の時期を、指導部の日和見によってたじろいだ日本プロレタリアートは、四九年のブルジョアからしかけられた決戦に、再び指導部の無能と動揺によって、闘わずして敗れねばならなかった。

一応の政治的安定をもちとった日本ブルジョアジーは、アメリカブルジョアジーとの間に、帝国主義的な階級同盟を結び、経済的力量を強化して、再び海外市場への進出と一大帝国主義国への飛躍を夢みてきた。

国家独占資本主義は、租税や零細な国民貯金（資金運用部資金）を源泉とする長期かつ低利の国家資金を、主として開発銀行、輸出入銀行を通じ、他方では興銀の金融債引き受けを通じて、動力、輸送、重要輸出品を生産するような巨大独占資本に、設備資金として融資する機構を確立する。このもとで巨大独占資本を中心とした蓄積は、ますます進行した。

戦後十四年、彼らの努力は、一定の成果をあげている。日本資本主義は、すでにその生産力において、戦前に数倍する実力をもつにいたった。

彼らは、自己の独占的な資本の集中を強化し、更に、近代的な帝国主義国へ向うため、政治、軍事両面でも、強力な努力を開始しているのである。彼らは特に、戦後の高揚期の中でよぎなくされたプロレタリアートへの政治的、経済的譲歩を、再び取り返すための努力も怠っていない。彼らは、小ブル層をはじめとした中間層を自己の側にひきつけて、プロレタリアートに対する攻勢を準備しているのである。

今日、日本ブルジョアジーは、アメリカブルジョアジーとの同盟を、さらに対等なものに修正しながら、結束した同盟関係をまもり、一部の小ブル層を味方にひきつけてプロレタリアートを支配している。

彼らの支配の形態は、ブルジョア的な民主主義の原則による議会制度である。

日本プロレタリアートは、日本ブルジョアジーの打倒のため、闘わねばならぬ。全面的に直接に政権の奪取にたいして準備すること、これが客観的事情によって、現段階の日程にのぼらされているところのプロレタリアートの任務である。

プロレタリアートは、明確に、自己の階級的目標＝資本家の収奪と社会主義の建設をかかげて闘わねばならぬ。

ブルジョア議会を、革命にいたる闘争の過程で、積極的

に利用しつつ、しかし終極的には、その粉砕と、プロレタリアートの独裁権力＝ソヴェト政府の樹立のために闘わねばならぬ。ソヴェトは、労働者が各工場を基礎に、一定比率によって選出した代表を基軸とし、地域別、産業別に一般人民層を含めつつ、組織される。ソヴェトは、単なる立法機関でなく、同時にすべての政治的、経済的行政機能を果す行動機関である。そこでは、行政機関勤務者にたいする人民の下からの点検の自由と、リコール権が保証され、彼らの報酬は、一般労働者の水準に定められる。こうして労働者は、完全に政治の疎外から解放されるのである。勝利せる日本のプロレタリア権力は、ただちに次の行動によって、全世界の社会主義革命の導火線となるであろう。

①すべての重要産業の国有化と労働者管理。

②金融機関の全面的国有化と労働者管理。

③貿易の全面的国有労働者管理。

④基幹産業を中心とした社会主義的計画経済の組織。

⑤機械・化学肥料・農業等の技術援助と国家の資金援助によって農村に社会主義的共同生産を組織する。

農業労働の分野でも労働量による分配の方向を強化する。

工業生産の発展と都市と農村の結合により農村人口の工

業労働への吸収をはかる。
 ⑥小手工業層の社会主義的組織化を物質的技術的に援助する。

商業の全面的国家管理の準備。

⑦交通・通信・報導機関の労働者管理

⑧労働時間の短縮・大巾賃上げ・労働量による配分原則の漸次的導入。

⑨大資本家の所有地邸宅その他の財産の無償没収。

⑩一切の秘密外交の公開、秘密条約の破棄。外国資本の投資借カンの無償没収。

全世界プロレタリア革命のための外交政策の推進。

⑪一切のプロレタリア的諸法規の廃棄。

⑫男女差別の全面的徹廃。

⑬すべての医療機関の無償利用の確立。

疾病者、老人・小児への完全な社会保障制度の確立。

⑭すべての教育の国家管理とその無償化。

教育の生産的活動との結合。共産主義的教育の普及。

⑮科学的研究の完全な自由と、科学者の自主的研究のための物質的援助。

⑯一切のプロレタリア的弾圧措置の徹廃。

労働者階級の政治活動の完全な自由。労働者階級の集会・言論・出版・結社の自由とその経済的保障。労働者の

ストライキ・街頭デモの完全な自由。
 労働者政治犯の即時釈放。一切のデッチ上げ事件の責任の追求。

⑰自衛隊・警察・公案調査庁・海上保安庁等のブルジョア権力機関の解体。

⑱ブルジョア裁判制度の廃止と裁判官の民主的選挙制の確立。

⑲労働者の武装による民兵組織。経過的なものとして、位階制の存在せぬ陸海空赤衛軍の建設。

日本プロレタリアートは、このような任務を遂行する中で、全世界プロレタリア革命のため、全力をつくすであろう。世界プロレタリアートの勝利の上に、プロレタリアートは、商品と賃労働のない社会主義社会を組織するのである。

このような日本におけるプロレタリア革命の開始は、全世界のプロレタリアート、とくにアメリカ、東南アジアのプロレタリア革命に重大な影響を与えるであろう。

日本プロレタリアートは、世界革命の遂行のため自己をプロレタリアの城塞とせねばならぬ。

それは、中、朝、ロシアのプロレタリアートが官僚支配を打倒し、プロレタリア権力を復活させるための闘争に巨大な影響を与えるだろう。

それは全世界プロレタリア革命の偉大な発火点として、

くさりきつたこれまでのインターに代る革命的共産主義者の世界的結集、新たなインターナショナルの展望をきりひろくにちがいない。

4. 共産主義者同盟と他のプロレタリア諸政党にたいする態度

かつて、共産主義運動の国際的指導部であったコミンテルン、コミンフォルムは、自らの破産によってスターリン主義の忠実な下僕たること、すでにプロレタリア前衛の組織たりえぬことを完全に証明した。

スターリン主義官僚に対する国際的な左翼反対派として、一九三八年に登場した第四インターナショナルは、一定の歴史的意義をもったとはいえ、現実の階級闘争において世界プロレタリアートを指導する上で決定的に無力であった。もちろん、第四インターに結集した革命的部分との行動における統一のために、われわれは努力するのである。

わが共産主義者同盟は、日本革命の勝利的前進の途上の真に世界プロレタリア運動を指導しうる新たなインターで

結集を強くめざすものである。

日本における既成の階級政党はすでに、完全に労働者階級の指導部としての資格を失った。

社会党は、そのおびただしい中間的構成分子にみられるとおり、中間的・妥協的性格をその特色としている。この党は一貫した動揺と日和見、平和主義および議会主義によって完全に毒されている。党内左派は、ブルジョアの手先である右派と絶えず争わねばならぬ状態である。この党は現在、労働運動の主流をしめてはいるものの、常に労働者階級の利益を裏切り、その階級の成長を阻んでいる。

日本共産党は、コミンテルン日本支部として結成されて以来、多くの革命的前衛をその隊列に加えながら、その国際権威主義と盲従主義によって、裏切りのな国際共産主義運動の道を共に歩んできた。

世界革命を放棄して一国社会主義建設を履行した結果、歪曲された過渡期を絶対化せざるをえなかったソ連邦「社会主義」に、物質的基盤をもった国際共産主義運動の日和見主義は、同時にこの党をも毒した。

三二年テーゼの誤った二段階戦略に導かれたこの党は、戦後においても決定的瞬間に全く無力であり、労働者階級の利益を裏切ってきたことは、幾度となく証明された。

現在では、平和共存に基づくブルジョアジーに対する中

立の政策で、その裏切りを完成している。

この党は現在、官僚主義とセクト主義とによって党内のヘゲモニーを確保している部分と、党内反対派との派閥抗争をくりかえしている。

党内反対派は、世界資本主義の国家独占資本主義への推転にともなう国家の公共的性格の増大に眩惑され、一握りの独占に対する国民的な統一戦線という没階級的な戦術を採用し、議会を利用して社会主義へ平和的に移行するという現代の改良主義・構造的改良派の立場にたっている。

日本の戦闘的プロレタリアートは、もはや断じてこれら公認の指導部の枠内に止ってはならない。既成の階級諸政党の日和見主義ときっぱり断絶することは焦眉の急である。しかし、日本共産党内の下部の革命的労働者は、党中央の官僚主義者の弾圧の中で、労働者階級の真の利益のために、闘おうとしている。われわれは、かれらの革命化を援助し、日和見主義打倒のために協力して前進するであらう。

共産主義者同盟は、日本プロレタリア革命を指導する新たな階級政党となるために、自らをきたえるであらう。

共産主義者同盟は、プロレタリアートの真の前衛部隊として、ブルジョア階級に対する戦闘精神で武装され、プロレタリアートの現実の闘争の先頭にたって闘うであらう。

プロレタリアートの貴重な闘争を、つねに重大な損失におきかえてきたのである。もはや、だんじてわれわれはこうした現状に甘んじていることはできない。

全日本のプロレタリア同志諸君！

今こそ、公認指導部の日和見主義を打倒し、すべての勇氣をふるい起して、世界プロレタリア社会主義革命の目標をはっきりとみつめ、新たな前衛の結集と正しい指導の確立のため全力をあげて闘わねばならない。

今こそ、共産主義者同盟の旗の下、新たな真のプロレタリア前衛組織に結集せよ。

日本プロレタリア革命のため、直ちに戦闘配置につけ！
偉大な明日のため、くさりきった資本家権力をぶちのめせ！

万国の労働者団結せよ！

新たなインターナショナルを結成せよ！

帝国主義を打倒せよ！

プロレタリア世界革命の勝利万才！

革命的マルクス主義の旗の下、共産主義者同盟に結集せよ！

われわれは、プロレタリア革命以外に資本主義を爆破する途のないことを高らかに宣言する。既成の階級諸政党に対する共産主義者同盟の態度は、すべてここからでてくる。われわれは、プロレタリアートの真の階級の利害以外の何物をも自己の利害とはしない。

共産主義者同盟の組織原則は民主集中制である。組織の強化は個人の利益に優先する。一切の非階級の分子、怠惰な臆病者がその隊列に加わることは許されない。

共産主義者同盟の組織の規律は、個々の同盟員の階級的な主体的自覚によって維持される。われわれはこれらを保障するために、常に正しい政治方針を打ち出すことに全力を集中する。

同盟員の階級的自覚、自己犠牲の精神および政治方針の正しさ、これが組織を強化する唯一の保障である。

われわれは、原則的な対立に基づく党内闘争は、その意見交換の完全な自由と一切のあいまいな妥協を排する徹底的な討論によって、解決していくであらう。この際にわれわれは、プロレタリアートの利益を一切に優先させるといふ原則にたつて、つねに行動の統一を守らねばならない。

日本プロレタリアートは、その数十年にわたる闘争の中で、遂にただの一度も正確な指導と戦術を自らのものとすることができなかった。スターリン主義のドグマは日本プ

労働運動のなかに前衛党を組織せよ!

労働運動の現状とわが当面の課題

森 茂

(1) 総評はどこへいく

「春闘が成果をあげた一面、基本的なところでわれわれの要求を実現できなかった理由はどこにあるだろうか」

「第一は、大企業と中小企業との賃金格差の増大である」

「第二は……労働者の意識の文化、要求の変化が起っているが、このような点がはっきりつかまれないで闘いが組まれたことである」

「第三には総評本部、単産本部を含めて労働組合指導層の官僚主義的な安易さである」

「①賃金要求の決定が大変安易にされている」

「②中央で進む統一闘争の日程と、職場大衆の闘うエネルギーが盛り上ってくるテンポとが遊離している傾向がある」

「③闘争が真に大衆化されず……春闘相場論が闘いをはじめる前から幹部間でささやかれる」

総評大会をまえにして発表された第一次草案の「五九年の春季賃上げ闘争の自己批判」には、こんなことが書かれている。
春闘で四九日の賃闘を闘いながらついに中闘の中止指令で敗北した鉄連の労働者が、あるいは総評にまったく見捨てられたかのよう
に春闘のあとで闘いをはじめ急速に妥結し企業整備を撤回させ得な
かった三鉄連の労働者が、この言葉を聞いたらなんとというだろう。
このもったいぶったままたく「官僚主義的な」「自己批判」を鼻
であしらって気にもとめないだろうし、自覚した労働者なら怒り出
すだろう。

「あの闘争で労働者の利益を裏切ったと書け」といって。

今度の総評大会の方針案には、闘争目標の各項について「自己批判」がレイレイしくついている。

最賃闘争については

「労働組合側の大衆行動がきわめて不十分であった」「総評本部単産本部を含めて指導幹部が、組合員にたいして、勇気をもって起
ち上れるような方針、対策を示さなかった」とか

合理化反対闘争では、

「第一に、独占資本の政策の本質をみぬけず企業意識の中から脱
けでることができなかった」

「第二に、資本の合理化攻撃は、不均衡でかつバラバラにきてい
るが、統一してはねかえす連帯感と組織態勢が不十分だった」

「第三に、新機械が入ったときに行われる配転に対して闘争を行
なわなかった」

「第四に、到達闘争が不十分だった」

「第五に、時間短縮への関心が、きわめて薄い」
とかいう具合だ。

具体的な闘争の、具体的な自己批判のかわりに、抽象的な「指導
の不足」や「認識の不足」をあげつらうこうした自己批判は、まっ
たく内容空虚なものである。

最賃闘争で、大衆が行動に立ち上っているときに、一律八千円を
ひっこめたのは太田ではないか。

炭労で王子で合理化労連で、合理化反対闘争を労働者が闘っている
ときに、総評がどれだけの支援闘争をしたか。

そしてこういう空虚な自己批判のあとには変りばえのしない改良
主義的闘争方針が並んでいる。

「一、賃闘については「低賃金体制を打破するために」

「一、定期昇給、安定賃金を阻止して、大巾賃上げを獲得する。
そのため職場討議を徹底する」

「二、中小企業労働者の組織化をすすめる」

「三、失業問題を総評全体がとりあげる」という。

今年の春闘の賃闘をまじめに研究した者ならだれでも、一方では
合理化、私鉄のように労使休戦とひきかえにあるいは炭労のように合
理化とひきかえに多少の賃上げを認める資本家の方向があったと同
時に、鉄鋼のように、資本家が組織された力をもって賃闘にも対決
し、賃闘をつぶして組合に深傷を負わしてやろうという方向があっ
たことがわかる。

資本の攻撃が、賃金の面でも激化し、組織的政治的な方向をもっ
てきていることを指摘せねばならぬし、だから、賃闘を本当に階級
意識をもって闘うことが必要になってきていることをこそ把握せね
ばならないのだ。

もし「職場討議」が必要とすれば、そのような意味でとくに必要
なのであり、それをぬきにしてはなんの「確信」もわくものでない
合理化反対闘争については

「(イ)時間短縮に全労働者の関心を集中するため、徹底的な教宣と
討議を組織する」

「(ロ)総評が、政治的視野にたった闘いを組む。炭鉄その他の基幹
産業の国営または社会化の問題……等々を合理化反対闘争の一環と
する」

「(ハ)到達闘争を組織化し、その過程で連帯ストにまで高める力を
養成する」

「(ニ)企業セクトのワクを破る」

「(ホ)新しい労務管理について学習する」

一月まえの七月十五日、紀勢線全通にともなう郵便の合理化にた
いして闘いに立ち上った全千三重の労働者が、十五日、郵便車実力

阻止の体制をつくりスクラムをくんでいたそのとき、中闘が全面中止指令をおろしてきたのにたいして、怒りをぶちまけ、伊勢の労働者は泣いて中闘を追及し中闘はものもいえずに逃げ出してしまった。このとき名古屋千種局の労働者は、中闘追及のビラのなかで「中闘は合理化とはなにか知っているか」と書いていた。この言葉は現在の合理化闘争指導の批判の核心をついている。

この総評の闘争方針は、「合理化とはなにか」まるで労働者の立場に立って考えていない。

合理化とは、労働者にとっては、首切り、配転、労働条件の悪化であり、労働者の生活をドンドン底にたたきこむものであり、だからこそ非妥協の闘いで、肚をきめて徹底的に闘いぬかねばならぬのだ。

時間短縮、到達闘争はもちろん合理化反対闘争の一つの要求であり戦術である。しかしそれは、合理化反対闘争のある場合に闘える一戦術にすぎない。

なぜなら資本家は、すでに多くのところで首切り、配転の攻撃をぶつけてきており、現実の合理化反対闘争は、この阻止の闘争として闘われることが多い。その場合、時短ではなく首切り、配転の実力による阻止、白紙撤回、があったその上での労働条件の問題が問題になるのである。ところがその合理化の労働者にとっての深刻さが、まるで考えられず、空虚な現実、パナレの言葉の羅列だ。

安保改定については総評の方針は次の通りだ。

「(イ)国民的共闘の軸を拡大する」

「(ロ)教育、宣伝活動」

「(ハ)重要段階におけるストライキを含む実力行使」

まるで現在は重要段階ではないかのようだ！ 安保闘争という政

治闘争の、今日の労働運動における特殊な重要性が、ここにはまるで書かれてない。

こうした方針草案が、すでに配布され、およそこの方向で、各単産の大会が行なわれている。そこでは、鉄鋼でも炭労でも合理化でも電通でも国労でも、各々きわめて重要な闘争の総括があり、当面の闘争方針があるはずなのに、またまった激烈な論争は行なわれず、まじめな活動家の批判も散発でおわり、わずかに社共統一問題が、すべての大衆闘争から切り離されて重大問題として討議されていた。

ただ、あまりに裏切りのひどかった日教組と私鉄の大会が中でも執行部批判が、内容的な統一はまだあまりないとはいえず、激しく行われた。

総評大会での論争がどうなるか、まだわからない。しかし、民間は、大会の定員などについて現在以上に大単産の票をふやすような変更を行ない議決も四分の三を三分の二にかえるなどの案を幹事会を通過させ、大会にのぞもうとしている。

その民間の大会乗り切り策の一つが、先にあげた「自己批判」であろう。

およそ無内容なこの「自己批判」で大会の不満をそらせ、反対派の追求をごまかそうというわけだ。

しかし、彼らのその「自己批判」の舌の根のかわかぬうちに、安保闘争が秋から来春にのばされ、全労との統一行動が強調され、国労志免の労働者はまったく見殺しにされ、全十三重の労働者は合理化のまざれている。

われわれは、労働者階級解放の立場に立ち、労働運動の革命的指

導を打ち立てようと考えるなら、日本の労働運動の中心になっている総評について明確な分析を行ない。その今後の運動の方向を把握し、「総評はどこへ行く」という問をみずからに出し、そしてその答えを「総評をどこへ行かすか」という形で出さねばならない義務がある。

(2) 反主流派の消滅の原因と労働運動における「前衛」の喪失

今年の総評大会を前にして、去年の総評大会を考えてみると、な

んという大きな変化があることだろう。

去年は、「主流派」にたいして「反主流派」が議場退場戦術によって大会を成立させないような激しい闘争をした。

一昨年の新潟闘争と、その後の労働運動の階級敵との激突を前にして「長期低姿勢」をぶっぱなして公然と闘争を放棄した「主流派」にたいして「反主流派」の「低姿勢批判」があった。

たしかに、五七年から五八年にかけては、日本の資本主義の発展にとつても、日本のプロレタリアートの闘争にとつても、新しいなにかがもたらされていた。

下にかかげた労働争議の表は、労働運動の現実の把握のためにはまったく不十分な、官庁統計である。

年 別	総 争 議		争議行為をもつたもの		内作業停止争議		
	件 数	参加人員	件 数	参加人員	件 数	行為参加員	損失日数
46	920	2,722,582	810	634,983	702	517,415	6,266,255
47	1,035	4,415,390	683	295,321	464	218,832	5,035,783
48	1,517	6,714,843	913	2,600,483	744	2,304,494	6,995,332
49	1,414	3,307,407	651	1,239,546	554	1,122,123	4,320,688
50	1,487	2,348,397	763	1,026,841	584	763,455	5,486,059
51	1,486	2,818,688	670	1,386,434	576	1,162,585	6,014,512
52	1,283	3,683,435	725	1,844,399	590	1,623,610	15,075,269
53	1,277	3,398,667	762	1,732,229	724	1,553,037	4,220,525
54	1,247	2,635,426	780	1,546,619	647	927,821	3,836,276
55	1,345	3,748,019	809	1,767,367	659	1,033,346	3,467,007
56	1,330		815	1,604,675	646	1,098,326	4,561,890
57	1,680	8,464,384	999	2,345,113	830	1,556,835	5,652,124
58	1,682	6,362,407	1,116	2,536,574	825	1,137,089	5,784,885
58.1	122	1,252,566	29	11,687	24	17,266	26,636
2	143	1,336,956	42	28,256	35	34,208	89,086
3	230	1,803,519	118	620,722	86	1,330,959	162,217
4	303	1,696,730	160	355,659	130	1,331,789	716,844
59.1	124	1,150,004	30	15,923	30	9,475	26,636
2	179	1,725,037	70	232,075	38	56,582	89,086
3	298	2,220,611	180	738,790	146	413,291	161,217
4	280	1,499,951	155	221,549	136	195,874	716,844

(労働省、労働争議統計より)

は、大企業、大単産の統一闘争と、中小企業の闘争を一応わけてみることが、ぜひとも必要である。

しかし、この表だけからでも、多くの興味ある事実を見ることが出来る。

五六年から五七年にかけて、争議の件数にも人員にも大きな飛躍がある。

三つの分類件数のどれでも、これまでの最高だった四八年を、五七年は追いついた。

ストライキの参加人員でも四八年、五二年に次いでいる。損失日数では五二年、四七年、四六年、五一年に次いでおり、五八年には五七年以上になっている。

資本家の攻撃が新しい激しさを加え、組合結成がふえるとともに幹部がとにかく団交をやらねばならぬ組合が増えていること、そして、労働者は、日本の労働運動の大きな転換点であった四八年、五二年と同じような大きな規模で、全国的に、闘争に立ち上ったのだ。闘争は五八年、五九年にもいろいろな変化を受けながら、受けつがれている。

争議、ストライキの件数が減っても参加人員が損失日数が増えているか、あるいは減りが少ないことは、一つ一つの闘争が激突の様相を強めていること、大衆の闘争への突入にくらべて指導が立ちおくれなかなか闘いが組まれないが一度闘いに入ると激化する傾向があること。(四七―四八、四九―五二のストの表と比較せよ同じ型がある)、中小企業の闘争が増大していること、などを示しているといえよう。

こうした労働運動の昂揚が、去年の総評大会の背景にはあった。

彼らは相もかわらず、否去年以上に、重大な裏切りをつづけている。

安保闘争をのびしにのびし、とうとう調印後の来年にしようとしているのは彼らだ。

最賃制八千円をつぶし政府案で妥協することをきめたのは彼らだ。

炭労で合理化をのんで、明敏の兄弟から「犬」とののしられたのは彼らだ。

志免で闘争を中止したのは彼らだ。

三重で全干の民間請負いのませたのは彼らだ。

そして、その裏切りの一つ一つに、闘った大衆は激しい怒りを感じ、涙を流してくやしき思っている。

民同の大衆からの遊離が、だんだん重大になって来ていることは彼ら自身が語っている。

「わたしども民同が……すすめてきた……約十年間の労働運動の大きな問題点は……少なくとも『民同労働運動』が企業組合意識を助長させたということ……」(私鉄、安恒書記長)「民同の限界とか民同の脱皮とかは、すなわち現段階の日本の労働運動のゆきづまりであり、停滞現象にたいして、これを打開しようとするなやみ……ととらえることが正しい」(全電通、大木委員長)「私が第一にいたいことは、資本依存、他人依存の根性をすてて、大衆との結びつきを強めよということである。このような根性は、民同にかぎらず、インフレ時の安易な闘争経験しかもちあわせない今日の運動の根底に、根づよく横たわっているからだ。」(太田薫) (以上「労働経済旬報」四月下旬号、民同脱皮論)

そして一方には、石炭産業、化学産業、セイン産業、通信運輸部門(国鉄、電信電話)を中心とする首切り、配転の攻勢があった。

そして、五六年の砂川闘争にひきつづいて、五七年三月に大闘争に立ち上った国鉄労働者の全国ストがあり、これにたいする岸政府の大量処分があった。資本家の、鉄鋼、造船の五七年秋闘におけるような「統一」した労組対策があった。国鉄について日教組にたいする動評の攻撃が開始された。

この闘争の激化を前にして、総評「主流派」は公然と「後退」を宣言した。

総評反主流派の主流派にたいする闘争は、この主流派の闘争放棄にたいする「怒り」によって支えられていた。

「長期低姿勢」反対、「敵の鹵軍にのみ合った闘争」(高野実)が彼らの相言葉だった。

けれども、その「反主流派」の闘争は、今度の総評大会ではどう受けつがれているか? 反主流派そのものが、どこへいったのか? 今度の総評大会では、去年の反主流派はもうなくなってしまったか? 今年度の総評大会では、政党支持問題をのぞけば、去年の様な政策戦術についての総評を二つに分る真正面からの衝突は、なくなってしまった。

なぜなくなったのか?

総評「主流派」が、資本家との激突を怖れる階級協調主義をなくしたのか?

それとも裏切られた大衆とまじめな活動家たちの彼らにたいする怒りが、なくなってしまったのか?

両方とも否だ。

こうした厚顔無恥な空文句を彼らは公然とふりまき、その上に総評の今度の大会の「自己批判」が出ていたというわけだ。

とすれば明らかに反主流派の追撃の絶好のチャンスではないか。ところが「反主流派」は消滅してしまっただ。なぜだろう。

われわれが、総評を「どこへ行かすか」という立場で考えるならこのことは十分に考え抜かれ、われわれの間で完全に明らかにされねばならないことだ。

総評反主流派は、あの条件の中で大衆の高揚の側に立っていた。大衆の資本にたいする戦闘性の側に立っていた。

けれども彼らは、大衆を代表しても、大衆を指導してもいなかった。彼らは、真に職場の闘う活動家をつかんでもいず、職場の大衆の気分を十分に知りぬいてもいなかった。彼らは、旧総評事務局長であり、労働運動史のある点ではまったく明白に裏切者として活動した高野実の一派、旧労働系系の革同、歴史的には疑いもなく民同出身でありながら、動評闘争においては革命的労働者の側に立っていた平垣、それに日共の組合活動家のなかのボス連中、それに、実際に闘争のなかで総評に不信をもった若い闘争経歴のさして長くない活動家、といった雑多な構成をもっていた。

彼らには第一に一貫した革命的理論がなかった。彼らはまったく「反主流派」としてのみ統一していた。そしてだから第二に、彼らは全国的な強固な同志的結合をもつことが出来なかった。

この、彼らの理論性のなさ組織的不統一性は、これまでしばしば指摘されており、われわれの間でもほぼ一致がえられている。

しかし、われわれは、今、彼らの現在における消滅、あるいは、大量の日共への吸収、という事実を前にして、彼らの運動を批判

的に考えれば、第三に、彼らは、労働者階級の前衛党に指導されてもいなかったし、また党をつくるための展望もたず努力もしなかった。という問題を指摘することが必要だ。

彼らは、闘う大衆の側に立っていた。しかし、それは、民同が闘争指導を放棄し、敵に闘争を売り渡そうとして大衆に敵対するかぎりにおいてであった。

彼らは大衆の素朴な怒りの側に立っていた。しかし彼らは自覚して、意欲的に、大衆の利益のために立ち上ったのではなかった。自覚して、意欲的に立ち上るとはどういうことか。すなわち労働者階級の窮極の解放の立場に立つこと、共産主義革命の立場に立つことなのだ。

彼らは決して、「革命のための」労働運動を意識的に考えなかった。彼らは当面の総評主流派の方針を批判したが、根本的に革命をめざす立場で彼らと闘ったのではなかった。ここに反主流派の、あらゆる限界をつくる基本的な問題があった。それはだから、総評主流派の改良主義を、大衆の自然生長的な段階でしか批判出来ず、革命と党なしの労働組合主義の立場でしか批判できなかったのだ。

このことのなかに、日本の労働運動のきわめて重大な問題がふくまれている。それは、日本の労働者階級が、激しい闘争に立ち上っておりながら、革命的な気分をもつ大衆は、革命についてなにも考えさせられていない、ということだ。

労働者大衆の利益のために自分の一身を投げだそうという革命的な意気にもえた活動家は、労働者のなかに多く生まれている。しかし

し、本当の革命家は、いない。革命的な闘争は激発している。しかし、それを確信をもって指導する革命的意識、見通し、真の階級意識がない。左翼的な労働組合は闘争のなかで生まれる。しかし革命的党がないのだ。

(3) 民同と労働組合主義

われわれは、このような現象を、どのような歴史的条件においてつかむことができるだろうか？ どのように労働運動全体の状態との関連で、理論的に把握できるか。

日本の労働運動の歴史についての、大よそであれ明確な総括というものは、今日までだれの手によっても行なわれていない。

とくに、四六年から、世界史にも例をみない位の規模と速度で全日本をゆり動かして進んだ日本労働者の闘争が、なぜあの「民主化運動」の手によってたった三年の間に社会民主主義者の手中におさまられてしまったか、という問題の解明は、誰によっても行なわれていない。

私のように当時まだ子供であった者には、資料の再構成によってその状況を生き生きと復活させてみることにすらかなか困難がある。しかし、革命的な労働運動を復活せしめようと考える者はだれでも、この敗北の歴史を深刻に研究しなければならぬし、その諸条件および民同の勝利の戦術とを完全に明らかにし、わがものとする必要がある。そしてまた日共の二・一スト以後の敗北と混乱と極端な日和見主義と総退却と、労働運動からの追放の歴史を明

らかにし批判を行なうことが必要である。

二・一ストは、四五年以後の日本労働者階級の闘争の決定的な転換点であった。

そのときまでいくつかの局部的な闘争では敗北を喫しながら、全体としては前進をつづけてきた労働者階級が賃上げと吉田内閣打倒のゼネストを米軍の脅迫の前に戦わずして中止したことが、大衆をどれだけ動揺させ労働運動のなかの資本家の手代を勇気づけたことか。

この年の十一月、国鉄反共連盟が、翌年二月、産別民主化同盟が結成され、民同運動が急速に全組合のなかに入りこんでいく。

しかし日共は、このときからそれまでも明らかにもっていた日和見主義をあらゆる面であらわにし、経済闘争に政治性を附与する、地域人民闘争、産業復興闘争、ストライキの激発は挑発だ、というような方針が次々とみち出しはじめた。

こうした方針にたいして、どんな党内闘争が行なわれていたか、はよくわからない。

しかし、現実には党が大衆から遊離し、闘争の指導権を民同に奪われて行くその過程で、誠実な党員は異常な苦しみをなめたことである。日共があのような大敗北を経験しながら、少なくとも五〇年までは本当にごくわずかの分派闘争しか起らなかった、ということでは、当時の党はどれほど権威主義と官僚主義に毒されていたか、想像を絶するものがある。

そして、五〇年のコミンフォルム批判からはじまった論争が、こういった敗北の歴史の直視と、レーニンの総括を行なう方向ではなく、それとは全然きり離された「テーゼ草案」をめぐる行なわ

れたことも、大変奇異なことである。

おそらくわれわれは、当時の労働運動の敗北を直視し、そこから出発した総括と戦略、戦術の追求の努力を行なったものとしては、中西功の四九年の意見書だけを持っているにすぎないと思う。

中西功の意見書は、戦略に関してまったくスターリン主義の理論を一步も出でないが、戦術に関しては、今日でも学ぶべき多くの点をもっているように思われる。

その中西功が、二・一ストについて、その弱さを「政治性の欠陥と経済主義的性格」にもとめていることはきわめて正しい、革命的な指摘である。

二・一ストのような完全に日本の生産をマヒさせるゼネストについてはすでに前衛は権力の問題について熟考しているべきであり、それとの関連において敵階級の動向と味方の諸条件を完全に考察しあらゆる闘争の展開に応じうる能力をもち、そしてそれだけの任務に必要な大衆にたいする影響力をもつ政治指導部をもたねば労働者は勝利どころか敵の攻撃を前にして確信をもって前へ進むことすらできなかったし、また大衆が政治的に教育され、自己の闘いの階級の意義と見通しとを、多かれ少なかれつかむことなしには闘いぬけるものではなかった。

それができなかったことこそ二・一ストのみじめな敗走と、その後の闘争の後退の原因であった。

しかし、日共はこのことを認めず、闘争の敗北の責任を自己の指導にはなく大衆の弱さと敵の強さにもとめ、二・一ストの政治性の欠除を自己批判するかわりに、経済性の不足(一)を自己批判し経済主義と労働者階級のヘゲモニの喪失へと転落していった。

そして、労働者大衆は、日共がほとんど政治教育をやらなかったために、革命的意識をもつことが少いままでのこされ、しかし無気力に闘いを放棄するのではなくやむにやまれぬ闘いに立ち上った。(右表と前提表参照)

		参加人員	件数
21年	1月	229, 104	226
	2	122, 819	195
	3	117, 056	139
	4	113, 910	134
	5	177, 777	223
	6	158, 068	160
	7	112, 637	125
	8	201, 243	125
	9	119, 385	135
	10	201, 862	167
	11	88, 410	136
	12	94, 762	118
22年	1	26, 767	75
	2	34, 860	96
	3	44, 975	118
	4	11, 250	45
	5	7, 437	50
	6	15, 625	49
	7	30, 913	70
	8	32, 258	115
	9	1, 113, 352	168
	10	1, 847, 582	150
	11	1, 811, 573	125
	12	1, 935, 633	138
23年	1	1, 925, 874	100
	2	1, 908, 21	102
	3	2, 396, 425	194

民同は、この現状から出発した。

民同が彼らの運動をはじめたとき、彼らが依存していた条件はなにか。

第一は、日本資本主義のまったくの崩壊状態にあり、大衆の恐るべき窮乏であり、そして闘争の物凄い速度での激発であり、生産管理を含んだ革命的闘争への発展であった。そしてその指導権を握る日共の大衆指導の無能であり、そこからくる大衆の闘争に立ち上りつつも感じている動揺であった。

第二は、無自覚な大衆が自覚し出すや否や忘ろしい速さで組織していった労働組合の全国組織であり、その偉大な力であり、しかもそれが資本家にたいしてもっていた、経済闘争でも政治闘争でもある程度の譲歩をかちとれるという状態であった。また日本の資本家

権力が占領軍によって一部代表されているという事情のもとで、占領軍との闘争については日共が考えることを禁止しだれも考えようとしなかったという状態であった。

第三は、その労働組合の特殊な性格、すなわち一方では経済闘争がただちに政治闘争と結合して発展していくなかでその闘争の基盤となり、一方では闘争の発展そのものが、組合を工、職一つ工場別、企業別のいわゆる企業別組合として組織され、そのことが一方では組合員大衆の実に雑多な意識を含んでおりながら、一方では政治経済闘争に組合が付き進んでいたこと。このことは敵の攻撃による組合のもろさ、動揺性を生み出すものであり、それを前へ進めるものは、ただ組合とは別個に組織された党の適切な指導のみであった。

第四は、労働組合のもつ莫大な金、日本の政治における力、およびそれをみずからの議会への出世のために利用している戦前の社民の生き残りの経験と教訓であった。

この四つの前提の上に立って民同は、革命的闘争に怖れをなし動揺している小ブルの活動家を組織しはじめた。

四八年二月一三日、産別会議光村副議長ほか単産代表六〇名の討議のうえ確認された民同の主張の基本は

- 一、政党、資本家、政府から支配されない自主性の確立
- 二、共産党フタク活動を排除する
- 三、従来のごとく資本家の欠点のみを指摘して来た生産闘争を改め、今後は労働者の責任も追及して職場秩序の確立を図る。

というものであった。その後のどの民同の文書も、この基本方向にほぼ集約される。しかし三はその後は極左戦術反対という程度になり、一、二は、労働組合の民主的運営になり、他に闘争スローガン

が入ってくる。

激発する闘争が、敵の反撃に見まわられてき、革命的理論をもつ党に指導されない大衆が動揺している瞬間に、民同運動は、おくれた、動揺している小ブル的な出世慾のある活動家を組合という機構を小ブル的な出世の舞台に提供することによって組織し、そして一方では階級闘争の緩和のスローガンで、一方では政党の組合支配反対という労働組合主義的スローガンで大衆を組合の側にひきつけはじめた。

こうして民同運動は、労働運動の中の小ブル的分子を組織し、資本家と労働者の間に立って労働者を自己のものにひきつけて組合という機構を保持し自らの小ブル的な生活の利益に利用しつつ基本的には資本家の立場で闘争をなだめる役として立ち現れたのだ。

そして意識的には、社会民主主義的な階級協調主義の主張と同時に、労働組合主義の立場で多くの労働者をひきつけた。

日本の労働者は、四五年からたった二年の間に全国津々浦に組合を作った闘争に立ち上っていった。組合づくりは彼らの生活防衛の闘争であるとともに解放の第一の条件をつくるものであり、大衆みづからのとりでづくりであった。あきらかに革命党は、この労働者の闘争を指導し、発展させつつ、同時に、革命的党の、独自の別個の必要性を、政治闘争の必要性の宣伝、プロレタリア独裁の思想の宣伝と同時に、宣伝し、大衆を教育し、闘争のなかで、物質力として党を組織して行くべきであった。

日共はこのことを、きわめて不十分にしかしなかった。党はつくったが、大衆の政治教育は、議会主義というまったくブルジョア的な内容でやってのけ、プロレタリア独裁の宣伝は、全然やらなかつた。

た。そして、だからこそ党と組合との混同が生まれ、組合を指導する党の大衆からの遊離が生まれた。

民同は見事にこの弱点をついた。徹底的に日共の組合破壊を攻撃した。日共はこの攻撃で砂の山に水をかけられたように影響下の労働組合を失っていった。

実は、民同が日本の労働運動の指導権を握った瞬間から、日本の労働者階級は「前衛」を失ったのだ。日共が正しい自己批判を出せばとにかく、誤りの根源になんら手をふれず、誤りを拡大するような自己批判しか出なかったのだから、労働組合の戦術的活動家集団としては労働者の闘争の役に立ち、そのかぎりでは革命的であった共産党は、労働運動にとってはもうなにもでもなくなっていた。

民同運動は、労働者大衆の革命的な圧力のなかにあつて、一応闘わないでは労働者の信頼をつなぎとめることができなかったので、その力が大きくなるほどひだりよりの衣裳を着て、ついに「総評」という型に一応固定化された。

それは、はじめの「国鉄反共連盟」が「民主化同盟」にかわり、新産別の公然たる社会民主主義宣言が、総評の「平和と独立のため」の「自由にして民主的なる」(創立宣言)へとかわる過程を通じてであった。

そしてでき上ったからもニワトリからアヒルへと、平和四原則をめぐる論争から、全面講和要求の闘争に入るのである。

こういう民同の性格が、社会党と総評との特殊の關係をつくる基礎をなしている。

現在、社会党は、社会民主主義政党として総評の票を全部あつめているが、実際に政治勢力として力をもっているのはむしろ総評

で、総評が社会党に文句をつけたり、社会党も総評の意見を一つの大衆団体との意見という以上の比重で聞かざるをえないのが現状である。資本家階級も、社会党以上に総評を重大な敵と考えており、鋭い直観をもった詩人である吉本隆明が「革命のヴィジョンは全學連と総評にある」というのも故あることである。

これは次の四つの事情によって説明される。

第一、日本の社会民主主義の歴史的な性格として、強固な思想的統一をもたず、党が党として大衆団体を指導したという経験をもっていないこと。

第二、民間が大衆の労働組合主義的な気分を組織していったために、労働組合としての、政治的な発言をすることができず、またせねばならない傾向をもっていること。

第三、民間の一部が総評の票をあつめて国会議員となり、社会党議員となっても、組合大衆の闘争を背景にもっているから、完全に小ブル的、ブルジョア的な立場に立つことができず、闘うポーズを作らざるをえず、これが広汎に小ブル層に依存している社会党の性格とある限界を決して出ないにしてもたえず衝突する傾向をもっていること。

第四、しかし、決定的に重要なことは、日共の労働運動指導におけるまったくの無能の結果、前衛党の革命的な批判によって大衆が教育されることができず、したがって、党として社会党と共産党が大衆への影響力を競い合うということがなく、総評が政治については大衆の声をわがものとして社会的に歪曲していることができることである。

総評の今日の政治勢力としてある状態を「大衆社会状況」から説

先日アカハタに発表された東京品川の高木区議の腐敗にたいする労働組合グループの闘争とその結果の組合グループの除名などはそのほんの一例であり、こうした腐敗は日共の現在の構成そのものから生まれるものできわめて多くのところに存在している。

しかし、第二に、それなら組合グループそのものは革命的な前衛としての役割を果しているかといえ、おそらくどのグループも絶対にそうではない。

一部の、とくに基幹部門にいる党員は、闘争からはなれすぎたためにまったく小ブル的気分に入りきって、革命的闘争に敵対している。この部分の数も決して少なくない。

他の一部の党員は、きわめて革命的な活動家として、立派な活動をしている。

組合のなかのことも進んだ分子を結集し、闘争の先頭にたち、組合内の最左翼として、大衆闘争を指導している。

しかし、だから彼らが前衛であるとはいえない。

彼らは、当面の労働者の利益のために、献身的に闘っている。しかし、労働者階級の窮極の解放のために、自覚的に、意識的に活動しているのではない。

プロレタリアート独裁の思想によって強固に武装され、革命的な基本的な見通しのもとに、当面の闘争を闘えるだけ闘って大衆を教育し、みずからのイニシアティブの下に組織して行き、階級意識を労働者にたたきこみ、先進分子を党に結集するという活動を、彼らは自覚して、統一的には、けっしてやっていない。

そして、彼らは、革命的であればあるほど小ブル的な「指導機関」と対立し、独立共産党的傾向をもち、その結果として党全体からは

明し「圧力団体」という規定をつくり出し出しているマルクス主義者と称する学者がいる。

しかし、労働組合の政治勢力化は、組合員大衆の戦闘性があり、しかも革命的党がない場合にはかならず起ることであり、これを固定化し美化することはマルクス主義とはまったく無縁のことである。

(4) 労働運動のなかの日共

民間の性格について以上のように考察した上で、労働運動のなかの革命的潮流をつくり出すことを考えるとすれば、日共の労働運動のなかでの現状を考察せねばならない。

今日、日共が、理論の面で労働者階級解放の「前衛」ではなく、小ブルジョアの代表者に転落していることはわれわれの間では確認されている。しかし、日共は、組織の面でも、労働者大衆にたいする政治的影響力の面でも、前衛ではない。

第一に、日共の労働者構成員の全党における比重が、労働者党とは決していえないほどに低下しており、一方労働運動の中の闘っている部分、および基幹産業の先進的活動家のなかに、大きな影響力をもっていない。

このことは、日共のなかの理論的にはスターリン主義でもごくわずかのまじめな活動家には痛切に感じられている事実である。

このことが日共の理論的腐敗を一層推しすすめており、議会の党として、農民、小市民に依拠しようという力が、党内になくしえない力として厳然として存在している。

分離し、労働者階級の「前衛」としての地位を失うのである。

彼らにはたえず、「機関」と「全党」の小ブル的圧力がある。そして彼らのなかの一部は、その圧力に屈服して、革命的自覚を喪失し左翼的な口ぶりをした労働運動の自然発生性への洋脆の理論に、すなわち構造的改良論に転落している。

およそ構造的改良の理論ほど、労働組合主義的な、自然発生性に屈服した、革命を忘れ去った理論は今日他にあるまい。

「資本の攻勢にたいして、労働者は防衛的に闘うのではなく、攻勢的に闘わねばならない。資本家の計画に対して、労働者の計画を対置して闘わねばならない」というこの理論の、資本主義の分析における修正——階級対立をはなれた資本主義の「変化」、という理論についての批判では、われわれの間ではすでに一致がえられているこれと同時に、この理論の実践的な側面——労働運動の自然発生性への完全な追従、労働運動をプロレタリア独裁を打ちたてるという観点でみるのではなく、当面の改良をめざす労働組合運動の立場で、かみない改良主義を批判する必要がある。

だれでも、まじめな労働組合活動家なら、労働者大衆が闘いに立ち上るのは資本の攻勢にたいしてであり、また他の労働者のハラをきめた闘いによってであること、そして、なにもたぬ労働者大衆は、抽象的な空虚な「計画」を生産手段と権力をもつ資本家階級に「対置」したところで、立ち上るものではないことを知っている。

労働者の闘いを本当に強めるものは、労働者に「社会進歩」のために闘えと説教することではなく、労働者の生活のあらゆる破壊と徹底的に闘うこと、そしてその中で、労働者に階級対立の事実を宣伝し、教育し、労働者が、資本家を打倒せねば窮極の解放はないこ

とを訴え、労働者の革命的な決意をつくり出すことである。

労働組合運動一般は、こうした活動によって強められるが、こうした活動、大衆に階級意識を打ちこむ活動は、労働組合の活動には、はじめから、ひとりで、意識的な努力なしに、行なわれるものでない。なぜなら労働組合は、多くの種々の意識と出身階層、生活経験をもつ労働者から構成されているから、そこではそれらの活動は資本家の攻撃と同時に労働組合の内部でも障害を受け、困難と妨害を受けることは避けられないからだ。

だから、これらの活動を積極的に起こすためには、革命的な意識が必要であり、革命のために現存する労働運動と労働組合をどう強めるかが考えられるべきなのだ。

ところが構造的改良の理論は、はじめから現存する労働運動からだけ出発し、それと革命を結びつけることを拒否する。そして、現存する労働運動の困難を、すなわち大衆の意識、決意の未発達を重視することを避け、計画の対置という美しい言葉で現実を覆いかくす。

だから彼らは、革命運動の立場から労働組合運動を見ることができないと同様に、革命党の立場から労働組合を見ることができない。構造的改良論が、社民の統一と団結論を十分に聞えないのは故あることである。そして彼らが、労働運動における党組織の決定的役割を過少評価することも故あることである。トリアッチが二〇回大会直後にいった社会主義革命は一つの党によつて推行されるのではない、という理論や、統一戦線の無原則な強調は彼らの本質に根ざしている。

構造的改良の理論は、ある程度活動家をとらえている。しかし、

明瞭であり、中ソ等の、いわゆる社会主義国のいまだ完全に解放されず、いぜんとして社会的不平等が解放闘争をおしとどめるスターリン主義者を打倒するという目標をたてた場合にはソ連共産党に指導される国際共産主義運動内の党ではなく、別の党をつくるのが無条件に必要なのだ。

(5) わが運動の諸問題

さて、以上の考察の上に立って、われわれその活動の、諸条件ときしあたっての課題について考察しよう。そのためには、以上のべた資本家階級と労働者階級の現状から、その運動の方向を明らかにすることも必要である。

第一の問題は、資本攻勢の新しい激化についてだ。これについてはいくつかのところでべたが、合理化、賃上げストロップの攻勢が組織的に、意識的に強化され、とくに戦闘的な労働組合にたいして資本家の組織的な打撃が加えられていることに注意せよ。国鉄、日教組にくわされたパンチが、炭労、王子に加えられ、次いで鉄鋼に加えられようとしていることを見よ。鉄鋼労連では、今度の役員選挙で職制がかつてないほど組織的に働き、左派切崩しに必死で、次の賃闘で鉄鋼に致命傷を与える準備をしている。

そして資本家の攻撃と呼応して、自民党政府も労働法の改悪などの攻撃を真向からブチかます準備を進めている。

そして彼らの攻撃の組織面での中心は、戦闘的な労働組合の無力化におかれており、闘いに加わるものには民同であろうと容赦なく打ちのめす方針を出している。

本場の戦闘的活動家はこの理論に関心をもちつことはあってもひかれではない、本場の活動家は、結局は彼らの経験で養ったカンとわずかに暇をみつけて読んだマルクス、レーニン、毛沢東、スターリン、そしてアカハタから、自分で正しいと思うものをよせ集めてもっているにすぎない。

日共を革命的党として発展させることは可能だろうか？

そのためには、第一に、日共を毒しているスターリン主義理論と小ブル的傾向を理論の面で原則的な点では完全にぬぐいさることが必要であり、第二に、その幹部から小ブルの代表者を一掃し、真の共産主義者によって代表しなければならぬ。そして第三に、党の構成を変え、労働者の利益のために闘おうとしない小ブル分子を党から追放しなければならない。

これらのことはすべて、「党の統一」を神祕化するスターリン主義理論との闘争とその粉砕なしには行ないえない。

しかし、これだけの大業がなしとげられたとしても、革命党の建設という面からいえばまだ、端緒がつくられただけである。

現在の労働運動の偉大な闘争力からいえば、労働者階級の前衛党といえる条件は、基幹産業と闘っている組合の中に強大な影響力をもつことであるからだ。

日共を中から変えていくことにみずからをしばりつけることはまったく愚かなことである。党組織であろうと労働者階級の利益の上にあるのではない。労働者階級の利益のためには、日共の「組織原則」と理論的に闘争することにも、実践的にそれをのりこえ、新しい党の創立の活動を推進せねばならないのだ。そしてこのことは、問題を国際的見地においてみるならまったく

そして、それと同時に、組合の力の弱まったところではすかさず労働組合を自己の、すなわち資本家のヘゲモニーのもとにおくための活動が、強力に推進されている。

階級	職務	組合幹部	
		支部	本部
1 2 3	役員	0人	0人
4 5	書記補 技手補	22人	22人
6 7	書記 技手	10人	10人
8 9 10 11	助役 主任 職	8人	8人
12 15	主任以上	0人	0人

右の表は最近の私鉄のA企業の実績として草光実氏が労働経済旬報三月下旬号に発表されたものだが、職階制の確立にともなって、こういう状況は特に闘わない組合では多くなり、固定化する傾向がある。

階級関係の大きな変化がないかぎり、この傾向が労働組合運動全体に支配的影響を及ぼし、全労傘下の全職、海員のように、男子と女子、船長と船員の極端な賃金格差にもとづく本場の労働貴族が日本労働運動を完全に支配することはできない。しかしこうした組織が、今日の労働運動の後退の基礎をなしており、民同にとっても少なくとも民左にとつては、彼らより右の傾向の出現として、彼らの支配の維持のために手放しで喜んでばかりもいられなと感じられているものである。

第二の問題は、しかしながらこの資本攻勢は、決して無抵抗で受け入れられるのではなく、局地的な闘争を激発してきたし、これからもするにちがいない。

今年の闘争をとっても、鉄道の鋼管、富士鉄の闘争、淀鋼の闘争、炭労の闘争、国労志免の闘争、全千三重の闘争、さらにメトロタクシー、人世座、成光電機、他多数の中小企業の闘争、など、社会問題化した闘争、資本家階級との物質力をもってする激突にすら発展した闘争は少なくない。そしてそれらは、例外なしに民同幹部に冷遇され、裏切られ、大衆の激しい怒りを生み出していた。

闘争のこの傾向はわれわれの全戦線の闘争を起すための最大の努力をもってしてもしばらくは変らないう。局地的闘争は激発するが、全戦線の闘争に結合し高められる方向で指導されるかわりに局地で孤立させられようとするだろう。

闘争の激発と大衆の左傾は、民同を動搖させ、右傾させるだろう。しかし、大衆の離反を防ぐためにとくに民左は左翼的ポーズをとることはありうる、それが民同内の闘争を激化さすかも知れない。これらの闘争は、大衆と活動家を鍛え、その一部をきわめて革命的にするだろう。

しかし、ここからでてくる第三の問題は、これらの労働運動の一部の革命化は、決してそのままで労働者階級の力を強めず、それが、新しい前衛党の組織の事業と結合されるときはじめて有効に労働者階級の力を認めることになるだろう。

その意味で、以上の状況は、われわれに広汎な活動分野を開き、急速に新しい前衛党を準備する課題を課しているのである。

わが同盟の活動と党の創立の諸条件の全体としての考察は、さら

に別個に行なわれねばならない。

そのためには、第一に、国際的観点で、世界共産主義運動における世界革命の喪失の批判と、その諸条件の考察が必要であり、第二に、現在のマルクス主義理論、とくに革命戦略についての批判と、われわれの戦略の原則的な点における確認が必要であり、第三に、その上に立って新たな世界党結成の諸条件を考察し、われわれの現在の主体的条件からくる問題とくに学生運動における影響力の強化の重要性を評価しながら当面の活動の方向を定めることが必要である。

これらについてはこれまでいくつかの点は完全に明らかにされており、他の点はさらに討議されていくであろう。

私がここで述べたことは、労働運動に関することであり、こうした全体としての活動の、主要な内容の労働運動における活動についての考察である。

さて、われわれの労働運動における党の創立のための活動は、未来における党の創立のために必要であるばかりでなく、現在における労働運動の強化のためにも必要である。

なぜなら、一つ一つの闘争が、長期化し、激突する傾向をもつときには、とくにその闘争の指導部が、確固たる確信をもち、見通しをもち、そして見通しをきり開いていくことがなければ、またその指導部が、大衆に階級的な宣伝を行ない、階級意識を高め、その闘争の分子を青行隊その他で固く組織していくという方向がなければ、闘いは弱められ、動搖させられ、なかなか起きられないだろう。

それは、労働組合幹部が、組合幹部として活動する以上に、革命

のために献身するという決意で、全国的な指導の一環にあって、他の経験を革命的に摂取することによってつくられるのだ。

最近における炭労の指導部の動搖は、あきらかに彼らが直面した大きな困難、資本家階級の炭労にくらわしている攻勢の大きさに、炭労の左翼労働組合主義の指導者が動揺していることを示している。

すでに社青同が広汎に大衆活動を展開し出した今、国鉄志免闘争全千三重闘争は、そうしたことが必要でもあり有効でもある経験を提供している。

さらにこのことは将来の階級関係の激変を来たすような衝突を考えてみれば一層必要である。大衆的な合法性の多い労働組合と、非合法で職業革命家からなる党が明確に分離されてなかったことが、日本の戦前の労働運動が三、一五、四、一六の二撃ちで大打撃を受ける結果を作ったことを想起せよ。

現在でも、労働組合と日共の行動家の名はほとんど敵の手にわたっていると考ねばならない。敵の攻撃と闘争局面のさまざまな変化に適應しうる党が敵に秘密に、独自の組織をもって作られることが必要である。

次に、しからば、そのようなわれわれの活動は、総評の中だけでなく、中立系組合においても、全労、新産別の組合においても、未組織労働者のなかでも行なわれねばならない。

そこで未組織のところでは組合を結成し、闘争を起し、その先頭に立ち、そのイニシアティブを握り、そこで革命的労働者を決集していくことが必要である。

この際の具体的な活動形態の問題について、とくに全労、新産別における活動についてはこれまでの経験を十分に研究して進まねば

ならない。

しかし、総評においては、一応すでに明確な活動方向を示すことができる。

総評の性格についてはさきにも述べ、その今後の運動方向も前に述べた。

総評は(民同左派は)口先では労資協調反対であり、階級闘争の立場に立っている。そして闘うポーズを示し、自分が革命的な決意が必要にならない場合は闘う。しかし闘いが決定的な段階に入るとかならず逃げ出し、裏切る。

こうした民同の性格は、闘っている組合活動家なら、だれでも感じることができる。ただ闘争を離れ、闘争の全体を感じることができない傍観者にとっただけ、総評の讚美ができ、総評に無原則な統一戦線をお願いすることができるのだ。

民同左派は、決して労働者階級の解放のために闘おうとしてはいない。労働者の利益の上に、自己の組合役員という地位をおいている。これが真実だ。

しからば、われわれは、彼らを打倒するために、彼らから労働運動の指導権を奪うために闘わねばならない。

どのように闘うか？ 資本家と民同を、ともに敵として、ともに打倒するために闘うか？

答えは、すでに経験的には明らかにされている。革命的な活動家なら、「自分が闘争の先頭に立ち、闘争の方針を大衆に示し、それをもって大衆の支持を獲得しつつ、それを中間に押しつけ、中間がそれを拒絶し、修正するさいに中間を徹底的に大衆にバクロする」というやり方を、思いつくし、実行している。

レーニンが、コルニエロフの反乱にさいしてブルジョアジーと小ブルのケレンスキー臨時政府にとつた態度を学べ。

「われわれは戦うであらう。われわれは、コルニエロフにたいしてもケレンスキーの軍隊にたいすると同じように戦うが、しかし、ケレンスキーを支持するのではなく、逆に、彼を暴露する。」

「われわれはこれらの要求（ミリュエーフを逮捕せよ等の部分的諸要求）を、ケレンスキーにたいしてつきつけるだけでなく、またケレンスキーにつきつけるよりもむしろ、コルニエロフに反対する闘争の経過によって引きつけられて来た労働者、兵士、農民に提出しなければならぬ」

「彼らをもっと引きつけ、彼らをして、コルニエロフに味方した將軍や將校たちを打ちのめさせ、彼らをして土地を農民に引きわたすようただちに要求させ、彼らに、ロジャンコとミリュエーフを逮捕し、国会を解散し、「レーチ」その他のブルジョア新聞を禁止し、それらを審問しなければならぬ」という考えをもたせなければならぬ」（全集25巻311～312ページ）

もちろん、これとわれわれの戦術との間は相違がある。ケレンスキー政府という権力を握るものとこの闘争と、民間という組合幹部との闘争との違いからくる相違がある。しかし大衆が民間の本質を十分に把握していず、民間の分解があるいは右傾が、まだ大衆の眼に明らかになるほど進んでいないという条件の下では、基本的な考え方は同じだ。

民間を批判せよ。具体的な闘争戦術の提示によって、それをやらない民間のサボを批判せよ。民間の裏切りの事実をバクロせよ。民間の裏切りを警戒し大衆の闘争組織を確立せよ。意識分子、先進分

がしばしばしたように、軍事戦術の類推などという空虚な言葉の遊戯をする傾向が多かったが、それでもなお未経験な労働者に多くのものを教えた。

今日では、そうした戦術は、地区労か、それとも各単組のオルグが自己の経験から出すにすぎず、生き生きとした検討や交渉やはなくなっている。だから炭労の豊富な経験をもつオルグが入ると王子がたちまちものすごい力を出すという状況も生まれる。

われわれは、戦略問題の検討と合わせて、戦術についての関心を払い、革命的な立場でどのように大衆を組織し、どの様に闘争を提示するかに深く精通することが必要だ。

それなしにはわれわれは前へ進むことができず、労働運動の革命的前進をつかむこともできないだろう。

そして、あらゆる日和見的な労働者階級の利益という観点から批判し、その影響を大衆からたち切るために闘わねばならぬ。

子を同盟に組織せよ。同盟の周囲に活動家を結集せよ。同盟で、民間のいかなる裏切りにも闘争を持続しうる指導体制をつくれ。闘争の指導権を握り、闘争をすすめよ、そして民間をいよいよ事実において批判せよ。大衆を闘う方向でかためよ。そして機関から裏切り民間を追っ払え！

最後の、すなわち第五の問題は、こうしたわれわれの闘争が、労働運動の戦術についての深い検討、総括とともにすすめられるであろうということである。

労働運動の戦術問題、当面の闘争の戦術問題というものは、戦略問題とはくらべものにならないほど具体的な現実的な条件に依存しており、経験に依存しているだからこの戦術問題に関しては、なにも忘れない闘争精神をもち、ある程度の経験をもち幹部なら、自分で持つことができるし、もっている。

しかし、現在の闘争の進行状況、新しい大衆の闘争への突入に応じて、戦術が有効に教訓として広められているとはいえず、新しい活動家は、戦術を手さぐりでつかみつつ進んでいる。それは、これまでの大闘争の指導者が、一部はレッドページで追放され、一部は総括の努力をまったくせず、一部は民間であり、新しい活動家が、これらの経験からまったく切り離されて独自に発せねばならない条件が多いという事情によって生まれたことだ。

戦前の日本の労働者階級に闘争戦術を教えたものは、多くプロフインテルンであったように思われる。それは、戦略問題とまったくかけ離れた組合主義的な立場から、しかも闘争の生きた現実を、労働者の利益の立場から、注意深く、徹底的に研究するのではなく、スターリンの子分でプロフインテルンの提示者だったロゾフスキー

「七六頁から続く」

二四年の第三回大会は右翼的な統一路線にはしり、イギリスの二六年の大敗北となつてあらわれる。そして二八年の第四回大会をもつて今日その代名詞にされている極左方針——経済闘争の独自指導のスターリンをかかげるのである。コミンテルン六回大会に打出されたスターリン綱領にもとづいて打出されたすべての誤びゆうのために、ヨーロッパの労働者大衆のみでなく、植民地の組合さえも、アムステルダムに奪回されて行くのである。そして三〇年八月、第五回大会においてそれらの一切を一層強化したのを最後に、一九三五年のコミンテルン六回大会における人民戦線戦術の採用によって、ついに歴史から姿を消すのである。

われわれは、このプロフインテルンが、本稿に明らかにした設立の目的をついにはたすことなく、逆に労働組合も、革命もブルジョアジーと改良主義者に売渡す人民戦線にとつて変えられた歴史を、明らかにしなければならぬ。共産主義者は、自からの手でこの敗北を明らかにすることによってのみ、再びその輝かしい旗をかかげる資格をうるであらう。

(続く)

左翼平和屋の破産(上)

第五回原水禁止大会共産主義者同盟書記局現地指導部

齋藤 英 二
佐久間 元

一 まえがき

第五回原水禁止世界大会(広島大会)は左翼平和屋の破産を労働者階級の前に暴露してしまつた。日本共産党はその左翼平和屋の先頭にたつて活動した。日共の裏切り史上でも、その破廉恥さと厚かましきにおいては、特筆さるべき裏切り行為が行われたのである。彼らは、労働者階級の先衛ではないことを、自ら明らかにしたのである。

労働者階級とその真の前衛部分(共産主義者同盟)にとつては、広島大会は種々の表面的複雑さをもちながらも、本質的には、プロレタリアートのブルジョアジーに対する闘争の場であつたし、また労働者階級の闘争を裏切り続けた日和見主義指導部に対する闘争の場であつた。

共産主義者同盟が、一切の既存の左翼からの独立性を宣言して、労働者階級の真の前衛としての姿をあらわし、現実の階級闘争に乗

り出してから既に九カ月が過ぎた。共産主義者同盟はこの期間、労働者階級とインテリゲンチア、学生の中に強固な基礎を形成することに成功したのである。

共産主義者同盟は、その組織的政的力をもつて、広島大会の指導にあつたのである。敵階級の攻撃の中で、共産党、社会党をはじめ、すべての既存の指導部が、これに屈服し敵階級の先としてその役割を果しているときに、全国の下部労働者とその同盟軍の結集とその指導の仕事は、わが共産主義者同盟の手にゆだねられたのである。われわれは、闘争を有利に進めるために、活動形態においては、幾つかの工夫をこらさなければならなかつたけれども、本質においては、共産主義者同盟の完全なヘゲモニーのもとに、広島大会における諸闘争を闘い抜いたのである。

われわれは、今、共産主義者同盟の発展過程においても、一つの画期的な闘争として記録出来るこの闘争を総括するにあつて、先ず何よりも、ブルジョアジーの先手としての役割をになつた共産党

を中心とする左翼平和屋の裏切り行為のバトロからはじめよう。

二 世界大会をめぐる政治情勢

世界大会の準備過程のうち、最終段階に至るまでの間は、左翼平和屋の諸君の裏切り行為は、大衆の前には、未だ明瞭になつてはいなかつた。だが、準備活動の最終段階では、共産党をはじめとして、裏切り行為が公然たるものとなつてきたのである。

プロレタリアートにとつてブルジョアジーの帝国主義的侵略政策との闘いの場であるべき筈の広島大会は、その準備過程における小ブル平和主義者の日和見の指導のために、敵階級に対する闘いという意味では、その役割を極度に低められて来たのであつた。

昨年来の警職法闘争において、一步の後退を余儀なくされた日本ブルジョアジーは、その後の巧妙な迂回作戦と、社会党、共産党の裏切りによって、春闘においては、明らかな優位をとりもどすに至つた。

民同の裏切りによる、春闘における労働者階級の敗北から、ブルジョアジーは、その政治的安定の一層の確保をめざして地方選挙と参議院選挙に取り組み、ブルジョアジーにとつての有利な結果を得ることに成功したのである。

参議院選挙の終了は、警職法闘争以来、なされるべくしてなされなかつた政治的再編成を、両階級をして急速にとり組ませる契機となつたのである。

ブルジョアジーは、政治的安定の一步として、自民党内の派閥を再編成しつ、第三次岸内閣を成立させ、池田、佐藤の官僚派を新内閣の中心にすえ、直ちに、安保改定、選挙法の改正、警職法の再

提出、労働三法の再検討、長期経済安定計画などをふりかざし、政治的高姿勢をもつてプロレタリアートに挑戦して来たのである。他方、労働運動を危機に導き、ブルジョアジーの政治的安定を許した労働運動指導部の再編成の仕事は、プロレタリアートの前に、最も重要な課題として提起されながら、労働運動左翼と称される諸君の無能力さのために、一層の右傾化の方向をたどらんとしている。かくして、政治情勢は、ブルジョアジーのヘゲモニーのもとに行しつ、ブルジョアジーによるプロレタリアートに対する全面的な政治的反動攻勢を行うための準備を着々とすすめているという基本特徴の中で進行しているのである。

こうした情勢の中で、プロレタリアートとブルジョアジーの中心

的対決としての安保改定問題をめぐる政治闘争は、以上の情勢をどの方向に進展させるかの鍵をにぎる闘争として、われわれの前に提起されて来ているのである。

二月二十八日の安保改定阻止第一波統一闘争、四月十五日の第二波と、さらに六月二十五日の第三波闘争ののち、急速に高揚を示してきた安保改定阻止闘争は、こうした情勢を背景にして闘われて来た。七月二十五日の第四波闘争と、「安保改定阻止、核武装反対、内閣打倒」のスローガンをかかげて起ち上つた首都の労働者を先頭とする八月六日の第五波統一闘争と労働者階級の闘争力は、日増しに強大となりつつある。

かかる情勢の中で、七月調印、臨時国会批准を企らんできた岸政府に戦術的後退を余儀なくさせ、藤山外相が「警職法のような失敗を繰り返さないために国民にもっと宣伝してから調印したい」と言明せざるを得なかつたように、現在では、年内調印、通常国会批准

という日程に変更せざるを得なくなっているのである。

こうして、安保闘争は、秋の階級的決戦の中心課題として、プロレタリアートの前に提起されて来ているのである。

第五回原水爆禁止世界大会は、かかる情勢の中で、準備され、開催されたのである。

三 大会準備期における「左翼」の裏切りとブルジョアジーの成果

だが、左翼の仮面をかぶった平和屋によって指導された準備活動は、極端な右翼的の中広主義のために、こうした情勢、とくに安保改定阻止闘争とは全く切り離されて、すめられた。広島大会準備の中で、原水協の中心的な運動であった平和行進は、政治の中心地への行進としては企画されず、安保闘争から逃げるが如く、外へ向けての進行として、宗教家的運動として企画されたのは、その一例である。(大衆運動は、これをも安保闘争の場に変えてしまったが)

原水協執行部は、一九五四年当時、原水爆の恐ろしさで広汎な大衆が「超党派的に」起ち上ったような状況をもう一度夢みていた。彼らは、安保問題等の階級的闘争の課題から、なるべく目をそらし、没階級的な大同団結を夢みていたのである。こうすることは、これら職業的平和屋の社会的地位がおびやかされずにすむのである。これは彼らの生活の基盤を維持し、出世主義的名譽欲を満足させるために必要だったかも知れぬ。

だが「敵のない平和運動」とか「保守、革新のちがいを越えた中

広統一戦線」とかのたわごとを繰り返すとは、自らをブルジョアジーの手先きに墮落させているのだということを、お気の毒なことに、彼ら平和屋は気付かないのである。

こうした極度に愚劣な右翼思想で、自社共の統一戦線が原水協執行部の場で実現されており、これを維持することに必死になっているのである。日本原水協執行部のこうした姿を見てとったブルジョアジーと、自民党政府は、これに乗じてプロレタリアートに対する一層の攻撃を加えて来たのである。即ち、小ブル平和主義者の日和見主義的指導にも拘らず、全国の原水協組織の中核たる労働者階級と、全学連に結集する学生運動は、安保闘争の先頭に起っており、そのために原水協中央も、安保改定反対をとりあげざるを得なかったのであるが、自民党は、原水協執行部をおどし、これをもつぶし、中間層を労働者階級から引き離そうとしたのである。

七月中旬から下旬にかけて、広島はじめ、各地方自治体は、自民党の指示のもとに、それまで行ってきた世界大会に対する財政援助を打ち切るという手段を構じて、日本原水協の組織に圧迫を加えはじめた。自民党七役会議と政府閣僚会議は、広島大会問題をとりあげ、この決定に従い、自民党幹事長川島は、次の談話を発表した。

「最近日本原水協が、共産党、社会党、総評などの安保改定阻止の共同闘争に加わり、近く広島で開かれる原水爆禁止世界大会で、その大会基調として安保改定に反対し、日米安保条約を破棄することをとりあげたことは、平和運動を政治闘争に利用するもので行きすぎも甚しい。この意味で、わが党広島県議員団は、広島県原水協に対する県の助成金に反対し、その予算を県会で否決したことは、妥当な措置である。党はこの態度を支持するとともに、各地におけ

るこの種の偽装平和運動を厳重に監視するよう都道府県支部連合に要望することにした。」と。

川島談話で明らかになく、自民党の原水協執行部に対する具体的要求は、「安保改定阻止、安保廃棄」を大会基調として取りあげることを止めさせることにあった。

この川島声明を契機に、ブルジョアジャーナリズムは、さわざはじめた。丁度そのとき、日共の志賀義雄は、二十四日松江において、川島発言を支持するかの如く、広島大会は、平和運動のデパートではなく、原水爆禁止問題と安保問題を切りはなすべきだとの談話を発表した。この志賀談話が、労働者大衆の激しい反発に直面するや、あわてた日共本部は、二十五日野坂が記者会見を行って、自民党への抗議を表明した。だが彼は、安保問題に対する共産党の低姿勢をかくそうとしなかった。野坂は最後に次のように付け加えた。「われわれは、第五回原水爆禁止世界大会が、核実験禁止、不使用や、被爆者救援などについて、政府や大国会談に訴えるとともに、核武装や海外派兵と安保改定とのむすびつきの内容を充分に討議することを期待している。」と。野坂は、安保改定反対闘争は起ち上っている大衆に向って討議をすればよいかの如く呼びかける、その甚しい政治的たちおくれをかくそうとしなかった。

志賀もまた、彼らしいズルさをもって、いい訳けを長々と「アカハタ」に発表した。彼は、「世界大会は平和運動のデパートではない。」という言葉をかまかすことはできなかった。彼は「一部の極左分子が考えているように、広島大会を安保反対どころか岸内閣打倒のために利用しようとするのは正しくなく。」と語ったのである。

だが、労働者階級と、前衛が、階級闘争に勝利するために、あらゆる場を「利用」しようとすることは、前衛にとっては当然のことではないのか。安保改定阻止、岸内閣打倒の闘いは、現在の階級闘争における最も重要な政治的課題ではないのか。

志賀の発言は、全く階級闘争からとりのこされた小ブルジョアの泣き言に過ぎないのであり、「前衛」ではなく「後衛」になり下った官僚のつぶやきでしかない。これが志賀の本質である。

こうした野坂、志賀の談話の内容は、七月二十七日「アカハタ」の主張に、長々と述べられている。この主張は、日和見主義者の論理の典型的なものであり、論理的に支離滅裂だという点で記録に残さるべきものだが、特に重要なのは、これが世界大会に対する共産党の最終的な具体的方針になったということである。

この主張は、「具体的に正しくない傾向と方針が八六大会の中でどのようにあらわれようとしているか」という問題に対して、「その一つは、原水協や、その運動の中に、すべての問題をもち込もうとする傾向である。すなわち、こんどの大会の重点は安保であり、安保一本でつらぬくという論者が一部にいる。」「問題は安保反対に熱心なあまり、善意にせよこれを頭から押しつける傾向は十分注意されなければならない。」と結論している。

だが、原水協や、原水爆禁止運動の中に、原水爆禁止と平和のため、必要な「すべての問題をもち込もうとする傾向」がどうして誤りなのか。具体的政治問題を避けようとするからこそ、敵階級の主張ではないか。こんどの大会の重点が安保問題にあることは当然ではないか。

「こんどの大会の重点が安保である」という主張と「安保一本で

つらぬく」という主張とが、同列にならべられ、同じこととしてここに書かれているが、これが同じこととして取り扱われていることほど馬鹿げた、非科学的な討論はない。「重点である」ということは、当面の原水爆禁止運動の諸課題のうちで、安保問題が重点であるということの意味しているのであって、「安保一本でつらぬく」ということの意味は異なるのである。こういう不正確な論理をもって安保が重点であるという主張を非難しているところに、アカハタの主張の甚だしいごまかしがあるのである。結論的にいえば、安保一本で貫くという論者は、世界大会の中では、発見されなかった。だが世界大会に参加した圧倒的多数の代表が、安保は重点であるという考えをもち、これを主張していたのである。

「安保が重点である」という考え方は、今では、安保改定反対闘争を闘っている労働者大衆の間では、常識とさえいえる。こういう常識的なことすら否定し、非難するのであるから、日共の諸君の非常識も甚だしいといわねばならないのである。われわれがここでもう一步論をすすめて考えてみると、日共の諸君の誤りが、この程度のものでなく、もっと徹底的であることが分るのである。即ち、もし世界大会が、現在の日本の政治情勢の中心問題としての安保問題を正確にとらえていて、この闘争一本に集中しようという方向を出したとしたら、そして、こう主張する論者がいたとしたら、労働者階級の前面部分をとるべき態度は、自ら明らかであろう。

日共の諸君が、警職法反対闘争一本に労働者階級の全エネルギーを集中すべき時期に「安保改定反対その他の諸要求との結合」を主張することによって、闘争のエネルギーを分散させ、闘争の発展を妨害する役割を果たしたことは、われわれの記憶に新しいところである。この論理は、当然のことだが、これは日共の諸君の論理とは全く逆である。だが日共の諸君の頭脳構造が如何に狂っているかの診断は、これだけ見ていては不十分である。「岸内閣打倒のために闘っている」等の共産党が、原水爆禁止世界大会で「岸内閣打倒」の決議を行うことが「誤りである」と断定することほど狂った主張はない。「現状では、岸内閣打倒の決議は無理だ」とか「これを決議するのは、もっと充分に討論して次の機会を待とう」というように主張するのならば、まだ話しはわかる。

ただここで、次の事実問題だけは触れておかなければならない。「党が……岸内閣打倒をめざして闘うことに熱心である」ということは、ここで申すまでもなからう」という言葉は、全くの偽りであるということである。これを証明するには次の例をあげれば充分である。すなわち、安保改定阻止国民会議の幹事会において、共産党は、(共産党だけが)常に岸内閣打倒に反対して来たという事実がある。総評、全学連、東京地評、そして社会党すらが岸内閣打倒のスローガンをかかげて、安保改定阻止闘争をすすめるべきだと主張しているとき、常にそれに真向から反対したのは、共産党と平和委員会代表(共産党員)原水協事務局代表(共産党員)だけであった。八月二〇日のアカハタ一面の記事をみれば、なお一層明白となる。「安保闘争を『国会解散、岸内閣打倒』にそらすな」という見出しをかかげて、共産党の主張を解説している。この中で、共産党が岸内閣打倒のスローガンに反対であるとの明瞭な態度を表明してい

ある。

われわれは、敵に対する諸闘争をそれが全国闘争の重点になつていないという理由で、この闘争を抑えることに反対しなければならぬ」と同時に、全国的な政治闘争の重点に全労働者階級とその同盟軍のエネルギーを、集中しなければならぬのである。日共の諸君のきらいな言葉を使えば、「一本に」集中しなければならぬのである。

このように、一字一句非マルクス主義的な論理にみちた「アカハタ」の主張は、最後に次のように書いている。「トロツキストや社会党の一部が、八六大会に岸内閣打倒の方針とスローガンをおしつけようとしている。これは全く正しくない。」「党が岸内閣に反対する一切の民主勢力および社会党と協力して岸内閣打倒を闘うことに熱心であることは、ここで申すまでもなからう。だからといって八六大会で岸内閣打倒を決議することは誤りである。重要なことは岸内閣や自民党を支持する人をふくめ原水爆反対の一点で団結することであり……」と。ここで、日共の諸君の考えていることが具体的に明確になった。

簡単な問題からはじめよう。日共の論理には「原水爆反対の一点で団結すること」が今重要なことだという論理である。自民党も口では「原水爆禁止と実験禁止」を要求している。国会でも満場一致決議された。「原水爆反対の一点での団結」は既に早くから実現した。だが何故、核兵器による帝国主義戦争の危険がなくなるのか、当然のことだが、帝国主義がそのまま存在しブルジョアジーの帝国主義的侵略政策がそのままにされているからである。従って「重要なことは」、帝国主義の打倒に向って、帝国主義者の政策を

る。八月六日には首都の労働者が「安保改定阻止、核武装反対、岸内閣打倒」のスローガンで、大統一闘争に立ち上ったときに、共産党は、岸内閣打倒に反対し続けたのである。

「国会解散、岸内閣打倒」の闘争スローガンが、安保闘争をそらすものになるという主張は全く事実を反するし、日共のこの主張と全く反対に、このスローガンは、安保闘争のあり方を一層明確にしているのである。このように書くと、日共の諸君は「労働者はそれほど意識は高くない」というかも知れぬ。だが日共の諸君よ。諸君の同類が、安保国民会議幹事会の席上、これと同じことをいったら総評の幹部は何と答えたと思うか? 総評の幹部は、「労働者階級を侮辱するな」と答えたのだ。

よくも、「党が岸内閣打倒をめざしてたたかうことに熱心であることは、ここで申すまでもなからう」などと横着な大ウソが書かれたものである。この厚かましきには、ドン・ファンといえども顔まげすることであろう。

われわれは、長々と七月二十七日のアカハタ主張の内容を解説した。日共の裏切りの主張は明白になった。だが、ここで重要なのは、七月二十七日という時期に出されたことによるプロレタリアートに与えられた損害である。日共は、遂にブルジョアジーに最も忠実な、裏切りの指導部になり下ったのである。

社会党は、共産党よりも、ずっとズルくたまわった。浅沼は、志賀発言を敗北主義だと非難することによって、左翼の人氣を一身に集めんとした。しかし、二十五日、記者会見を行った社会党国民運動委員長の間根は、安保と核武装との関係を述べた後、「だが安保を押し付けてはならぬ」と付け加えた。

ここで、世界大会に「安保改定反対を押し付けない」という点で
の社共の意志統一がはかられたのである。

この間、原水協理事長安井氏は、自民党との妥協のために、諸方面に
対し必死の工作を行っていた。七月二十七日、川島と会話し、妥協の道を見
付け出そうとしたが、川島の高姿勢の前に失敗した。だが、安井は、より一
層大きな妥協を行なうことによって、川島との「了解」を付けようという
気持を捨ててはいなかった。こうした安井の急速の右翼化は、目にあまる
ものであったが、共産党、社会党のバックアップによって、孤立の心配も
なく、右翼へのトンボ返りに成功したのである。

かくて、世界大会の準備活動における最終段階において、七月二十三日には、
原水協全国理事会において、「安保改定阻止、安保条約廃棄」を満場一致決
定したに拘らず、わずか数日を経ずして、この最も重要な政治スローガ
ンを引き下ろしてしまつたのである。しかも正式の決定もなく幹部のボ
ス交によって、こうして、ブルジョアジーが、プロレタリアートを中間層
から孤立させようとして企てた原水協への攻撃は、共産党を先頭に
した裏切り行為のために、許されてしまつたのである。

四 戦術左翼の反撃と平和屋の反動化

はじめに次のことをお断りしておく。「戦術左翼」という言葉は、
広げられて悪意にのみ理解され勝ちであるが、そうした理解は一面的であ
って決して正しくない。われわれは「戦術左翼」の

こうした安井の考え方は、執行部全体からは、当然の如く考えられ
たのであった。

このことは二日の夜の予備会議「まとめ」の起草委員会で、明らか
になつた。

会議の「まとめ」は、当然会議の実状を反映するものにならねば
ならないのだが、会議の実状を反映するとすれば「安保改定反対」が
決つてしまつたのである。左翼平和屋は、ここでも、自民党の手先と
見事に妥協し、次のような意味のない「まとめ」を書きあげたのである。

『これに関連して(軍事プロットのこと) 外国代表および日本代表
表から現在計画されている日米安全保障条約の改定は、日本の核武装を
強化し、また促進するのではないかと深い疑念が表明された。この危
険を考慮すれば、分科会はこの問題に不安を感じ深く憂慮せざるを得
ない』

八月三日、予備会議の最終総会において、「まとめ」が提案された。
大会執行部は、この「まとめ」が大衆討議にかかつて、折角のボス交が
台なしになるのをおそれて、討議の時間も出来る限り制限した。だが、
こうした大衆闘争とは縁のないボス交でまとまつた日和見的結論には、
当然反撃がおこつた。「安保改定反対」を主張する大会運営委員長の
小山は、討議の打ち切りを提案して政治討議を、議事運営の討議に
すりかえ、時間の不足を理由に強引にこれを押し切つてしまつたので
ある。だが、小山は、大衆討議を抑えるために、若干の譲歩をしなければ
ならなかつた。彼のこの譲歩のために「まとめ」は、予備会議で正式に
決定されず、八月五日の運営委員

境界は明らかにしなければならぬが、同時に、戦術左翼の現実の階級
闘争の中の役割りを正当に評価しなければならぬ。現在の日和見主義
的潮流が、戦術的にはズブズブの右翼中広主義におち込んでいるとき
であるから、この点は、はっきりさせておかなければならぬ。

八月一日、数十名の外人代表と約百人の日本人代表から構成され
た世界大会予備会議がはじまつた。予備会議を、世界大会の前に行
うことにした理由は、平和屋が、国際的権威を借りて、自己の日本
の中での地位をかためたいところにあつた。

八月一日の会議の低調さと、日本代表の萎縮してしまつて、活気
すらなくした状態には、「戦術左翼」の部類に属する外人代表も、
ほどほどあきらめられたらしい。

八月二日になると、日本人代表の極端な「低姿勢」を非難する
かの如く、フランス、ヴェトナム、オーストラリア、アルジェリア等
の代表が、平和運動は帝国主義者との闘争でなければならぬと反帝
闘争を主張し、日米安保条約改定を国際問題として重視し、これに
反対しなければならぬと訴えた。会議の圧倒的多数がこれを支持し
ていた。

一部の日本代表は、これに同調したが、大会執行部の諸君は、
「安保」という言葉を使い続け、この言葉を使うのが恐ろしいかの観
すらあつた。共産党員、社会党員、自民党員と自民党支持者を含め
て、大会執行部の「低姿勢」は、全く滑稽ですらあつた。第一日
目に安井が「安保問題を検討しなければなりません」と述べたとき、
彼は、異常な決意をもって、これを語つたのであつたが、しかし、
「安保改定反対」をうち出す気持ははじめからなかつたのである。

会にもち込まれたのであつた。

八月五日頃には、全国から続々として、世界大会代表が到着して
いた。五日の運営委員会は、こうした大衆的雰囲気若干反映して
討議も、次第に激しさを帯びて行つた。会議は、右翼と左翼平和屋
との野合による「安保反対」を、「まとめ」の中に入れてい
ることを主張する部分と、外国代表を含む「安保反対」を主張する部分とに
真二つに分れた。わが同盟は、この部分の先頭において、最も頑強
に闘つた。そしてこの部分が圧倒的に強かつた。右派も頑強な反撃
にたち激論が闘わされたが、これも、三日の会議と同様小山の非民
主的運営と、マヌーバーのために、混乱の中で会議が終了せられて
しまつたのである。

こうした裏切りと反動化を阻止する仕事は、八月六日の分散会
での大衆討議にゆだねられたのであつた。

五 裏切られた大衆運動の

一時的成功

わが共産主義者同盟の指導のもとに、全学連等、幾つかの大衆組
織の間に、世界大会に対する統一決議案が作成された。これは「安
保改定反対」を中心に九項目からなつていたが、それぞれの項目が
「統一行動」のために意味のあるものであつた。徒つて、この統一
決議案には、非常な多数を含めることに成功したのである。

この統一決議案は、十七の分散会場で、会議の冒頭に一斉に提案
された。討議は「安保改定反対」派の圧倒的優勢のうちに進行し
た。すべての分散会で、「安保改定阻止」の運動方針が決定され、

確認されることは殆んど確実とみられた。

だが、平和屋の諸君の反撃は、思わぬところからはじまった。分散会終了間際になって、各分散会ともに、殆んど時間的にも一致して一斉に、「分散会は決議をするべきでない。」という運営方針を大会運営委員会の態度として出して来たのである。討議は、当然この運営方針を含めて、安保問題を討議するという方向に引きずられた。下部大衆の不満が爆発し、運営委員会の官僚主義と衝突して、混乱した分散会も幾つかあった。第一分散会は、議長団運営委員会が、官僚的に一度は会議を解散させたが、大衆の力でこれを再会させるのに成功し、十六分散会は、会終了後、約三分の一の代表が残って、運営委員会の非民主的運営に抗議し、自己批判をせまじり、遂に自己批判させた。

大会運営委員会で決定されてもいない「分散会では決議を行ってほならない」という運営方針を、「決定された」という大ウソをつけて、大衆の意志を抑えようとした。その裏には、ある勢力の陰謀があった。わが同盟や全学連に対して激しい不信をもったある勢力の見にくい陰謀があった。

しかし、少くとも六日の分散会における大衆討議では、ブルジョアジーの策動と、それと野合し反動化した日和見主義者の陰謀は粉碎された。大衆運動は、ここでは、自らの意志を貫き、十七分散会中、十五の会場で、「安保改定反対」を決議または確認させることに成功したのである。

わが共産主義者同盟のもとに、労働者階級とその同盟軍は、見事な統一戦線戦術をもって、ブルジョアジーと、その手先の役割を果すに至った日和見主義者との闘いを、成功的に闘い抜いたのであ

る。

だがしかし、六日夜から、世界大会の中心舞台が、大衆討議の場から、再び、ボス交の場に移るや、再び、目にあまる裏切りが連続的に行われた。この間の経過は、全学連書記局通達「世界大会と全学連の活動」の中にくわしく書かれているので、省略するが、七日夜の閉会式で読みあげられた文書は、正式の会議の決定として提案されたものではなく、少数の平和屋のボス交によって、作りあげられた、大衆討議とは無縁な作文でしかないということだけを強調しておこう。

かくして、最終段階では、再び、労働者階級の意志は、裏切られたのである。わが同盟の中に、この最後の裏切りを過少に評論して、大衆の意志が決議宣言に反映しなかったことに絶望的な気分に乗られた同志があったが、これは、骨髄までくさり切った小ブル平和主義者に対する過少評価から来しているのである。

闘いは、今後にもち越された。秋の安保改定を中心とする大衆闘争の中で、真の共産主義者にとって、かかる右翼日翼日和見主義者との死闘を行わずして、闘争の勝利を実現することは不可能である。そして、広島大会は、共産主義者同盟がこれら日和見主義者との闘争で、先頭に立ち得る条件を作ったという意味で、共産主義者同盟の歴史の中では、画期的意味をすつものとなったのである。

- 六 今後の原水禁運動にたいする同盟の態度(次号)
- 七 戦後平和運動の破産と今後の展望 ()
- 八 活動上にみられた組織上の諸問題 ()

59・8・22

現代における革命と労働組合(Ⅰ)

プロフィントレルンの教訓(一)

清 川 豊

はじめに

総評は四年前の第七回大会で「組織綱領」の作成を決め、二年後に「産業別組織の確立」という基本目標にむかって前進」するためにとの旗じるしの下にその草案を発表した。だがその間に日本労働運動がたどった道は総評幹部の形容しがたい裏切による苦難の連続であった。

日本資本家階級が神武景気の波の中から帝国主義列強として強力な自主発展の道を歩み出すにしたがって、労働者階級に対する攻撃はかつてない巧妙さをもって、続けられてきた。労働者階級の脊骨であることを自他ともに誇っていた国鉄労働組合が、岸政府の真正面からの攻撃をうけ、歴史的な新渦闘争をもってこれと対決しながら、あえなく敗れ去っていったことは、その後の闘争にあらゆる意味で深い影響を与えた。藤林あっせん受諾後、「よくもあれほど腰

を抜かしておられるものだ」とあきれられるほどの低迷を続ける国労を見ならえとばかり、全通、日教組そして炭労と日本の労働運動の基幹部隊へ追撃が続けられている。

だが、労働者階級は、警職法闘争における大きな統一的反撃を筆頭として、それぞれの組織の中で少なからぬ力量をもって闘争を続けており、新しい突破口を求めて大きく動いていることは、あらゆる闘争においてうかがわれることである。

特に、「合理化」の名のもとに、新技術の導入による生産設備の刷新と、その中でも画期的な意味をもっている労務管理体制の近代化が全体としておそいかかっている現在、労働者階級は合理化による直接的な経済的圧迫(配転、首切り、労働強化、中小企業での圧迫等)と並んで、それに対して自からの利益を守るべき手段、階級的結果の場としての労働組合や労働基本権に対する重大な攻撃に直面している。

国家独占資本段階といわれる現在の世界資本主義の発展過程の中で、日本資本主義が迎えている現在の局面は、敗戦以来十余年にわ

たる再建を、最終的に終え、文字通り新しい体制を確立せんとするものであり、労働者階級にとっては、それまでの階級的結集の基盤そのものが、分断され再編成されていく危機にあるといえよう。ヨーロッパ、アメリカにおける階級闘争の歴史的经验を、きわめて階級的に学んだ資本家たちは、米、英、西独等の経験を日本に持込むことになんのためらいも感じない。すなわち日本資本家階級は、あらゆる手練手管を知っている「先進」諸国から、労働者を自己のためにつなぎとめる組織方針を色々と受入れている。日経連がその総会で「企業別組合という歴史的条件を考慮に入れた日本独自の労働組合を作らねばならぬ」とのべているのは、単なるお喋りではなく、職場において深刻な闘争の課題となっている。

これとともに、徹底的に闘争を裏切り続けた総評指導部「民同派」もまた「民同指導の限界」を自から口にしてきている。昨年末ごろより太田総評議長は「民同はいまや限界にきた……合理化闘争をたたかいて民同の欠陥を痛感した……いまの民同は職制民同だ……」等々とぶって回り、岩井事務局長さえ革命の日本的形態などとしやべっている。彼らは社会党の党内闘争において強力な一派をつくり、向坂論文をかかげ、「社会党をつよくする会」を組織し、労働運動の新しい発展を作り出すための真剣な努力を続けているかのごとくふるまい、事実下部労働者の中に一つの流れをつくらうとさえしている。最近はいわゆる「下呂談話」において共産党との共党を打出しさえした。

これまで闘争を一つつぶすたびに、自からの指導に対する追求を「まかすため一企業別組合の弱さ」を叫んできた彼らが、自分たちの民同派の欠陥であると公然と語ったとしても、組織の弱さ、下部

の意識に全てを転嫁し、闘争の指導について何らの有効な自己批判をしない彼らの態度を、われわれが、かりにも前進と認めることは許されない。下部労働者から、ふつふつと湧き上ってきている幹部不信の声の中で、自己の地位を守り、裏切りの体制を維持、強化するために、左翼的な大言壮語をなしたとしても、労働者大衆とでなく民同幹部との密着を熱望している代々本共産党との共闘を口にしたとしても、別におどろくにはあたらぬであらう。

むしろ真に労働者階級の解放をめざして闘う革命的労働者、前衛党員にとっては、日経連が労働組合の再編、健全な発展をかかげる時、現に労働運動を生かすも殺すも自由な力を持っている民同幹部が、自分から運動の新しい方向、組織問題を持出したことにこそ最大の注意を払うべきなのである。

資本家が、そして改良主義者が、資本主義の新たな発展にともなう労働者の変化をとらえ、彼らなりに労働者を組織しようとする時、われわれもまた労働者階級の解放のために新しい布陣をととのえねばならない。労働者大衆の前に、その階級的結集の方針を提起しなければならぬ。

二

労働組合は、資本主義社会においてプロレタリアートが自己の利益を守るための唯一の組織である。労働力を売る以外に何物もたぬプロレタリアートは、ただ自からの団結によってのみ相互の競争を防ぎ、その労働力の価格を引上げ、労働条件の改善をかちとることができる。それは「資本の力に対しては、個人の力は無に帰した。そして工場にある労働者は最早、機械の車輪以上のものではな

い。労働者は、自己の個性を奪還するためには、団結して、彼らの賃金と彼らの生活を防禦するために団体を設立せねばならぬ」(国際労働者協会総務委員会の支部、友誼団体及びすべての労働者に与える檄より)との要求から「労働者の自然発生的な試みから発生した」のである。これはマルクスの時代から国家独占資本主義の現在に至るまで変らぬことであり、中小企業において、組合設立の激しい闘いが連日連夜、全国津々浦々で闘われていることをわすれることはできない。しかしながら、「従って労働組合の当面の目的は、日常の要求、資本の絶え間なき攻撃に対する防禦の手段、一言して言えば賃金と労働時間の問題に限られていた。労働組合のかかる活動は、単に是認されるのみならず、必要である。今日の生産方法が存続する限り、労働組合を欠くことはできない。反対にそれは、あらゆる国々における労働組合の設立及び結合によって一般化されねばならぬ」(国際労働者協会ジュネーブ大会の決議——マルクスの起草——)というかぎりにおいては、今日では資本家側も又これを認め、進んでこれを提案さえしている。特に労働者階級の長い闘いによってかちとられた労働関係の法律や政府の労働関係機構を、階級闘争の結果としてでなく、超階級的な国家によるものとして宣伝していること、及びそれと歩を一つにして闘争を経済闘争のワケに限る改良主義者が労働組合を深く支配していることは、現代の特徴である。アメリカのAFLが資本家のための労働力販売会社として未組織労働者、失業者等と敵対的なまでの関係をとっていた(これに対してCIOが新しい労働者の結集の道として成立したのであるが)例や、ヨーロッパにおけるギルド的な職能別組合が排他的、特権的にふるまってきた歴史は、こうした限界の内部においては、労

働組合はプロレタリアートにとって桎梏以外のなものでもなくなること示すものである。

だが、巨大な資本の集中とそれにとまらぬ労働者の集中が進み、国家による超階級的な労働者の「保護」が行われるかのごとき政策がとられている今日はどうであろうか。たしかにマルクスが「賃金、価格、利潤」の最後でのべていること——「そして一般的にいえば、労働組合は現存制度の結果に対する小ぜりあいのみを事とする為に失敗する。即ち、それと同時に現存制度を改革しようとする、自己の団結力を労働階級の最後の解放、即ち賃金制度の究極の廃止のためのテコとして用いようとしないうちに失敗するのである。」——が通用しなくなったのではないかと思われる現象が見られる。AFL-CIOは「賃金制度の究極の廃止のためのテコ」には絶対にならぬことを身上としながら、否そうしているがゆえに、アメリカの巨大独占の一機構としてのいわば労働力販売シンジケートの役割をますます強くしているといえるであろう。又イギリス労働組合評議会(TUC)や西欧のこれに類したもののごとく、社会民主主義者の全一的支配の下で、その全エネルギーが「労働党政府のために解消され組合自体は十年一日のごとく経済的利益の維持に努めるといったものは、ますます多くなってくる傾向にある。

以上のごとき場合では、労働組合は階級闘争の中において明らかに保守的な、資本主義制度の擁護の「支柱」としての役割をはたしているといえよう。第二インターナショナルの中で歴史に登場した改良主義は、今日においても組織された労働者の上に主要な立脚点をもっており、それは国家独占資本段階において「国家」の幻想性を十二分に利用した新しい装いをこらしているといえよう。

さらにわれわれは、共産主義者を自認する者とその支配する労働組合の動向に注目しなければならない。すなわち、イタリア労働総同盟をはじめ、世界労連の中心をなす方針、社会主義世界体制の発展という「新」情勢の下で、労働者階級は、握りの独占資本に対して広汎な反独占統一戦線をもって挑み、その基礎をほりくずしていくこと、即ち独占資本の「政策」を大衆的圧力で変えさせ、労働組合の提出する「生産プラン」にもとづいて生産を行うよう「強制」することにより、社会主義へ「構造的な改良」をなそうという潮流である。人民戦線時代の経験をもとに作り上げられたこの現代マルクス主義の戦略は、資本主義体制——ブルジョア権力の打倒のための過程を省略したまま、労働組合に自から生産の主人公となるよう振舞うことを要求するものであり、国家独占資本主義段階に応じた、新しい改良主義、資本主義擁護の道になるであろうことは明白である。

それでは労働組合についてマルクスが規定した今一つの定義「労働組合は、自から意識することなく、中世の都市及び自治体がブルジョアジーの組織の中心となったが如くに、労働者階級の組織の中心となったのである。労働組合は、資本と労働との間の日常の小競合いに欠くべからざるものであるが、それは賃金労働組織自体の廃止の組織的促進手段として尚更重要である」(前掲ジュネーヴ大会の決議)——も又、否定されてしまおうのであろうか。

「労働組合は今後、意識的に、労働者階級の組織の焦点として、その完全なる解放の大なる利益のために、活動することを学ばねばならぬ。労働組合は、この目的を目指して進む一切の社会的、政治的運動を支持せねばならぬ。労働組合は、自らを全階級の前衛と、またその代表と見なし、それによって行動する時は、労働組合の外

件の検討。特にかつての、トレードユニオン型、社会民主主義型、サンジカリズム型といった分析から、現在のAFL-CIOに典型的な階級性自体を否定する労働力供給及び労務管理機構としての組合、経済主義的、改良主義的な組合、構造的改良の担い手としての組合等の内部実態を精密に分析しなければならぬ。

企業別組合が最大の弱点であると、だれもかれも認めている日本労働運動において、それではいかにこれを打破するための努力がなされたのか。また万葉集のごとくいわれている産業別組合は、はたしていかなる力をもつのか等について、革命の見地から検討を加えねばならない。

プロフィンテルンの結成

四

労働組合を、明確に革命のためにその力を發揮するよう、意識的に利用しようとする活動は、一九一九年のコミンテルンの創立によって本格化してきた。すでにマルクスが「国際労働者協会」を結集した時、これは労働組合の世界的な友愛的団結の機関であると同時に、全世界の革命を担うべき「前衛」でもあった。「第一インターナショナル」の呼称がこれに与えられたのは当時においては労働組合自体が、労働者階級の前衛としての任務を負っていたことから当然である。だがヨーロッパにおける社会主義勢力の台頭にもない。新らしく社会主義政党的結成の機運の増大とともに、「国際労働

に立つ者をその内に引き入れて行くことに成功するであろう。……労働組合は全世界をして、その努力は狭量であり、利己的であるところか、かえって蹂躪されつつある大衆の解放を目的としていることを確信せしめねばならぬ。」(前掲決議)——これを表現するためには、われわれは新しい労働組合を組織しなければならないのだろうか。あるいは現在の労働組合に対して、いかなる対処をすべきなのか。全世界における社会主義革命を目ざす者にとって、それは早急に明らかにされねばならぬ問題である。しかしこれはこれまでの労働運動の歴史的研究と、同時に各国各産業における特殊な事情を十分ふまえた上での労働者組織の検討によって織りなさねばならぬものである。さらに一切の中心に革命の主体——前衛党の組織をしっかりと据えることが必要である。われわれはいかにこれが老大な仕事であるうとも、中心的な前衛党の確立についての問題意識をもたぬ社民教授に任せることはできぬし、ましてやスターリニズムのドグマによって労働者階級が毒されているのを看過することはできないのである。

三

革命のテコとしての労働組合の検討は、次の三つの方向から行いようであろう。

1. 前衛政党的、大衆的結集の場としての労働組合の関係。権力奪取に至るまでの労働組合の位置の検討。
2. 労働組合運動の歴史的総括、特に左翼労働組合運動(プロフィンテルンから世界労連に至る)の経験の検討。
3. 各国における産業の特性とそれにもとづく労働者の結集の条

「労働者協会」は自から第二インターに席を譲った。しかし第二インターの墮落は革命の指導者としての資格を自から失ったばかりでなく、その思想によって、近代化された産業にともなう合法的労働組合とその官僚的指導者——労働貴族の力を強大なものとした。第一次大戦の中で自から破産した改良主義の潮流は、しかしながらただレーニンの非妥協的な闘争によってのみ粉碎することができたのである。極端にいうならば、レーニンがいたからこそ、ロシア革命が成功したのであり、他の西欧諸国においては、レーニンがいなかったために、戦後ふたたび改良主義者の復活をゆるしたのであった。資本主義支配の一角をロシアにおいて突きくずしたボルシェヴィキ党は、その力をテコに世界革命——ヨーロッパ全体の革命へと進撃した。レーニンは新しいインターナショナル、コミンテルンの創立によって世界革命の指導部隊、全世界にわたる共産党の組織を開始した。そしてこの前衛党の活動を中心に、各国における革命的な大衆運動を党のもとに引きつけ、これを正しく指導するための作業が開始されたのである。

革命的労働運動の結集——赤色労働組合の世界的な結集は、こうして世界革命の中心的政策として始められたのであることを第一に明らかにせねばならぬ。

「極左」の名のもとにヤミに葬られている赤色労働組合——プロフィンテルンの経験をわれわれがはっきり掘りおこし、ボルシェヴィキらしい自己批判のもとにそれを検討することは、今日特に必要である。なぜならばプロフィンテルンの設立当時のレーニン主義の思想を失ったものたちによって労働運動が世界的に支配されているからである。そして彼ら——スターリニズム——こそ、プロフィン

テルンを「罪悪」の見本にした本人なのである。

「職業別及び産業別労働組合国際評議会」を正式の名称とする。革命的労働組合の国際組織は、一九二〇年六月モスクワに集まった数カ国の労働組合指導者によってその基礎をつくった。

当時、ヨーロッパにおいては、世界大戦の破壊の中から労働者階級が急速に立上っている時であった。労働者大衆は労働組合に結集し階級としての大きな動揺が続いていた。

これは二つの、まったく相反する方向に引っぱり合われていた。すなわち、一つはロシア・プロレタリアートの勝利の与えた巨大な影響により、ソビエト・ロシアへ向う流れであり、今一つは、ブルジョアジーの新しい活動——国際連盟の結成とその「国際労働局」(ILO)へ労働者を向かせる流れと、それと表裏一体をなす改良主義者の復活であった。

大戦によって粉みじんになった第二インターを再建する工作はヴェルサイユ講和や国際連盟の組織と並んで行われたが、ソビエトロシアという巨大な力を持つコミンテルンの前には、第二半インターも含めてこれは影のうすいものであった。しかし同じく大戦で粉みじんになっていた「国際労働組合連盟」の再建は、改良主義者にとって新らしく労働者階級の支配権を保たせる唯一のそして強力な手段となった。スイスを中心とする中立国の労働組合の長い努力によってようやく一九一九年アムステルダムにその基礎を築いたこのインターナショナルは、内部において「戦勝国」のドイツ、オーストリアに対する追求という珍無類の抗争をふくみながらも、すぐれて改良主義的な活動を開始した。

アムステルダム・インターの中心の方針はいわゆる「社会化案」

社民に對立する左翼の大部分は、強力な伝統を帯びるサンジカリストであった——を、ロシア革命の方へ引きよせた。大衆の圧力から身を守るために、資本主義の打倒について激しい口調でアジッタのちソビエト旅行に出發するという、「モスクワもうで」がひんぱんに行われる様になった。

ロシア共産党が全世界にコミンテルンの設立を目論んでいたのと同様に、ソビエト・ロシア労働組合はかなり前——ボルシェヴィキがまだ完全にその多数を握らぬ一七年六月の労働組合第三回会議において、新しい労働組合の世界的結集の必要を訴えていた。一九一九年から二〇年にかけての情勢はこれを実現すべき絶好のチャンスであった。

コミンテルンは、第二回大会において労働組合に対する戦術の基本を決定した。それは「労働組合の破壊か獲得か」の論議に示される通り、共産主義者に改良的組合の中において、これを獲得すべきことを大胆に打出したものであった。先述したドイツ共産党の「左翼」方針に対しレーニンが「左翼小児病」を書いて闘ったことがその中心であった。コミンテルンは、基本方針を打出す一方「モスクワもうで」にやってくる「左翼」分子をとらえて「労働組合のツイムメルヴァルド」というべき中心機関をつくったのである。「職業及び産業組合の臨時国際委員会」という名のこの機関は、「新しい組合の萌芽であり、労働組合運動において反対派の態度をとっていたあらゆるものを組織し形成せんとする試みであり、これは未だ明瞭なる綱領も明確にして決定的な戦術も立ち立ってなかった」(コミンテルン執行委員会におけるロゾフスキーの報告)のである。

に対する花やかな論議と、国際連盟の一機関としての活動であった。「労働は商品にあらず」に始まるヴェルサイユ条約第十三条は、彼らの最大の収穫物とされ、それにもとづく「国際労働局」は全ての労働者階級の利益を満たし、社会主義への道を開くものであるかのごとく、くりかえしのべられた。(この「国際労働局」は、本家の国際連盟よりも長生し、国連に引継がれ、やはり今日の改良主義者にもはやされている「ILO」であることはよく忘れられる。)労働者階級の昂揚を巧みにとらえおびたしいお喋りによって自から「平和」の守護者、社会の支配者のごとく振舞うことにより改良主義者は中心的な工業国の労働組合を自分の鎖につないだのである。

今一つの、改良主義に對立するものは、ロシア革命に對する大衆的な支持と、各国の共産党の活動であった。アムステルダム・インターさえ、干渉軍や反革命軍と死闘を続けるロシアソビエト政権に對し「好意」を表明せねばならなかった。だが一九一九年の敗北によりドイツ・プロレタリアートはローザ・ルクセンブルグとトリプタネヒトを一挙に失っており、一九二一年イギリスでは「暗い金曜日」で知られる三角同盟の崩壊という手痛い打撃をこうむっていた。スパルタクスが打倒され、イギリス労働運動がトーマスらに握られる(彼は二代目のアムステルダム・インター議長に就任した直後、三角同盟破壊の指導をしたのである)一方、ドイツ共産党では「改良主義的労働組合を破壊し、原則的な立場の組合をつくれ」というスローガンが公然とかかげられていた。

アムステルダム派の明白な裏切りに對して大衆的不満が高まるのにしたがって、社会民主主義者の左翼をはじめ一切の左翼——当時

五

「労働組合運動のこの新中心の形成に関する交渉の出発点を成したものは、ソビエト共和国内の諸事情の研究を目的とするイギリス、アメリカ、イタリアの労働組合代表の入露であった。イギリス代表中の左翼代表者との予備交渉の結果は、様々な国における革命的組合相互間の諒解のための共通の基礎が与えられた。一九二〇年六月十六日、コミンテルン執行委員会の決議によって、

イギリス労働組合代表者(ロバート・ウイリアムス、アルフレッド・パーセル) イタリア労働組合総同盟代表者(エル・ダラゴナ、ギユゼップ・ピアンチ) イタリア金属労働者組合の代表者(イー・コロンビノ) イタリア皮革労働者組合の代表者(エンリコ・ドゥゴニ)、全露労働組合中央評議会の代表者(A・ロゾフスキー、M・トムスキー、G・ツイペロヴィッチ、F・シユミット)及びコミンテルン執行委員会議長団代表者G・ジノヴァイェフ)からなる会合が開催された。(ロゾフスキー「アムステルダム対モスクワ」)

この会議を中心に、当時モスクワに来ていたスペイン、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、フランスの労働組合同盟、英国工場委員

会、ドイツサンジカリスト及び一般組合、アメリカ及びオーストリアのI・W・W等と公式、非公式の交渉が続けられた。その結果、後述する明白な意見の対立をさらけ出しつつも、

- (1)労働組合の革命的階級同盟の新中心を形成すること
- (2)左翼的組合の国際会議を召集すること
- (3)この国際会議のために準備委員会を選挙すること
- (4)コミンテルンと内的に接触して行動すること

サンジカリストの多くの部分を共産主義の思想に獲得して行った。(それが基本的にはコミンテルン二回大会と関連するその組織化と同一のものであることは明らかであろう)改良主義者左翼は、商議の最中でさえ態度をひよう変させてロソフスキーを手こずらせた。後の「デイリー・ヘラルド」管理人ウイリアムスは、第一回の会合でソビエトロシア代表の第三インター加入提案について激しく反対した末、対案として次の様な提案を行なった。

「大英帝国、ロシア、イタリアの戦闘的労働組合運動の革命的指導者の非公式会合は、既製国際労働組合連盟が階級闘争を指導し能わず、又プロレタリア独裁の方法をもって国際ブルジョアジーを打倒することが出来ない事を承認し、資本主義的国際連盟とは如何なる関係をも持たず、そして世界戦争の時に社会愛国主義者の役割を演じ且つ今でもその政策を続けている、かのいゆる労働組合の指導者達とも何等の關係を持たない所の、真実の労働組合運動者からなるヨリ完全な代表者協議会を招集すべき事を決定する」。

ロシア代表たちはこれに妥協し署名した。だが当のウイリアムスは後事をイタリア総同盟の代表に委ねてロシアを去り、イタリア代表が彼の提案よりさらにおだやかな「宣言書」への同意を電報で求めた時、何の返事もよこさなかつた。ロシアの代表が賛成し、実行した自分自身の提案を拒否した彼等は、ロソフスキーが十年後に回述したごとく『その時分にはこれら「左翼分子」はソビエト同盟の国境を越える時に既に何かしら聖なる火の様なものを胸中に感じ、モスクワへ着かぬ前からもう革命的演説をやり始めたのであった。尤も、モスクワを出発するや否や彼らには既に革命的焰が消え初め、ソビエトの国境をはなれるに従つて彼等には改良主義が帰つて

革命の方向に大きく引きつけたことであつた。一九一〇年には全世界で九〇〇万であつた組織労働者が、二〇年には五〇〇〇万余に達するといふ発展の中で、それは世界革命への大衆組織の道であつたのだ。

コミンテルンとプロフィンテルンの組織はロシア革命の成功と大戦の終了によつて、はちきれんばかりの過飽和に達した大海に投じられた岩塩であつた。四方から流れ来る改良主義に薄められることと闘いつつ、海中の塩分はその回りに結晶し始めたのである。

一九二〇年七月十五日国際労働組合評議会結成時の勢力は、宣言書に署名した団体のみに限つて、ロシア五二〇万、イタリア二〇〇万、スペイン八〇万、フランス七〇万、ユーゴスラヴィア一五万、ブルガリア九万、チェルジリア一万五千(各国の組合は宣言に署名されたものを指す)合計九百万(これにアメリカ等のI・W・W、イギリス工場委員会等が加えられよう)であつたが、この組織の結成は全世界に大きな反響をよびおこした。一年後、一九二一年七月三日モスクワに開かれたプロフィンテルン創立大会は、全世界からの二〇〇名にわたる代表を集めたのである。この一年弱の間に、プロフィンテルンは一千七百万人をその基本的な流れの中に組み入れたのである。(この数字は、ソビエト、ロシア、カナダ、チエコ等組合の中央部が加入しているもの(千三百万)と革命的少数派として加入しているもの(約四百万)を合せたもので、いずれも推定である。)

七

レーニンのひきいるボルシェヴィキ党が、プロフィンテルンをい

きたものではあつたが、だが二角、その当時は、非常に革命的な声明書に署名し、何でもかんでも、(勿論彼らはそれを実行しなかつた)沢山の約束をし得る所の改良主義者が多くいたのである。レーニンがコミンテルンの二十一カ条をかかげ、前衛党の純化を叫ばねばならなかつたほどであるから、これは当然かも知れない。

一方サンジカリストの方は、すでにマルクスの時代から、理論的な対立を持っていた。彼等には、(ロシアを除く)全世界における左翼としての自負があつたが、大戦とロシア革命はもはや彼らの一本立ちを不可能にさせていた。資本主義打倒については、狂信的なほどの熱意を示しながらも、プロレタリア独裁について、国家権力の奪取について、前衛政党内にコミンテルンの支持、加入について、労働組合——大衆の獲得について、彼らは共産主義者と原則的に対立した。この論争についてはすでによく知られているのでふれないが、特にプロフィンテルンのコミンテルン加入問題と、労働組合の破壊か獲得かの問題は、重大な問題であつた。前者についてはサンジカリストとの妥協の上に、両インターが代表を交換するとの形をとつたが、労働組合の獲得をまじめに行わず小数の独立組合に満足する傾向は徹底的に排撃された。

とにかく、赤色労働組合の世界的連合はこうして共産主義者のヘゲモニーの下に、サンジカリズムとの連合によつて成立したと言つてよいであらう。これは、改良主義左翼をまきこみ、サンジカリストの内部を大きく変化させてこれをコミニニズムに獲得した点において、大きな前進であつた。だが、プロフィンテルン設立の真の意義は、何よりもそれら各流派の指導下にあつて嵐のような革命的昂揚にあつた労働組合の大部隊を、改良主義者の手からうばひとつて

かなる観点から組織したかは、以上で大体は明らかであらうが、レーニン自身の口からその思想を語らしめよう。なぜならば、後述するプロフィンテルンの変貌がそれによつて一層明白となるであらうからである。世界革命を常に指向し、マルクス主義の精神につらぬかれた彼の戦術を復活することが、スターリニズムの裏切の歴史を正すことになるからである。

当時彼の労働組合に対する方針は、「左翼小児病」の中に明白にえがかれている、改良主義者の手から、組織された巨大なプロレタリアートをいかに奪取するかにあつた。

一九二〇年七月二九日彼はコミンテルン二回大会より「フランス社会党の全員、フランスの階級意識あるプロレタリアートへ」宛てた書簡の中で次のようにのべている。

「愛国社会主義者の最後の逃げ場は、現在正に労働組合である。政治団体としての第二インターはカルタの家の如く崩壊したが、黄色組合のアムステルダムインターはなお裏切社会主義者にとつて重要な地盤である。アムステルダム黄色インターは今日世界革命のためには、国際連盟よりもなお有害であり危険である。レギン・ゴンパース・ジュオーの助けをかりて、ブルジョアジーはアムステルダムインターから彼らの掠奪目的の道具として帝国主義戦争時の全世界の社会民主党と同じものを作り上げようと試みている。

このことからして吾々共産主義者にとつては、労働組合運動に十倍の注意を向ける義務が生ずる。……

われわれは各労働組合内部に共産主義者の細胞を形成しなければならぬ。日常闘争の地盤の上でわれわれは労働組合の内部において、大小さまざまなジュオーの謀計をあばき出さなければならぬ

臨時政府が革命のために行動できるかのような誤った印象を大衆にうえつけた。

イ・ヴェ・スターリンは、講和交渉をすぐにはじめると臨時政府に圧力をかけるというまちがった態度をとったが、その後もまなくこの態度をすて、レーニンに同調した。(「世界政治資料、七二号、三九頁」と。

もちろん、この限りではそれは「当時私は党の他の同志と、このまちがった態度をともにしていた。そして四月の中ごろにレーニンのテーゼに同意して、はじめてこの態度を完全にする」と、このようにのべたスターリンの卒直さから一歩も出るものではあるまい。とはいえ、旧版「ソ党史」が、「カーメネフおよびモスクワ党組織の若干の人々、たとえばルイコフ、ブブノフ、ノイギンは臨時政府および防衛政策の条件支持の半メンシヴィキ的立場に立っていた。流刑から帰ったばかりのスターリン、モロトフおよびその他は党の大多数とともに臨時政府不信任の政策を擁護し、防衛主義に反対し平和のために積極的闘争、帝国主義戦争反対の闘争を力説した」とのべていた鉄面皮さかげんからは、少しは遠ざかってはいるだろう。

しかし「歴史は、邪悪なる意図にもとずい

て、より大なる虚偽を信じこませるために、真実にたいする少しばかりの譲歩をなさしめるものである。破綻にひんした自己の日和見主義的本性をおおいかくすためならば、これしきの譲歩になにほどの重大さを附与しえようか、というわけなのだ。

「ワレワレノ戦術、絶対的不信任」と、レーニンをしていわしめた三月までのボリシェヴィキの戦術の誤謬は、新版「ソ党史」が、そつと息を殺して通り抜けようとする以上の重大な意味を蔵していた。

スターリンが忠誠を証明したレーニンの四月テーゼは、四月四日に、党大会の演説によって与えられ、四月七日に、「ブラウダ」紙上に発表された。ところが先にみたようにスターリンは、「四月の中ごろにレーニンのテーゼに同意」と告白しているのだ。時間にして、あるいは十日にもおよばないかもしれないこの短い期間のシモンズをなにびともせめることはできないかもしれない。だが二月から十月までの期間は、平時のなん十年かに相当したのだ。ロシア・ボリシェヴィキの混乱が、いかに深刻かつ重大なものであったかを、この事実は示してあまりあるものだ。

この混乱、いや危機的ともいえるボリシェヴィキの状況に、強力な一撃を加えて正しい軌道にのせたのが、レーニンの四月テーゼだった。新版「ソ党史」は旧版と同じく、この点に関して次のようにのべている。「これが天才的な四月テーゼであり、このテーゼにはブルジョア民主主義革命を社会主義革命に成長転化させる党の方針が定められていた」。

その後の国際共産主義運動の混乱にみちた軌跡、人民戦線から人民民主主義への、人民民主主義から構造的改良への日和見主義的軌跡は、すべて四月テーゼのこのような評価に密接な関連をもっているのである。このことについてここで詳細にふれることはできないが、四月テーゼをめぐるボリシェヴィキ内部の混乱がどのようなものであったかを少しくみることにしよう。

三月十五日、シベリヤの流刑先から帰ってきたカーメネフ、スターリン、およびムラノフが、「ブラウダ」の編集局を掌握して党の路線を、ぐつと右方向にまわしたことは今日では公然たる事実なのである。「スターリン批判」後に、「歴史学の諸問題誌」上にこの点に関する資料を掲載したブルジャロフは、おそらくは政治的配慮の不足にもとずく、歴

史家としての学的良心のゆえに、不当な圧迫をうけて編集部から退げられてしまった。かれも、新版「ソ党史」の程度に、さりげなくスターリンの誤謬にふれておくだけの気遣いをもちあわせていればよかつたのだろう。

さて、この三人による新編集部は戦争問題に関して、「ドイツ軍が彼らの皇帝に服従しているかぎり、ロシア兵は弾丸には弾丸をもつてこたえ、砲弾には砲弾をもつてこたえながら、毅然としてその持場を固守しなければならぬ。」「われわれのスローガンは、無意味な『戦争反対』ではない。われわれのスローガンは、臨時政府をして即時交渉を開始するべく、全交戦国の説得に努力せざるをえないようにさせるため、これに圧力を加えよ、というのである。……それまでは、各人はその戦闘持場にこどまるのである。」(「ロシア革命史Ⅱ、六一頁より」とのべていた。これがスターリンが卒直に告白したことの内容なのだ。

「ロシアにおける現在の時期の特異性は、プロレタリアートの自覚と組織性が不十分のために、権力をブルジョアジーにわたした革命の最初の段階から、プロレタリアートと貧農層の手中に権力をわたさなければならぬ。」「革命の第二の段階への過渡ということにあ

る」と、四月テーゼはのべた。スターリン主義者はこのことの意味を誤って解釈しただけではない。四月八日附「ブラウダ」は次のように書いて、公然とテーゼに反対していたのである。「同志レーニンの一般的計画に関していえば、それはつぎのような理由によってわれわれには受け容れがたいものにおもわれ。理由というのは、それがブルジョア革命はすでに終わったという仮定から出発し、この革命が直ちに社会主義的革命に転化することを予期していることである」と。「四月の中ごろにテーゼの立場に同意した「ブラウダ」編集局員スターリンの以前の立場が、これであったことを何びとが疑いうるだろうか?」

四月テーゼの前においてレーニンは、かれの旧い労働民主主義の立場に激しい修正を加えた。かれはこの「旧くなった公式」をきっぱりと破棄してプロレタリア独裁の立場に移った。二月革命を完結した一個の革命とは考えずに、十月革命への一連の準備段階と、正しく把握しうるものにとつては、四月テーゼにまで達するレーニンの立場に、理論上の首尾一貫を十分に見てとることは出来ないとしても、この不足を、かれがその天才的な政治の論理によって補うことができたことを識

るだろう。今日必要なのは、かれの天才的な政治の論理をプロレタリア社会主義革命の論理として理論化し、レーニンの旧い立場である労働民主主義の二段階革命論ときっぱりと手を切ることなのだ。

しかし新版「ソ党史」に、このことを要求することは無理であろう。四月テーゼをこのようなものとして捉えることは、スターリン主義者に指導された、その後の国際共産主義運動と、現在のかれの立場を、その根底からくつがえすことになるのだから。そして、新版「ソ党史」は、プロレタリアートを欺瞞することの大芝居をうつために、さりげない態度をとつて、真実にたいする少しばかりの譲歩をおこなったのである。

革命史を神話からひきはなして、その真実の姿でプロレタリアートの武器とするためには、スターリン主義の亡霊に導かれる、今日の公認指導部の日和見主義を打倒する以外には、いかなる方途もありえないのだ。

新版「ソ党史」に関して、「時評」の枠内で、ほんの断片にふれたにすぎない本稿は、この「革命の神話」の全面的公表にもなつて、弾劾的な一巻の書物にとつてかわられるだろう。(H・S)

西イリアン解放闘争と

インドネシア共産党(上)

岡田 行男

序

スカルノ大統領は、四月二二日バンドンの制憲議会特別本会議で、一九四五年憲法への復帰と行政機構の根本的改革によって、「指導された民主主義」の実現をめざすという演説を行った。

これは、

1、制憲議会は短期間内一九四五年憲法を無修正で採択するこ

と。

2、現ジュアンダ内閣の即時総辞職と五カ年任期の大統領内閣の組織。

3、政党数の削減。

4、国民議会へ三〇〇五〇名の社会機能グループ代表の参加、そのうち三五人の軍人代表を任命する。

5、新議会の選挙は一九六〇年実施。

6、新議会は、国会議員、地方及び社会機能グループ代表で構成する「国民協議会」を設立する。国民協議会は任期五年の正副大統領を選出する。

7、「国民戦線」を組織して、社会機能グループの国会参加について大統領を助ける。

8、国民企画審議会を新設し、国家の復興建設計画を立案する。などの諸点を含むものであった。

かねてから、政権についている国民党左派を代表するスカルノが提唱していた「指導された民主主義」の体制は、ここに具体化された。一九五七年のうちつづく騒ぎ、その年の末からの西イリアン解放闘争の展開にひきつづく翌一九五八年の内乱によって政治的混乱がつづき、経済的困難も極度に激しくなっていた。軍政を実施して

から三年のあいだに軍部は著しく勢力を増大してきた。一昨年の地方選挙では共産党が大きく進出し、ところによっては第一党になるところまでできた。徹底した反動的回教政党であり、外領に地盤をもつマシュミ党は、不断に中央政府を無視して地方権力を作り勝手に貿易などをやっている封建的買弁的地方勢力の支持を依然として受けていた。

しかも、オランダの権益を政府が没収したけれどさっぱり有効に運営し得ず、龐大な失業者も吸収し得ない。共産党は、選挙でこそ多数の票を獲得しはしたが、スカルノ政権に対しては猫のように柔順であり、スカルノ構想の実現を支持しつづけている。

このような状況のもとでは、スカルノならずともボナバルチズムへの誘惑に駆られるのは当然であろう。そして共産党は、ここでもまた、そしてフランスにおけるよりもいっそう積極的に、その実現に協力する。

筋書どおりスカルノは、国民党と共に行動する共産党の支持を得て、マシュミ党とナフダトルウラマ党(NU)の反対をおしきろうとした。だが制憲議会では、これら回教政党の反対によって三分の二を得られなかったので、軍当局が一切の政治活動禁止令を出して、それで片がついた。

スカルノ独裁政権は、こうしてその誕生の日から軍隊の威令を借りるようになっていた。

だがこれですべてが決定されたわけではない。新しいスカルノジュアンダ政権は、一方では外国からの援助によって執拗に反乱を続けているシャフルディン「革命政府」と闘わねばならぬ。それは

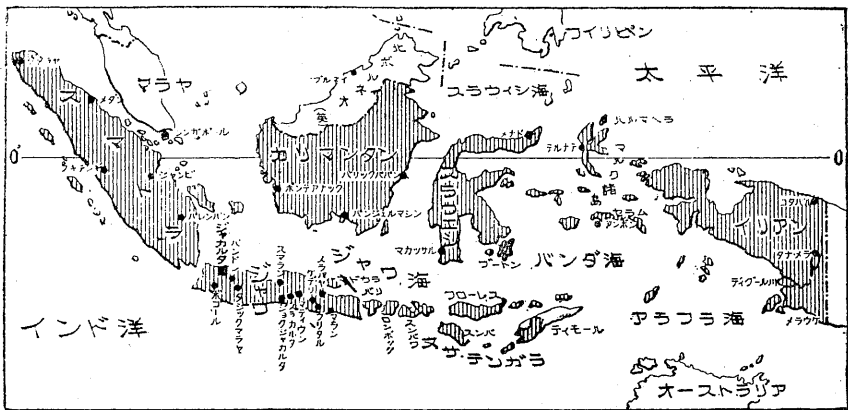
マシュミ党を政権から全く追出すことになり、さらにハッター元副大統領なども疎遠になるだろう。

他方、共産党と手を結び、その下にある大衆によびかけざるを得ない立場は、反共コースをとるにしても、それが国民的・民族的ウエールを一層濃厚にすることによってする以外ない、ということである。その場合、もし共産党がプロレタリアートの大衆的闘争を汎汎強力に展開したら、政権は瓦解し新たな情勢がひらけてくるだろう。しかし、ジュアンダ、ナスチオンらが、共産党の支持を利用しつつ、着々とブルジョア支配体制を完備していくなら、近い将来に共産党をはじめ左翼勢力を一掃し、ブルジョアの統一を完成するだろう。

だが共産党が、自ら政治活動の制限に服し、機関紙発禁を甘んじて受け、しかもなおスカルノジュアンダ内閣に「誠実かつ批判的な支持を与える」(共産党八中委総会決定・八月六日〜七日開催)としたらどうなのか?

そして、一旦許可された共産党第六回大会が陸軍当局によって禁止された(八月一四日)としても、黙って従う以外ないとするなら?

だが共産党のこの現状は、そして現在のインドネシアの政治的情勢は、少くとも戦後十余年間の歴史の中から生みだされてきたものである。一足とびに、この状況が変わるわけではないし、また共産党がプロレタリアートの、真の前衛となつて闘うことを期待するとしたらそれは白昼夢に近い。われわれは、戦後のインドネシア共産党の歴史から、彼らがかつてなんであったか、そして今なんであるのか



を知らねばならぬ。そしてプロレタリアートの解放のためには、いかなる組織が必要か、いかなる前衛党を作らねばならぬかを導き出さねばならぬ。

主として一九五七年末からの西イリアン解放闘争の過程を、極めて乏しい資料によって追求しながら、インドネシア共産党の姿を明らかにし、他のいづれの国の共産党とも全く同様に、もはやこれは共産主義政体ではなく、ただプロレタリアートの解放の桎梏になっているだけにすぎないことを明らかにしようと試みた。そして結論として、プロレタリアートの新しい前衛党を作り出さねばならぬ。

一、西イリアン解放闘争の発展

ということを強調する。

一九五七年二月一日午後、インドネシア共和国政府のステディヨ情報相は、西イリアン解放国民行動委員会総裁の資格で、インドネシア中央放送を通じ、オランダ人企業で働くすべてのインドネシア人労働者に対し、二月二日、二四時間ゼネストを執行するよう指令した。

同情報相は、これについて「国連を通じて西イリアン問題を解決しようとしたインドネシアの努力が成功しなかった上は、他の措置をとらなければならない」と述べ、「指令は一日の閣議の決議に基づいて発せられたものである」と語った。

インドネシア政府の決定の主なるものは、次のようなものである。

- (1) 二月二日以降、オランダ航空(KLM)の乗入れ禁止。
- (2) オランダ語による、またはオランダから輸入した新聞、雑誌、その他の出版物及びフィルム出版、配布の禁止。
- (3) 二月二日、オランダ企業労働者は二四時間ストを行う。

かねてから西イリアンの回復を叫びつづけて、すでに三回にわたって国連総会の議題にこの問題をのぼせながら未だに目的を達するに至っていないインドネシア政府は、一九五七年秋第二回国連総会に

おけるこの問題の討議と併行して一〇月、西イリアン解放行動委員会を組織した。この組織は、ステディヨ情報相を委員長として、各政党、軍、青年団体の代表によって構成され、各地にその地方組織をもっている。一〇月二八日は同委員会の決定に基づいて、十万人の大衆がジャカルタに集って西イリアン回復を要求する大デモンストレーションをおこない、オランダ代表官邸前で植民地主義を象徴する人形を焼き払い、夜は松明デモをつらね、オランダ人住宅の壁やウインドー、自動車に「オランダ人を西イリアンから追放せよ」とペンキで書きまくった。これと並んで同時に地方でも大会がおこなわれ、スラバヤ市会ではオランダ人ボイコットを決定したという。

第二波は、一月一〇日、ジャカルタクラブを接収してその前で大会をひらき、一八日にはスカルノ大統領出席のもとに西イリアン解放国民結集大会をひらき、バンテン広場は百万の大衆で埋めつくされた。そしてここでは、一月二〇日からの国連総会の討議によっても問題の解決がみられないときは、オランダ系主要産業の国有化、オランダ系企業のインドネシア化促進、不要オランダ人追放、オランダ人入国禁止、権益不更新等々の措置をとるという大会決議を採択した。二〇日以降、国連の討議が開始されるや、政府の態度は一層硬化し、国交断絶、財産没収、通商破棄等をおこなうだろうと繰返し叫びつづけた。

一月三〇日、国連総会では、オランダとインドネシアの交渉再開を求める(一)一九カ国決議案が四一対二九、棄権一で否決された。スバンドリオ外相は、票決後、「インドネシアは国連外の道に頼る以外道はない」と語ってニューヨークを去った。さきの国民結集大会の決議は、国民復興会議でも承認されたが、こうしていよ

いよ実行に移されることになったのである。

二月一日の政府の二四時間ゼネスト指令は、二日、一斉におこなわれた。すべてのオランダ系企業は停止した。KLMの定期旅客機は、四〇人の旅客がおろされ、からのまま、六時間遅れて飛びたっていた。税関当局は荷物の検査を拒否し、貨物の空輸もできなかった。オランダ銀行、ロイヤル・ダッチ造船会社(KPM)オランダ人農園などの門はすべてとぎされた。

ストは二四時間たつても中止されなかった。三日、商社フェオ・ウエーリのジャカルタ本社が労働者に占拠された。KPM船会社のジャカルタ本社では、労組幹部が建物の前に集った労働者に対して、インドネシア労働者はKPMの全インドネシアの支店を占拠したと述べ、労働者はKPMの総支配人に対して要求書をよみあげ、これに署名することを要請した。総支配人は署名することを拒否したが、他のオランダ人従業員と共に退去し、インドネシア労働者はオランダ国旗をおろして赤白のインドネシア国旗を屋上に掲げ、警察が接収するまで警備に当った。主要オランダ貿易会社でも続々と赤旗をたてて占拠がおこなわれた。

政府の海運担当相は「KPM船会社の接収は政府の計画に含まれていない。しかし、接収がおこなわれた以上、政府は運輸機能を維持するために新しい措置をとることになろう」と語り、またステディヨ情報相は「西イリアン解放行動委員会は、事前に接収のことを知らなかった。問題の解決はジャカルタ警備隊にゆだねてある」と述べた。

三日、マエンコム法相はオランダ人の入国を禁止し、五日の閣議

は、労働者に接収されたK P M、ホテル・デス・インデス等のオランダ企業を国家管理に移すことに決定し、同日、無職のオランダ人等インドネシアにとって不要な人物の国外退去を命じ、さらにジャカルタのオランダ代表部に対して、ジャカルタを除くインドネシア国内のすべての領事館の閉鎖を申入れた。六日には、ステイブヨ情報相はオランダ居留民の即時引揚げを命令し、国交断絶は時間の問題であると声明した。同日、公式発表は「オランダ人所有のすべての港湾施設は国有化された」ことを明らかにし、さらに北スマトラの全オランダ系企業が軍管理下におかれ、マカッサルのオランダ人クラブも軍当局により接収され、K L Mの事務所はすでにインドネシア国営のガルダ航空会社の管理下におかれていると伝えられた。九日にはジュアンダ首相が、オランダ系の全農園を政府管理下におくよう命令を発し、全農園及び農園関係企業の従業員に職を離れぬようよびかけた。

だが、「民族解放闘争」はこうして全「国民」が完全統一して、一糸乱れず坦々とすすめられていくものであるか？

すでに三日には、ジャカルタのインドネシア軍司令部は公式声明を発表し、労働者が政府の正当な許可なくオランダ商社を占拠することを禁止すると宣言した。そしてK P M本社を占拠した労組の指導者二人は逮捕された。

政府のこうした動きについて、三日の外電は、《しかし、S O B S I（註・全インドネシア労組中央評議会）の労組員に対して、船会社から退去するように命じていなければ、また命令違反者に対して政府や軍が断固たる処置をとるかどうかについて言及もしたかった。》と伝え、形だけの呼びかけではないかとみている。

与えないであろう」と言明した。外電は、《インドネシア政府首脳がオランダ資産を全面的国有化する計画がないことを言明したのはこれが最初である》とコメントしている。

昂揚していく運動をまえにして政府は明らかに動揺していた。運動の発展は、労働者のヘゲモニーを急速に強化する。事実、インドネシア労働者農民にとっては、血であがなった共和国である以上、この共和国の独立を脅かす帝国主義者に対して、いったん手綱が放されたうえは、そうやすやすと矛を収められるものではなかった。日本軍占領当時は日本軍に協力し、戦後はアメリカ、イギリス、オランダ帝国主義の力のバランスのうえに危く立って巧みに独立を達成しようと考えた政府首脳たちの中には頭が働かないかも知れないが、現実にアメリカ製の武器をもったオランダ軍の度重なる侵略をその血と肉で防ぎとめてきたのは、「平和政府」の下で今なお貧苦に打ちひしがれている労働者、農民だったからだ。

労働者は、軍や政府の接収禁止令が出てからも次々と、「雪ダルマ式に」オランダ企業を接収する数をふやしていった。労働者は、四日に、輸出入をにぎっている五大会社の一つであるジェオフィリー会社の一部を占拠した。これは、インドネシア民権統一労働組合の決議によるものであるという。バンドンでは各商店が四日からオランダ人に商品を売ることを拒否し、三輪車やタクシーもオランダ人ホイットをはじめた。

五日、ジャカルタ最大のホテル二つにインドネシア国旗がひるがえった。バンドンでは二つの更紗プリント工場と二つのゴム工場が労働者に接収された。セマランでは三つの銀行が接収された。

六日、インドネシア航空「ガルダ」はK L Mの「トランサセラ」

四日、全インドネシア労働組合中央評議会（S O B S I）の組合員は、オランダ三大企業の一つであるヤコブソン・ファンデンベルグ商會を接収し、さらにジャカルタのビジネス中心部にあるオランダ系三大銀行の接収をめざす動きをはじめた。これに対して政府スポークスマンは、「政府は特別会議をひらき、労組員がオランダ系企業を全面的に接収することを阻止する対策を協議した」と言明し、当日の外電は、《目下のところインドネシア政府は慎重な動きをみせている》と伝えている。

同日、ジュアンダ首相は、「オランダ企業の接収はすべて政府の指令によって行われ、権限のない団体によって行われぬ。政令に違反する行為に対しては厳重な措置をとる」との警告を発した。

七日に至るや、ステイブヨ情報相は、「一部のオランダ系企業従業員は政府の命令を無視して会社を不法占拠し、また一部の無責任なインドネシア人が、オランダ資産に直接的行動に出たのは遺憾であった」とし、「インドネシア国民がとった措置は、オランダ資産の破壊、あるいは損害を与えることを目的としているものではない」と語り、「政府首脳に近い筋」では、「インドネシアとしては四万六千のオランダ人を全部追放するつもりはない。追放したいのは働いていないオランダ人だけである。労働組合が勝手にオランダ資産を接収しているのに、政府はきわめて、当惑している。しかしこの接収は雪ダルマ式にふえていき、オランダ権益は全部労働者に接収されてしまふ、可能性が極めて強い」と卒直な危惧を表明した。

次いで翌八日、スバンドリオ外相は、「われわれはインドネシアのオランダ権益を取上げようというのではない。オランダ権益は保護され、インドネシアで事業を営むオランダ人には、なんの支障もホテルを接収した。七日に達した報道によれば、東部ジャワのクリニンにあるオランダ系の一砂糖工場も労働者に接収されたという。七日、インドネシア経済に大きな影響力をもつ三つのオランダ大銀行と、インドネシアの輸出入を支配する五大企業の一つであるオランダ会社を接収した。労働者は、銀行の入口に、「インドネシアの財産」と書いた紙を貼りつけた。銀行の業務は平常通り行われていると報ぜられている。現地の通信は《多くの預金者は、オランダ銀行から預金をひき出し、インドネシアの銀行に預けかえてい》と伝えている。

このような情勢を、六日発の外電は、《政府は許可なくオランダ系企業を占拠してはならないと警告しているが、インドネシア労働者が占拠したオランダ系商社の政府接収の数は、雪ダルマ式にふえていくようである》と報じている。

この期間のS O B S Iの執行部の方針について報ぜられていないから、労働者によるこれらの接収が労組の下部組織で自発的に行われたものか、そうでないかわからない。これらのニュースが西欧の通信社と官庁資料によって伝えられているにもかかわらずペトログラードの冬宮を守っていた婦人部隊の運命に関するセンセーショナルな物語や、五億ルーブリの掠奪に類するようなニュースが、全然見当たらないということは注目に値する。運動の波が襲った最初の時期に、オランダ側から、「インドネシアは、熱帯下で水道とガスを止めるといふ、非人道的な行為をやった」という非難があがったが、それが政府の公式の発表で事実を否定されるとその後はなんの反応もなかった。

サブラプト・インドネシア検事総長は、六日政府特別命令の形でインドネシア国民に、現在の情勢を混乱させるような恐れのある経済その他の投機行為を差控えるよう警告を発したというが、このことはむしろ、労働者の行動が問題になっていないのではないということをはっきりと示している。また、それと並んで、全国の警官は、強奪または類似行為を防止するよう命令を受けたというが、そういう命令はあり得るだろう。

それよりも、むしろ労働者が企業を占拠するにあたって企業主に読んでかかせる「要求書」や、「インドネシア共和国財産」という宣言のことが、断片的な通信を読むとき深い印象を与える。

労働者の革命的な行動に直面して政府の動揺が始まると、政府の内部にもさまざまな色合の相違が生じ、その発言にも喰いちがいが目立ってくる。

五日のジャカルタ発APによると、「インドネシア政府は五日夜、政府が同日オランダ人全部の国外追放を命じたとの報道をはっきり否定し、また将来そのような命令を発することも考慮してないと述べた。外務省スポークスマン、ハルソノは、「オランダ人の生命、財産はインドネシア政府によって保障されている。もし彼らが国外退去を希望するならば、あらゆる援助が与えられるだろう」とのジュアンダ首相の四日の声明に言及した。」となっているが、翌六日の同じくジャカルタ発のAPは次のように伝えている。

「ステイブヨ情報相は六日声明を発表、オランダ人居留民の即時引揚げを命令、インドネシアとオランダの外交関係断絶は時間の問題であると述べた。一方、インドネシア各地からの報道によれば、

インドネシア政府は戦時戒厳規則に基き、さきに労働者が占拠したオランダ人企業を接収している。一部筋ではこれは国有化ではないと強調しているが、六日の公式発表は「オランダ人所有の港湾施設はすべて国有化された」と述べている。……」

ステイブヨ情報相とスバンドリオ外相の言明が、しばしば喰いちがうのみならず、政府発表なるものも、新聞に報道されるかぎりではきわめて混乱している。これは、単に外電の確度の問題ではなくて、政府の内部に公然とあいつ争う二つ以上の流れが存在していることを示している。スカルノ大統領、ステイブヨ情報相（西イリアン解放行動委員長）、スバンドリオ外相、ナスチオン陸軍参謀長及びその他の指導者らのあいだには、疑いもなく意見の相違があり、彼らはそれぞれ異った勢力を背景として行動している。

「インドネシア人民の西イリアン奪回の闘争は、全国民の強固な団結のもとに闘われており、その闘いは決してたやすいものではないが、帝国主義者の希望するような指導者のあいだの重大な対立はない」（アカハタ五八年一月三十一日主張）などということは事実上反するのみでなく、このように主張して「民族解放勢力」のあいだの矛盾と対立を覆い隠すことは、労働者階級の闘争にただ重大な損害をもたらすだけである。恐らくこのような主張のもとに、一九二七年に中国共産党員は中国国民党に入党し、一九三六年にフランス共産党は国民戦線を提唱し、スペイン共産党はフランコ蜂起のニュースを抑えることを考え、一九五六年にアルジェリア共産党はアルジェリア民族解放戦線に参加している。党員兵士との組織的連絡を自ら断つたのである。激しい政治的過程にあっては、階級間の公然たる闘争と諸階級の内部におけるさまざまな分化が生じているの

は当然の成り行きである。プロレタリアートは、これを敏速正確にとらえて、その中で自己の立場を確立していかなければならない。ブルジョア通信社の目にさえ明らかなるこの潮流から目を外らすことぐらいいプロレタリアートにとって愚かしい行為はないであろう。一二月の初めにすでに明らかになっていた、政府を構成する各勢力の動向が、この主張の掲載された一月三十一日にはどのような重大な対立を生み出していくかは、やがて明らかにされるだろう。

二、インドネシアにおける階級対立

一二月からの新聞をめぐってみれば一見してわかるように、ナスチオン参謀長はその肩書には全く不適合なほど大きな役割を果たしている。ジュアンダ内閣ではジュアンダ首相が国防相を兼任しているが、ナスチオンは五七年三月に第二次アリ・サストロアミジヨ内閣の崩壊前後から現ジュアンダ内閣成立後まで、政府を代表して全国の反乱地方の軍部勢力と接触して懐柔に努めてきた。戒厳令施行下にあつては、地方行政に関しては軍政官が任命され、州議会がこれと協力するというものになっているのであるから、インドネシアの政治的動向に大きな役割を果たす軍部勢力の比重は一層増大している。地方に割拠した反動的軍部勢力を懐柔するうえで、ナスチオンは、スカルノ自身によって組織されたジュアンダ内閣よりは明らかに右寄りの政策でこれに対処してきた。

元来、インドネシア陸軍は、蘭印時代の植民地軍（KNIL）の

現地志願兵（及び幹部将校）と、日本軍占領時代に義勇軍として編成されたいわゆるインドネシア共和国軍（PETA）、すなわち独立戦争に参加した兵士との二つの層から成っている。ナスチオンはオランダ士官学校を卒業した前者を代表する将校の一人である。そして彼は、一九五二年に国防軍から親西欧的色彩を払拭しようとした議会の措置に反対して武装デモを起し、トラックで五千の群衆をジャカルタに集結させ国会に乱入し、さらに砲兵を動員して国会と大統領官邸に筒先を向けるなどの行動を行い、当時の陸軍参謀長の職を罷免されたことがあり、その後反動的ハラハップ内閣の下で、他の一連の曰くつきの軍人と共に参謀長に復職させられたという経歴をもっている。

ジュアンダ内閣は、このような参謀長に軍隊を握られ、しかも彼の働きによって各地方の反動的分離派の勢力が抑えられているという状態の中で、極めて不安定なまま五七年三月に発足している。

国民党左派を代表するスカルノの手製になるジュアンダ内閣は、憲法違反であるというマシムシム党、回教連盟等の反対を押しきって、大統領が「暫定的」という但し書をつけてつくりあげたものであった。それは、議会の多数党が組閣するという「常道」を破つて、国民評議会設置のための「超議会的緊急事務内閣」という名目で国民党を主とする入閣同意者を大統領自ら狩り集めて組織された。この内閣は、第二次アリ内閣崩壊以後の緊急状態の継続期間のみ在任するという触れ込みであったが、内閣成立の翌月、五七年四月に国民評議会設置法が公布され、七月にそれが発足してからも国内治安の不安は依然として継続し、その期間、かねてから増大していた貿易収支の赤字は引きつづき増大し、四月末には一般輸入の全面的禁止

措置をとり、五月にはいって、二月に法定準備率を二〇%から一五%に引下げたにもかかわらず外貨の流出が続くので遂に、向う六カ月間法定準備制度を中止させるに至り、六月には外国為替貿易条令を改正して輸出促進の手段を講じるといふ措置をとるに至った。

一方、反動的な社会党を除いては、勤労階級に基礎を置く有力な政党が共産党以外には存在しないというインドネシアの現状では、共産党に支持を寄せる労働者農民の数が日に日に増大していくというのは全く必然的な現象であった。この期間に施行されたインドネシア初の地方選挙では共産党が素晴らしい躍進を示した。六月二三日のジャカルタ市議会選挙に続いて、七月にはいって中部ジャワ地区、及び東部ジャワ地区で行われた市会、地域議会、州議会の選挙では、共産党は圧倒的な進出を挙げた。即ち、前者においては、従来二または三位であったのが第一党の国民党を圧倒的に引き離して第一位にたち、後者においても国民党を蹴落して首位にたった。

マシユミ党の地盤である西部ジャワにおいても、共産党は総選挙のときのこの地方の得票数とくらべて約四〇%票増加し、バンドン市議選では四〇%の得票で第一党になった。

共産党の進出は、国民党が大きく喰われるという状況を生み出した。このことは国民党幹部のあいだに、共産党から遠ざかり回教政党と手を結ぼうという傾向を生み出した。時あたかも北スマトラに、いわゆるブマタン・シアンタル事件等が起り、村落警備隊が駐屯の正規軍を攻撃したり第一軍司令部を包圍したりしたのでこれを共産党の煽動によるものとして、国民党北スマトラ支部は共産党との

ジャカルタ

市議選	制憲議会選挙	総選挙
(五、六三)	(五、三)	(五、九)
一五、七〇	一〇、三〇	一〇〇、四六
一四、九五	一七、五二	一五、七三
一四、八二	一四、八六	二〇、六六
一七、三〇	八、六九	六、五

中部ジャワ

地方選	制憲議会
(五、七)	五、七〇現在
五〇、〇〇	八、二五
一〇、〇〇	三、二
一五、〇〇	一、三三
二、〇〇	二、〇五

東部ジャワ

地方選	現在
(五、七)	五、七〇現在
六、六	六、六
一、三	一、三
一、四	一、四
二、〇	二、〇

西部ジャワ

州議選	県議選
一、四三、九八	九八、八二
五、六、三六	六九、八八
三三、五	四二、七
六、六	七、三

關係を一切断絶して他の民族主義政党との結合を強めることに決定し、中部ジャワ及び東部ジャワの国民党支部も反共的態度を確認した。

国民党は共産党との協力はしに充分主導権を發揮して政治力を發揮することはできない。しかしマシユミ党はすでに国民党に秋波を送っているし、中部及び東部ジャワという最大の支部の決定を党中央が無視するならば党の統一を守るうえで重大な困難を抱え込むことになる。年末に近づくにつれて党本部内にもスカルノ、サルトノらの国共連携を非難し、民族、回教政党との連携を主張する勢力が次第に力を得てきていた。

他方、ナスチオン参謀総長は、ジュアンダ内閣成立前後に地方軍政指導者会議をひらいたり、スラウェシの軍管区を統合したり分割したりしては「分離派」スマアル大佐らの勢力を削ろうとしたり、また、ジュアンダ首相自らがマカッサルに出かけてスマアルと話しあったりして手を打ってはきたが、七月になってもナスチオンが事態收拾成功の声明を発表した途端にスマアル大佐が政府の命令を無視して自ら東インドネシア地区軍司令官を公然と名乗ったりしているような始末であった。八月末、政府は「国内の正常化と単一国家保持のため」の国民会議招集を決定し、ハッタ前副首相にも参加を要請した。

九月上旬ひらかれた国民会議では、スカルノはハッタと共同声明を行い、単一共和国の維持の確認など、極めて一般的な点での意志の一致を誇示した。内容は問題ではなかった。この二人が共同声明を行ったということ自体が事態の進行方向を示していた。周知の通

りハッタは、それこそ「民族を売る者」である。第二次大戦中はスカルノと共に日本軍に協力し、戦後の解放闘争の時期には終始左翼に対する弾圧を試み、アメリカとの露骨な取引によって自己の地位と反動勢力の強化に狂奔した。スカルノと共に「両巨頭」として隠然たる影響力をもっているというわけは、小ブル的立場にしろ古くから独立運動に携り、アメリカ製の武器で武装したオランダ軍前にインドネシア労働者農民が血を流しているときに、オランダ軍に「逮捕」され、バンカ島で極めて安楽に幽閉されていたというようなことよって民族解放の「苦悩の闘士」として漠然たる人気があり、それを足場としつつ反動諸勢力の統合の中心となっているということによるものであった。

そしてこのあともなく、北スマトラ事件とその投じた波紋によって混沌とした社会的情勢の中で西イリアン解放闘争が開始された。民族解放闘争にはみんな一致して手をつなぎ、どんな人でも立上らなければならないものかも知れないが、この点ハッタ氏もまさにその通りであった。すなわち、一〇月二八日に火蓋を切られた西イリアン解放闘争においては、ハッタは自ら全国五分間ストを提案し、一一月二五日にはこれが整然と行われたのであった。

ナスチオン参謀総長に代表される政府内の軍部KNIL派はこうした状況のなかで着々と自己の地盤を築いてきたのであった。

西イリアン解放闘争に乗出したときのインドネシアの政治情勢は、まさにかようなものであった。そこでは単純に「民族解放闘争」が直線的に発展してきているのではなく、階級間の諸勢力の複雑なからみあいのなかで、労働者農民の要求と反動勢力

の「政局安定」の要望とが錯綜し、一つの政治的方向が打ち出されてきたのであった。民族解放闘争にしろ、平和擁護闘争にしろ、民主的諸改革にしろ、具体的にはこのようなものとしてしかありえないものなのである。階級闘争から抽象された民族独立闘争や平和擁護闘争が存在するのであったら、やたらに定義や公式を作るのが好きな人々には都合がよいかも知れないが、遺憾ながら現実はそのではないことを示している。

三、解放闘争における諸勢力

軍や政府がどんな警告を発しても（あるいは共産党の中止指令によってさえ!!（次号参照））、労働者によるオランダ企業占拠が次々と発展していくのを止め得ないと知るや、軍は自ら接収に乗り出してきた。また地方に割拠する反動軍部勢力もいち早くオランダ資産を接収して、これらの権益を自分の手に収めはじめた。

一二月六日、軍は各港湾当局に命令し、KPM所属の全船舶のシナガポールへの脱出を防ぐため出港を拒否させた。

七日のAP電は、スラバヤの地方陸軍部隊は、スラバヤのタンジョン・ペラ港に停泊しているオランダ船九隻を抑留するとともに、これらの船に積まれているすべての武器を没収したと伝えている。また同日のPIAIIAPによると、北スマトラ軍司令部ギンテイン中佐の命令によって、北スマトラのオランダ企業は、すべて六日から軍の管理下におかれることになったという。ギンティン中佐という人物は、五六年末、中部スマトラのバンテン師団のフセイン中佐の中央スマトラ政府接収に呼応して北スマトラでクーデターを

行った第一軍管区司令官シンボロン大佐によって軍司令官に任命された男であるが、彼はその後政府から新たに任命し直されると、シンボロンの北スマトラ州政府支配を覆して中央政府への忠誠を誓っている。

中部スマトラでは、自称中部スマトラ軍司令官兼バンテン評議会長のフセイン中佐が、九日、中部スマトラにある一切のオランダ企業とオランダ、インドネシア合同企業を中部スマトラ地方当局の管理下におく旨の布令を発した。彼の「政府」の下にある中部スマトラ西イリアン解放団体議長のスジェイブ中佐は、「本団体は各企業に対し管理人を配置する。現在左翼グループ、とりわけ共産主義者がある特定の目的のために混乱をつくりだそうとしているが、これらの処置はこうした無秩序と混乱を防ぐためである」と彼らの運動の性質を明らかにしている。

一〇日には、南及び南東スラウェシ州政府知事ミタリーは、管下の全オランダ企業は州政府の管理下におかれたと発表した。

九日、ジュアンダ首相は、国防相の資格でオランダ人所有及びオランダ、インドネシア共同所有の全農園をインドネシア政府の管理下におくと発表した。ジュアンダはこの指令で「政府は国家にとり必要な生産を続けるためにこの措置を必要と考えた」と述べ、これら一切の不動態、農業企業の従業員に対し、仕事を離れぬよう指令した。この日のロイターは、「この指令は、インドネシアが接収したジャカルタのオランダ系銀行を、軍管理下におくと発表した直後出されたもの」という註釈をつけている。

こうして、労働者の嵐のような企業占拠の波の進行に対抗して、

地方に割拠する反動的封建的勢力もまた軍隊あるいは勝手な「西イリアン解放委員会」によってオランダ企業を接収し、中央政府はまたこれらに対抗して上から企業の政府管理を行った。そしてこの中央政府の処置においてはまた、政府内部の軍勢力とそれを牽制する勢力との葛藤が微妙なかたちで反映されていた。

自らこうした道に乗り出すことのできない反動的ブルジョアジ、地主勢力は、まずなによりも労働者にあらんかぎりの非難の声を浴びせ、次いで国民党左派がヘゲモニーを握る政府に対しても攻撃の矢を放った。翌年一月スマトラの「革命政権」の首相になったマシユミ党のシャフルディンは、当時インドネシア国立銀行の総裁であったが、すでに五日にはジャカルタのオランダ系企業を接収しようとする動きを非難し、「インドネシアの『西イリアン解放運動』中にとらわれている最近の措置は、インドネシア憲法の規定に甚だしく違反するものである」と述べ、スカルノとハッタに対し、国民が「法を守る」よう説得することを要請した。

国民の「先頭」に立って「民族解放運動」を「指導」しているジュアンダ内閣は、上からオランダ企業管理などの措置をとると同時に、アメリカのアリソン大使との会談をひらいた。一〇日のジュアンダIIアリソン会談は、スバンドリオ外相の言明によると、オランダとの紛争から生じたインドネシア情勢打開のためアメリカが援助できるかどうかをインドネシア側にたじたものであった。アメリカの申入れは「今週これで二度目」であるが、彼はこの申入れをインドネシア政府がオランダとの紛争解決への寄与と考えているかどうかは明言しなかった。四七年のオランダの第一回「警察行動」が、アメリカの武器をもったオランダ軍によって遂行されたのち、

国連安保理事会でオランダ軍撤退要求案を拒否したアメリカが、米・豪・ベルギーからなる三人委員会では、アリソンの「申入れ」の内容も察しがつこうというものである。《あるときオランダ軍が、「U・S・A」のしるしをつけたトラックにのってパタヴィア（ジャカルタの旧名称）の街を走り、インドネシア人に発砲したため、民族主義者が抗議したが、これに対するバーンズ國務長官の唯一の回答は、トラックからアメリカのしるしを消すよう命令したという声明だけであった》（レイモンド・ケネディ「太平洋におけるアメリカの将来」、ナタラジャン「広島からバンドンへ」から重引）というレイモンド・ケネディの証言は、アメリカの善意がどのような性質のものかをよく物語っている。

外相は「明言しなかった」が、翌日になると、外務省スポークスマンのハルソノは、「われわれは紛争解決に導くような一切の調停を受入れる用意がある。もしアメリカが調停に立つことを申出れば、われわれは喜んで受諾するだろう」と記者団に語った。

スバンドリオ外相は、つい二、三日前に国連総会から帰ってくるに言及して、「NATOはヨーロッパの軍事防衛機構であると考えていたので、今度の措置には驚いている。インドネシアとオランダの紛争を解決するために、NATOがどんな措置をとれるだろうか」とNATOの介入に反対の意を明らかにし、さらにワシントンのインドネシア大使館は、九日、アメリカ政府に対し、オランダとインドネシアの紛争にNATOが介入することは「重大な先例」になると通告していたのであった。

アメリカ政府は、六日、アリンソン大使を通じて、オランダ資産に対する措置や運動が行きすぎで「共産分子に乗せられる」ことのないようインドネシア政府に勧告した。

アメリカの商社は、続々とインドネシア引揚げの準備をしていた。アリンソンと会見したジュエアンダとスバンドリオは、「情勢は落着きつつある」と力をこめて確言したが、アリンソン大使は米本国に向って「情勢は依然として重大」と報告してきているとアメリカ國務省は一日に発表した。

ダレスは、國務省西南太平洋局長メインをインドネシアに派遣することになったと発表した。これは、國務省とアリンソンとの喰い合いと共に、またもや不吉な影が解放闘争に覆いかぶさるかもしれないことを暗示するものであった。後にみるように歴代のインドネシア・ブルジョアジーは、アメリカ・ブルジョアジーに対して利益を与えることによってオランダ・ブルジョアジーとの闘争への支持を依頼してきた。そしてまた共産党が「オランダ帝国主義は他の帝国主義とはちがった最も狂暴な敵」と強調することによってこれを助けてきたのである。

インドネシア支配層の最も反動的な部分が西イリアン解放闘争に投げつけた非難のうちで、一番もつともらしいのは、このような企業接収措置はオランダに損害を与えるよりもむしろインドネシア自身に損害をもたらすものだ、ということだった。政府の手によるオランダ企業接収も、こうした声に応えるかのように、戦闘的労働者を非難しつつすめられた。事実、三千の島々からなるインドネシアは、海上の船舶交通の保障なしには一日もなりたらず、オランダ

ネシア人民の行動に対する支持を明らかにした。

AA連帯会議エジプト準備委員会のハナフィ氏は、六日、西イリアンに対するインドネシアの主権要求を支持すると述べた。

国際アラブ労組連盟は、同日、アラブ労働者に対しオランダの船舶、航空機をボイコットするようよびかけ、同連盟書記局は、インドネシア労働者のよびかけに応え、アラブ諸国の全労働組織に行動を起すよう訴えた。

七日、オランダ共産党中央委員会は、声明を発表してインドネシア国民の闘争を支持した。

「西イリアンに対するオランダ政府の政策は、インドネシアの主権を侵し、平和への重大な危険となっている。オランダ政府の政策は完全な平等、相互の主権尊重に基づくインドネシア国民との友好関係を必要とするオランダ国民の利益を損っている。オランダ政府は重大な情勢を克服する全責任を負っている。

一、オランダ共産党中央委員会は、オランダ植民地支配から西イリアンの解放をめざすインドネシアの勤労者及び全国民の闘争に拍手を送る。中央委員会は平和を愛し、進歩的なすべてのオランダ人にインドネシア国民の闘争を支持するよう訴え、オランダ政府がインドネシア政府と話し合つて、西イリアンを即時返還し、インドネシア共和国の内政に干渉することをやめるよう要求する。

一、中央委員会は、オランダ反動層の新しい軍事的冒険を警戒し、こうした企図を防止するため統一行動をすすめることを呼びかける。中央委員会はインドネシア共産党中央委員会にあいさつを送り、オランダ帝国主義とたたかうオランダ共産主義者の連帯を表明する。」(ハーグ発七日タス)

のKPMの機能停止に続いて経済的混乱が一層甚だしくなったことは否めない事実であった。世界でも最高の人口密度をもち、五、〇〇〇万の人口を擁するジャワと、いわゆる外領の島々との連絡を絶たれたなら、単一共和国の基礎は危くなるであろう。

こうしたインドネシアの地理的状况と経済的困難を考慮するならばインドネシア政府が断固たる西イリアン解放闘争を開始したとき、打てば響くようにこれに応えるべきものはなんであったか？ 反動勢力が、経済的困難を理由に、オランダ、アメリカ帝国主義者とのなん十べん目かの妥協を繰返そうとしたとき、直ちにインドネシアの道は別にあることを示すべきものはなんでなければならなかったか？ 帝国主義者との妥協ではなくして全世界のプロレタリアートとの団結こそがインドネシアの経済的困難をも救うるのであること、民族解放闘争をたたかう勢力には全世界のプロレタリアートなはずの権力を獲得したプロレタリアートからの物質的援助が期待されるし、これこそ帝国主義者の圧迫をはねけた民族が経済的にも自立して進んでいける基礎であること、「スプートニクの時代」とはまさにそのようなことが可能になった時代のことであること、を国際プロレタリアートは示さねばならなかったはずであった。

SOBSIのユエノ書記長とSOBRI(インドネシア共和国労組中央評議会)のダリフ組織部長は、四日、全世界の労働者にインドネシア人民の西イリアン解放闘争を支持するよう呼びかけを発表した。

これに添えて、中華全国総工会第八回大会に出席中のビルマ労組会議のタキン・ルイン議長とタキン・キン書記長は、五日、インド

アルジュエリアに対するフランスの共産主義者ほどではないにせよ、かなり慎しやかなこの声明が発表されたということは帝国主義本国においても事態がなみなならぬものであることを物語るものであった。

八日、中華全国総工会は、SOBSIに激電を送った。

フィリピン自由労組連合のシブリアノ・シッド会長は、西欧の植民地主義者と同調しているフィリピン政府の立場を非難した。

こうして、主としてアジア・アフリカ地域の労働者からはインドネシア人民の闘争に対する支持が寄せられた。だが、「平和のための物質的力量」をもってはいるはずの、権力を握ったはずのプロレタリアートはなにをしていったか？ インドネシアのこれまでの事態の推移は、そして現在の情勢を伝えるすべてのニュースは、刻々と公然たる階級間の衝突に向って近づいていることを示した。一刻の猶予もならなかった。これまでにみたようなあらゆる事実は、今こそ、すべての要素が各階級の権力に対する位置を決定するに最も効果的に作用する時期であること語っていた。

《インドネシアはオランダとの関係悪化による経済的打撃を緩和するため、日本との経済提携を緊密にしようとする動きをみせている。その一例として現在インドネシア国内海上輸送を独占しているオランダ系のKPM汽船会社の運航が支障を来す場合に備え、日本から国内輸送用の船舶をチャーターしたいと工作している向きもある》とジャカルタ六日発の共同電は伝えている。

SOBSIは十日、再び訴えを發し、オランダ企業接収後インドネシアが直面している技術上の困難を克服するため、技術的に進ん

だ、国々の専門家の援助を求める旨、世界労連にあててメッセージを送った。不完全な新聞報道によっても、一月二日の政変以前の決定的時期に、東独がこれに応えたことが伝えられている。八日にジャカルタ駐在の東独の貿易代表は、もしガルダ・インドネシア航空が、オランダ人操縦士引揚げのため操縦士に不足する場合、東独は操縦士を提供できるし、オランダと貿易関係が断絶したときは、東独はそれまでオランダが輸入していた分を代りに輸入するから心配しなくてもよいと強調し、インドネシアのオランダ留学生も東独に來ればあらゆる便宜が与えられるだろうと語ったという。

インドネシア・ブルジョアジーは、オランダに代って日本と西独が、市場の空白状態に乗じて進出するのを恐れる一方、やはり日本・西独・アメリカ・イギリス・インドなどと提携して局面の打開をはかるうとしていた。オランダ航空KLMの代りにはインド航空とパン・アメリカンの乗入れの交渉をすすめ、東独ではなくて西独がガルダ航空に操縦士を提供し、内海航路は、日本、イギリス、ベルギーが引継ぐだろうといわれた。これらの国の紳士たちは、インドネシアの市場を狙って相互に牽制しつつあった。それにもかかわらず、政治的、経済的に不安定なインドネシアに対してどんな条件でもなにかを提供しようというのでは無論なかったらう。こうしたとき「社会主義」諸国の敏速な、決然たる具体的な援助の申し出はインドネシア・プロレタリアートにかけられない激励を与え、彼らが民族ブルジョアジーをして非妥協的な反帝闘争の道に立たしめる決定的な契機となるものであった。だが、ソ連、中国がいくらかでも物質的支援を明らかにしはじめたのは、外国通信社の伝えるかぎりでは十二月の半ばをすぎたからであった。その時すでに事態は変

民の革命的エネルギーは未だ発揮されていなかった。国民はすべて現在の政府の腐敗ぶりに絶望していた。誰が事態を決定する鍵を握っているかは明らかであった。

四、インドネシア共産党の歴史(一)

——シアリフディン内閣——

インドネシア共産党は、イタリア、インドと並んで資本主義諸国の共産党のホープ「三」の一つとして知られている。偉大なインドネシア共産党は、このようなインドネシアの情勢に直面してどのような指導を行ったか？ これについて検討する前に、インドネシア共産党のこれまで歩んで来た道をふりかえってみよう。

われわれがこの偉大な党の過去を一目でもみてみると、それがあらゆる瞬間において、その社会的条件の相違にも拘らず、日本共産党の歩んだ道とあまりにもよく似ているのに一驚するのである。

第二次世界大戦前夜からのインドネシア各階級の社会的諸関係と、その後の解放闘争の過程は、まるで共産党に労働者と農民のあいだで圧倒的な影響力を持たせるためにいちいち注文してつくられたかのようなだった。

インドネシアにおいては、ジャワ島と「外領」(ジャワ、マズラ以外の島々)との社会的条件は極めて相違している。外領では、西イリアン等の一部の未だに原始共同体が残存している地方を除い

化していた。

一月一日以後の一〇日間の情勢の発展をみると、事態の進行の方向はインドネシア内外のプロレタリアートの動向によって決定的に左右し得る条件にあったといえよう。オランダブルジョアジーに対するストライキの指令を出した政府の立場は、魔法使いの弟子と同じだった。思いもかけぬ人民のエネルギーに慌ててブレッキをかけようとはじめたが、その呪文を知ってはいなかった。外国の妖婆たちも乗り出してきた。一方ではこれを恐れ、他方ではこれに縋ろうとし動揺を続けた。

昂揚したプロレタリアートと迫り来る経済的困難を前にして、政府内部の分裂的傾向がどのような勢力配置をつくり出していか、それは前衛党の指導と国際プロレタリアートの動向いかんにかかっていた。だが、国際プロレタリアートの指導部は、一体なにを志していたのか？ そしてインドネシアのブルジョアジーでさえオランダブルジョアジーとの「話し合い」に見切りをつけて「闘争」にのりだしたとき、オランダ共産党が自国政府の打倒ではなくして自国政府に「話し合い」の要求を出すとは？

ジュアンダ内閣は共産党の支持なしには存在しなかった。マシユミ党やその他の国民の遅れた部分に依拠する回教政党的腐敗は、彼らが大眾から全く見離され、地方の封建的反動的勢力と結んで辛くも生き永らえねばならないまでに至らしめていた。解放闘争の進展は一方ではこれら買弁勢力に打撃を与えると共に、他方では彼らの民族主義的部分が不徹底な政府に対する反対勢力として国民の支持を回復しようとするのを助けた。土地をもたぬ農

て、オランダ人の征服以前に封建制が成立していた。オランダ人はすでに存在し激化していた農民と封建支配層との対立を、そのまま彼らの植民地支配のために利用した。一九三〇年代までも、民族ブルジョアジーとプロレタリアートの成立はみられず、殆どがジャワと中国からの出稼ぎ労働者であった。第二次大戦前の一〇年間に鉱山や大農園地方でプロレタリアートの形成がすすみ、一方、海外地方では農民の分解が急速に進んで、土地を失った農民は小作人となり発生しつつあった農業プロレタリアートと共に革命勢力となった。しかし全体として、外領においてはプロレタリアートとブルジョアジーの成長は弱く、回教団体の統一の下に反帝闘争が推進されジャワの民族解放闘争に指導されることが大きかった。

一方、ジャワでは、オランダ帝国主義者は土着封建士候を一掃しその土地を奪って旧支配層を植民地行政官吏に仕立てあげ、彼らに俸給と特権を与えて寄生的生活を許した。ジャワの人民は、封建君主から帝国主義者に主人がおきかえられただけで一層苦しい生活を強要されたが、一八七〇年にオランダが施行した土地改革によって農奴制は廃止され若干の耕作地が与えられた。この土地改革は、外国企業による急速な資本主義の発展と、農村共同体の分化を促進し農民は零落して土地を失い、多量の労働力を生み出した。このことは、封建的雇傭形態とからみあった資本主義制度による外国資本の法外な搾取を可能にし、また他方では土着地主と富農の発生を促進した。インドネシアの地理的条件は、土着農業に於ける資本主義の担い手としての富農にも封建的地主としての搾取形態も併せ行わせた。また彼らは、帝国主義者の威を借りてその支配を維持しようとしたし、帝国主義者も積極的にこれを支持した。この状態について

インドネシア史の権威、A・A・グーベルは次のように書いている。
 《ジャワにおける外国独占資本による土地の急速な奪取と農民に
 対する帝国主義的搾取は、ジャワ農民全体と帝国主義とを根本的に
 対立させ、また農村上層部も帝国主義的支配の打倒に関心をもちよ
 うになった。しかし広範な農民大衆の立場からすれば、農業問題は
 外国人の大農園を没収し、分割するだけで解決されるものではない。
 すべての土地を実際に耕すものに移すことだけが、農民大衆の
 生活を実際に楽にするのであった。しかもこれは、半封建的土地所
 有者を完全に一掃し、土地のないまたは土地の少ない農民に対する
 富農の前資本主義的搾取の可能性を制限しなければ実現されなかつ
 た》(E・M・ジョーエフ編「植民地体制の危機—極東アジア諸
 国民の民族解放闘争(下)」のうち、A・A・グーベル「インドネ
 シアの民族独立運動」)

こうした事情が、土地を求める農民の革命的運動と、農村上層部
 の徹底した農業改革を恐れる動きを明らかにし、また戦後のジャワ
 の反帝闘争における民族ブルジョアジーの進歩性と反動性、統一戦
 線の結成と分裂の過程に大きくあずかっている。ジャワにおいては
 ブルジョアジーとプロレタリアートの形成は外領とちがって極めて
 早く、第一次大戦前に政治結社への動きがみられている。

全体としてインドネシアの状態を概観するならば、民族ブルジョ
 アジー、殊に産業ブルジョアジーの形成は、他の植民地諸国と比べ
 て極めて遅くかつ緩慢であった。これは、オランダ帝国主義者が
 英、米帝国主義者を「共同支配者」としなければならなかったこと
 独占的な前資本主義的搾取形態から直接帝国主義期の独占資本支配
 に移行したこと、また、中国資本がふつう民族ブルジョアジーが占

めるべき地位を占めていたことなどによるものである。とグーベル
 はいっている。したがって、民族ブルジョアジーの政治的経済的役
 割は比較的小さく、インド、フィリピン、インドシナその他に比べ
 て民族解放運動の初期の段階においても指導的役割は演じなかつ
 た。これに対して、プロレタリアートの成長は民族ブルジョアジー
 の成長よりもずっと急速で、工業プロレタリアートは港湾、都市の
 みならず、鉱業地域、砂糖工場のある農業地区にもかなり集中して
 いたし、また彼らが政治勢力として登場したときは、大十月革命後
 の資本主義の危機の時代であった。

このような次第であったから、弱小ブルジョアジーは、オランダ
 支配の倒壊を欲しつつも、断乎たる農業革命の敵であり、したがっ
 て彼らは、革命を経ない独立、オランダの改良による独立、でなけ
 れば帝国主義諸国間の相互牽制による独立を夢みていたのだった。
 スカルノ、ハッタらも、帝国主義諸国間の対立を利用するだけで、
 人民大衆を本格的に組織することを考えないのがその特徴だ、とグ
 ーベルはいっているが、このことは第二次大戦後の独立闘争によっ
 て確認され、また今度の西イリアン解放闘争においてもわれわれが
 否定なしに認識させられた点である。

グーベルによれば、インドネシア共産党は非法闘争の経験をも
 たず、またその必要を軽視したため、第二次大戦前共産党員は
 《まったく献身的に既存組織を革命化し、反帝闘争に人民大衆を結
 集するために闘いつづけたが》、帝国主義者の弾圧によって大部分
 の指導者は投獄され、合法組織は弾圧され解体され、第二次大戦以
 前には、強固な非合法的党をつくるのに成功しなかった。強力な非

合法的の独立政党が存在しなかったことは、すでに一九一〇年代末か
 ら二〇年代半ばにかけて、民族解放闘争の指導者として獲得してい
 た地位を著しく弱めてしまった。

日本占領時代には、民族解放運動は、徹底的な革命勢力と帝国主
 義の対立を利用して独立しようとするブルジョア分子とに分化し
 た。スカルノは勿論後者の道をとった。戦時中の共産主義者は、非
 合法組織の欠如にも拘らず英雄的抗日運動をつづけて大衆のあいだ
 に党の権威をうちたてた。ジャワ以外の地域では回教団体が抗日運
 動を指導した。

一九四五年、日本の敗戦がソ連の一撃によってかちとられ、資本
 主義国の軍隊がインドネシアに集結する以前に日本帝国主義が崩壊
 したという事実は、インドネシア独立時における階級間の力関係を
 プロレタリアートの側に有利にした。《植民地諸国の有産階級にと
 って終戦時の独立宣言は、まさに彼らが夢みていた「革命を経ぬ
 独立」の理想的形態であった》が、《第二次世界大戦の経験から深
 く学んだ人民大衆は、独立宣言は徹底的な民主的改革と結びつかね
 ばならぬと考えた》。戦前は帝国主義者と共に自国の民族を弾圧し
 戦争中は日帝と協力した反動分子も、この独立の性格ゆえに急いで
 共和国側につき、そこで自己の階級的位置を維持しようとした。グ
 ーベルがいうように、《この宣言は民族の名においてのべられたが
 ヴェトナムにおけるように抗日民族解放運動の指導者が宣言したの
 ではなく、占領時代に合法的な存在し日本の崩壊時には事実上政権
 にあった政治指導者が宣言したものであった》し、《大統領を首班
 とする共和国初代内閣には、人民抵抗運動の指導者は一人も含まれ
 なかった》のである。そして採択された臨時憲法も、スカルノの大

統領としての不可侵の権威を確立するものであった。

《これと同時に、インドネシア共和国憲法は、占領者との闘争の
 すべての重荷をその肩に担った広範な人民大衆の要求をある程度反
 映してただけでなく、民族ブルジョアジーの経済的弱さを証明す
 るものであった。民族ブルジョアジーは、協同組合や国営企業の広
 範な発展のなかに、また土地や埋蔵物の国家統制の確立のなかに、
 インドネシアへの帝国主義的侵入に対抗する手段を見出した。

民族戦線の諸政党が結成される以前に臨時議会によって採択され
 たインドネシア憲法を評価するとき、この憲法の採択という事実自
 体が、インドネシアの有産階級は人民大衆の進歩的な民主的的要求を
 遂行し得る能力がないことを示している》。

共産党は四五年一〇月合法組織を復活して急速にその組織を拡大
 した。同月、社会党が結成され、労働組合も復活し、SOBSIが
 設立された。年末には労働党が結成された。四六年には三つの革命
 政党がすでに共同行動をとるにいたっていた。臨時議会においても
 左翼の比重は日に日に増大した。社会主義ブロックは、SOBSI
 を通じて労働者を指導した。SOBSIは成立時一五〇万、四九年
 以後は三〇〇万の組合員を擁し、鉄道員労働組(八万五千)、石油労
 組(二万)、農園労働組(二万)、海員・港湾労働組(二〇万)、砂糖農
 園・工場労働組(一〇万)、電気労働組(一〇万)等を成立の初期から
 抱擁していた。また社会主義ブロックは、各種の農民組織を統一し
 た農民同盟(BTI)にも大きな影響力をもち、シアフリデンを会
 長とする最も大衆的な青年団体であるバシンド社会主義青年同盟を
 も完全にその指導下においていた。さらに、マシムニ党内部の農民、
 手工業者、小ブルジョアジー等の一般党員にもその勢力を拡大する

ことができた。

《国民党の一部小ブル幹部とそのうらの指導者スカルノ大統領は、ある時期までは左翼ブロックの活動を妨害しなかったばかりかマシユミ党や国民党内さえの右翼分子に反対して左翼ブロックに頼っていた》が、ブルジョアジーが左翼的勢力の指導を排し彼らのヘゲモニーの下に独立の課題を遂行し徹底した民主的改組の妨害を行っていたとき、《労働者階級にひきいられた労働大衆が組織的にたたかえたとたかうほど、短期間に成立した民族統一戦線内部の階級の分化はより急速に進んだ》はずだった。事実、独立宣言期の共産主義者は、徹底的に戦闘的にたたかっていた。朝日新聞外報部の丸山静雄氏は当時の状況を次のように伝えている。

《日本敗退後の共産主義運動は、日本軍政時代、西ジャワのバヤ炭鉱に苦力頭として潜んでいたともいわれるこのタン・マラッカによって指導されてきた。彼はモスクワ共産主義者ではなく、民族共産主義者の立場をとっていた。彼は英領北ボルネオ、ポルトガル領チモール島までインドネシア共和国領土たるべしと主張、旧蘭領インドの独立をもつて満足するスカルノ政権に一矢を報いた。それから次には人民戦線、統一戦線、全国総動員の必要を力説、同時に資本主義の否定、住民の生活保障、外国軍隊の即時撤退、対オランダ宣戦をスローガンとして力強く血気の青年層に呼びかけた。

彼はまた新聞、放送局、インドネシア共和国軍に働きかけて赤色軍の編成を計画、ついで地方行政官の掌握、資金、武器の獲得に手をつけた。戦後の混乱、食糧不足、失業、反蘭感情、そして文字を解するものが全人口の十割にすぎないという状態は、タン・マラッカの呼びかけを非常に効果的にし、こうした背景のもとに彼はシャ

リル拉致事件に加わり（四六年七月）、さらにスカルノ大統領を脅迫してクーデターを企図したのであった（四六年七月）。これは失敗した。しかし彼がソロに設けた共産党本部は覆面の政府としてジョクジャにあるスカルノの「事実上の政府」と鋭く対立していった。》（丸山静雄「アジアの覚醒」）

タン・マラッカの活動が勿論全面的に正しかったわけではあるまいし、その中には重大な誤りも含まれていたかも知れない。それをここでは検討することはできないが、党内の「トロッキスト分子」を粛清した四六年の「粛党」以後、インドネシア共産党がどのような発展の道を進んだかを次にみてみよう。

グーベルによると独立宣言以後の階級勢力の配置は次のようである。大封建勢力は反動の支柱となりオランダ帝国主義と結びつき地方に傀儡政府を作って共和国に対抗させようという帝国主義者の手先の役割を積極的につとめた。ジャワの弱小なブルジョア、地主層は、独立を欲すると同時に自己の支配を維持できるようなブルジョア民主主義を望み、一見きわめて進歩的な政治、文化、経済改革案を提起したが、根本的な農業改革案はこれに含まれず、人民との行動に参加はするが人民の独力による行動開始は極力抑え、反帝武力闘争を遂行することは忌避した。強力な革命陣営は、独立と徹底的な民主的改組のために闘う決意のある広範な人民大衆の代表で構成され、共産党は抗日闘争によって相当な勢力を獲得していた。

こうした状況にあって、共産党はどのように大衆をその周囲に結集することができたであろうか？ グーベルは次のように書いてい

《インドネシアでは住民の九四〇が文盲であったため、労働者のみならず農民の大部分は回教徒ブルジョアジーの宗教的スローガンあるいは民族党の小ブル的スローガンに依然として眩惑されていた。したがって、独立と徹底的な民主的改組のための人民大衆の統一という、綱領をかかげることによってのみ、社会主義ブロックは民族解放運動におけるプロレタリアートの指導的役割を確立し、共和国指導部における妥協分子を孤立化しえたのである》（グーベル前掲書）

私はそれを確かめるすべをもたないが、マルクス主義者ではない丸山静雄氏の先にみたような叙述による限りでは、タン・マラッカの指導下における共産党の活動はまさにこのようなものであった。一九四五年、オランダ人がインドネシアにまだ軍隊を駐留させないうちにイギリス軍が共和国の主権を無視して日本軍と取引をはじめたが、スカルノとシャリール第一次内閣は人民大衆を動員しないばかりか大衆行動を積極的に抑えつけた。これに対して共産党に指導された人民大衆は精力的な武装闘争を展開した。《インドネシア側の抵抗は意外に強力で、ことに日本軍から大量の武器奪取に成功した急進青年派の戦闘意欲が旺盛であった。》（丸山静雄「前掲書」）

オランダは旧態依然たる戦前の植民地支配を復活しようとしたが、インドネシア人民の勇敢な闘争をまのあたりにして、十分な兵力の不足をさとりインドネシア共和国との妥協の道をえらんだ。イギリスは、インドネシア人民の流血と、オランダ＝インドネシア間の「調停」という偽善的方法とを併用した。

こうして四六年十一月に確認され翌年三月に調印されたリンガジャアチ協定の締結に至るのであるが、この直前の四六年八月、アリ

・ミンがモスクワから帰国したのである。彼は一九一九年党結成の指導者であり、一九二一年にモスクワへ行き、二四年に離党、その後復党し、第二次大戦中は亡命して中国、ソ連で暮らしていた。アミンは帰国するや党首に就任して従来の過激な方向を改めるといわれる。

この協定は、ジャワ、スマトラ、マカオにおける共和国の事実上の承認、オランダによる傀儡政府樹立計画の放棄、インドネシア合衆国成立のためのオランダとインドネシア共和国との協力等を主要な規定とするものであったが、この協定は《共和国に対する一層の攻撃準備のためのかくれみの》（グーベル）に過ぎなかった。実際《米英の援助によって訓練され装備された軍隊は、共和国との交渉中にも、リンガジャアチ協定の調印後もたえず到着した》。

リンガジャアチ協定に反対したのは、マシユミ党と一部の民族黨員だけ（一）であった。共産党がこれに賛成したのに反して、マシユミ党が《みせかけだけでも「徹底的」な反オランダ的立場をとっていたことは、増大する社会主義ブロック諸党の権威に対抗して大衆に対するその影響力を維持することを容易にした》（グーベル）。グーベルは、革命勢力の指導者までが、《リンガジャアチ協定の確認と調印の時期にも、インドネシアの状態をさらに悪化させるようなオランダ反動のすべての策謀から適切な結論をひき出さなかった》と批判している。彼は、《この協定がこのように過大評価されたのは、革命的指導者までが植民地における帝国主義者の戦後の策謀を十分に理解していなかったからであった》と彼らの立場に理解あるところを示している。当時は《シャリール（右翼社会黨員）だけではなくシャリフデン（のちの共産党政治局員）までもが

オランダの政策は英米の政策とちがうとしばしば述べたという。(しかし、すでに「十分に理解」した筈の五六年になっても、シャリフデンだけでなくアイディットまでもが、《全インドネシア人民はオランダ植民地主義に対しては、他の帝国主義に対するよりもより明確な、より強硬な態度をとるべきだ、とインドネシア共産党は考える》(インドネシア共産党中央委員会第四回拡大総会における報告)というのを聞くとき、これはどう理解したらよいのであろう?)

リンガジャッチ協定が結ばれてから、《オランダは文字通りその調印の翌日から不法にもこの協定を破った。オランダ帝国主義者は十分と思われる軍隊と武器をジャワに集結したときをみはからって、一連の挑発と最後通牒をつきつけたのち、一九四七年七月二十六日、未曾有の規模で植民地戦争を開始した》(グーベル)。

この侵略戦争は、右翼社民のシアリール内閣が、事実上共和国に独立を放棄させるようなオランダの最後通牒をまさに受諾しようとしていたときに開始されたものだった。実際のオランダ軍の行動は最後通牒以前から始まっていた。インドネシア人民は、最後の血の一滴まで流そうと決意した英雄的な闘争をくりひろげた。こうなるとはスカルノ大統領も、民族の総力を結集するような共和国政府を認めざるを得なかった。かくして、のちに共産党と合同した社会党左派のシアリフデンを首班とする内閣が構成されることとなった。ところがここに驚くべきことが起った。人民大衆のエネルギーは最大限に発揮される条件にあった。ハッタや右翼社民の反人民性、買弁性はこの上なく大衆の怒りを買っていた。共産党はリンガジャッチ協定に賛成して、大衆の失望を買ったとはいえ、まだその損失

をとり返すことができた。大衆団体の組織化は進み、左翼プロックは急速に強化されつつあった。しかもそのときに共産党の握るべき政権が、はたきをかけられて目の前にぶら下ってきたのだ。すなわち後に共産党と合同した社会党左派のシアリフデンが内閣を組織することになったのである。だがここで共産党のとった態度は、《共産党はもとも共和国政府には参加せずとの》《原則》的態度だった(グーベル)。共産党は、それでも、社会党の名簿で入閣し、しつぽ副次的なポストに坐ることになったという!

この内閣は、連立内閣と呼ばれるが、その構成メンバーは、共産党が影響を及ぼし全く左右できる範囲のものであった。インドネシア共産党綱領も、これは事実上共産党中心の内閣であったと認めている。首相兼国防相になった社会党のシアリフデン、副首相の労働党々首兼SOBSI会長のサティアジッドは、いずれも翌年社会党労働党が共産党に合同すると共に政治局員となった人物である。最重要なポストは左翼プロックが握っていた。このような内閣で共産党がおらずと遺慮(一)をしっている必要が一体どこにあったのだろうか? しかも右に述べたような情勢の中で!

シアリフデン内閣は一九四七年、経済十年計画を作った。共産党綱領が「共産党中心の内閣」と呼ぶこのシアリフデン内閣の作った経済十年計画の《根本的な欠陥》は明らかだと、グーベルはいつている。《工業化は十分可能であるのにそれを放棄し、外国資本の進出に大きな見透しを与えたことは、形式的に独立した共和国の外国独占資本への従属という現実の脅威をさえつくり出した。勤労大衆の福祉向上のための各種の措置が提案されてはいるが、土地を再分配することによって農業問題を解決する意思を全然示していな

い。外国人の財産を承認し、土着封建領主、地主の大土地には全然手を触れず農業関係のすべての措置を農民への融資と協同組合の設立、人口過剰地からの移民だけに帰着させている》。

またシアリフデン内閣は、会社側がインドネシア労働者と団体協約を結ぶという条件つきで、外国石油会社とスマトラに於ける採油協定を結んだ。この政府の方針は、すべての政党及び労働組織の賛同を得、SOBSIは、外国人がインドネシアの法律を承認するならば、共和国における外国企業の正常な営業に対しては、労働者もその責任の一部を負うだろうと、いく度となく強調した。SOBSIが共産党の指導下にあったことは繰返すまでもあるまい。SOBSIの三委員会の共同声明には、「経済面ではSOBSIは外国企業業に関する一九四五年の政府声明を支持する。声明は、労働者に対する搾取を禁じているが、利潤はこれを許している(一)」「と述べている。ここで、四五年の政府声明とは、インドネシアにおける外資の利益を保障し、日本侵略以前のニューギランド植民地政府の負債を承認し、インドネシアの資源開発に関する外資の参加を約束し「われわれは国富のために必要と認められる(外国人の)財産に対し、正当な報酬を維持する権利を自ら留保する」と強調しているというような代物なのである!

四七年七月に公然と開始された植民地戦争は、シアリフデン内閣の「民主的」諸措置の実施を困難にし、ブルジョアジーからの攻撃をも強化した。人民の果敢な反撃が続けられたが、現実には圧倒的な武力をもって迫る帝国主義勢力の前に、極めて苦しい闘いとなった。国連安保理事会は、前述の三人委員会を設置し、アメリカはこれを利用してオランダの後押しをする。同時にアメリカのインドネシア

進出の足場を築き、共和国の反動分子との交渉の場を作った。この委員会による「調停」によって、民族解放運動への打撃を容易にした。革命陣営の多くの代表者が、オランダの植民地支配復活を最も恐れていたのだから、アメリカがその目的を達するのは容易であった。

こうして押しつけられたレンヴィル協定は誰の目にも共和国側の重大な後退として映った。《一九四七年の終りには、オランダ軍はジャワ及びスマトラにおける相当に広い領域と大都市の大部分を支配し、鉄道を抑え、マズラを占領した。オランダ艦隊はインドネシア共和国を封鎖し、諸外国との通商を許さなかった。それにも拘らず、インドネシア共和国の権力は依然として、人口約四千万を擁するジャワ及びスマトラの大部分に及んでいた》(B・アヴァーリン「太平洋をめぐる帝国主義諸国の闘争」)。しかるに共和国はレンヴィル協定によって《オランダの占領した地点であるが、必ずしもその侵略地域と合致しない地点のあいだを結ぶ、いわゆるファン・モーク線にそって、ジャワ及びスマトラの広大な地域を失った》うえに、《共和国はファン・モーク線から軍隊を撤退することに同意し、その地域の住民をオランダ侵略者のなすがままにまかせた》(グーベル)。さらに《共和国は、「インドネシア臨時政府」(オランダがその下におこうとした傀儡政府——「インドネシア連邦」)に参加することに同意した》(同上)。

ここで共産党はどういう態度をとったか? グーベルは書いている。《共産党は帝国主義者の策謀を大衆の面前で徹底的に暴露せず、レンヴィル協定に対する自己の態度決定(一)にさえ迷っていた。そして議会でこの協定が承認されたこと、その調印に左翼プロック

の代表さえもが参加したことは、共和国陣営内におけるブルジョア分子の指導的役割の維持を容認した。

この驚くべき共産党内閣は、アメリカ帝国主義者からさえ期待をかけられるようになっていた。すなわち、《米帝国主義者とその共和国政府内の代弁者は、レンヴィル協定がシ、アリ、フ、デン、連立内閣によって調印された方がいいと考えていた。というのは、それができれば、議員の五〇〇を左翼ブロックが占める、議会ではこの協定は難なく可決されると考えたからである》(グーベル)。

一九五四年に採択されたインドネシア共産党綱領は、このことについて次のように述べている。

《一九四五—四七年における共産党の内閣、一九四七年七月—一九四八年一月の共産党中心の内閣も、これらの内閣が人民の民主的革命的政策を確実に遂行するような人民民主政府になるのに貢献しはしなかった。(まさにその通り！だがその理由は？——岡田) その理由はなぜかといえば、帝国主義者・封建領主・買弁が、植民地支配と封建的搾取の廃止に向けられるあらゆる試み(そんな「試み」をいつ、誰がやったのだ?!——岡田)をぶっつぶしたからである。しかし、力関係が自分たちに有利なように変るや否や、彼らは直ちにこれらの内閣をひっくり返し(一体なぜひっくり返されたかと思うのか?!——岡田)彼らの意志に忠実な反動どもを政権に据えたのである》と。

綱領は続けていう。

《このような事態の下で、出口はどこにあるであろうか。出口は一方における帝国主義者・地主階級・買弁ブルジョアジーと他方における人民のあいだの力のバランスをかえることの中にある。出口

はとりわけ、労働者・農民を立ちあげさせ、動員し、組織することにある》と。

なぜ「共産党中心の内閣」がひっくり返ったか？ それは革命的政策を行ったからではなくて、まさに正反対なのであった。シ、アリ、フ、デン内閣は若干の民主的改革はやったが、《封建的搾取の廃止》さえやりはしなかった。丸山静雄氏は次のように書いている。《レンヴィル協定は明らかにインドネシア側の全面的敗北を意味するものであっただけに、交渉にあたったシ、アリ、フ、デン内閣はマシニキ党国民党などを中心とする右派勢力から攻撃されて(右派から民族解放闘争の不徹底さを攻撃される!!——岡田)辞職、かわってハッタ内閣が登場した》と。

インドネシア共産党の現書記長であるアイディットは次のようにいっている。《警戒心に欠けていて、革命の問題は国家権力の問題であることを、十分に理解していなかったアミール・シ、アリ、フ、デン同志は、一九四八年一月に、手中にあった権力を自分からひきわたってしまったのです》(インドネシア共産党創立三三周年記念講演——一九五三年五月)。党綱領は、帝国主義者、封建領主、買弁がシ、アリ、フ、デン内閣を《ひっくり返し》たとい、アイディットは《自分からひきわたした》という。だがいざにせよ、アイディットの次の言葉は、この内閣が《辞職》しなければならなかった事情を明らかにしている。

《アメリカ帝国主義者は、明らかに、インドネシア共和国の内政へ干渉してきたのです。共産主義者の指導している独立運動をぶちこわすために、G・ホプキンス(トルーマンの外交顧問)やキャンベルのような人物を送り込んできました。彼らは、レン

ヴィル協定に賛成させよう(反対ではない——岡田)として努力すると共に、アミール、シ、アリ、フ、デン内閣の内部でマシニキ党の指導者を組織的に対立させました。マシニキの指導者はアメリカの代表に指図されてレンヴィル協定に反対して、アミール・シ、アリ、フ、デン内閣から脱退し、そしてこの内閣を倒し、共産主義者のいない内閣を作ろうとしました。》(同右)

なんとという悲劇!! 共産党内閣が議会の過半数の支持を得つつアメリカの希望を実現させてやることを保障するという馬鹿げた事態が起っているのです。アメリカはマシニキ党に民族独立の闘士の後を負わせ、しかもアメリカの希望が共産党内閣によって実現されるや極反動の「愛国者」によって共産党共閣を倒させたのである。

アイディットは、この期間の誤りについて、四八年八月の「インドネシア共和国の新しい道」という決議に言及している。この決議は、「共産主義者の根本的誤りは党の役割を小さく限定したことであった」と述べ、さらに、シ、アリ、フ、デン内閣以前の右翼社会主義者シ、アリ、フ、デンの内閣を支持したことは、第一に、「帝国主義反対の民族革命は、現在では世界プロレタリア革命の一部分となつていて」ことを理解せず、第二に、ソ連と米英帝国主義間の力の約合の変化がよくわかっていなかったことになつたとし、「原則的なまらがいをやったのは、党が思想的に弱いたためである」という結論がひきだされたということである(アイディット・党創立三五周年記念講演——一九五五)。

シ、アリ、フ、デン内閣は確かに困難な状態の中におかれていた。土地問題の解決するには共和国指導部のブルジョア、小ブルジョア分

子の反対があつたし、独立闘争には土着の地主や富農のみならず、ジャワの一部封建領主まで参加したため、土地の没収、分配の問題は極めて慎重に扱わねばならなかった、とグーベルもいっている。しかし、土地を持たぬ最下層の農民の希望に応じて彼らの大きなエネルギーを引きだし、徹底した民主的改革を願う人民大衆の要求を基礎として政策を施行していくときこそ、《労働者、農民を立ちあげさせ、動員し、組織する》ことが可能となつたであらう。たしかに配慮は必要である。しかし方向ははっきりしている。

グーベルもこれについてこういっている。《共産党は共和国独立宣言後にできた反帝統一戦線をあくまで維持しようとして、この反帝戦線における指導的役割を徹底的に獲得するための客観的条件を十分利用しなかった。これは若いインドネシア共和国の短い歴史全体にわたってみられるところである。共産党とこれと結びついた社会主義ブロック諸党は、独自の立場を示さず、かつ共和国陣営内の妥協主義分子と自らを区別しなかった。また党は軍隊内に決定的勢力をつくるために闘わず、スカルノの「極端主義者」との闘争の本質を断乎として暴露しなかった》。

悲劇はまだ続く。

《レンヴィル協定とその後の共和国政府内における変化は、インドネシア独立闘争における新しい段階であった》(グーベル)。綱領は《共産党中心の内閣も、これらの内閣が人民の民主的革命的政策を確実に遂行するような人民民主主義政府になるのに貢献しなかった》といっているが、共産党中心の内閣と称せられものがひとつたび革命的分子の信頼を失った、次にくるものはそれが元に戻るだ

けで済みはしないのである。党への信頼は地に墜ち、回復には莫大な血と涙が要求されるであろう。過渡的な人民民主主義政府とやらをまず作って、それが何度かできたりつづれたりして本当の社会主義政府になるなどという気狂いじみた妄想を抱いている人々も、少しは歴史に学ぶ必要がある。

《この段階で主要な点は》とグーベルは続けている。《共和国に参加し独立のために闘った有産階級層が、こんどは帝国主義への降伏の道をえらぶようになったことである。しかも、インドネシア共産党がはっきりした遠い見通しをもち得なかったことは、人民勢力を結集し、ブルジョア地主を暴露することを困難にし、かえってブルジョア地主が大衆へのその影響を維持することを容易にし、結局帝国主義に利用されることになった》。

アメリカに支持された右翼が、レンヴェイル協定調印後直ちにシヤリフデン内閣を倒し、スカルノは、札つきのハッタを首班とする内閣を作った。彼は、チエニジアのブルギバやモロッコのベン・ユールが反仏親米であるのと同じように反オランダ闘争はすすめつつ親米政策をとり、改革はさぼり左翼勢力には徹底的な攻撃を開始した。この期に及んでもまだ共産党は迷っていた。《右派政党を背景としたハッタ内閣に対し、左派は同調するもの(!!)と、しからざるものに分裂した》(丸山静雄)

《リンガジャチ協定が調印され、人民大衆がそれを支持したのは一時的息抜きと共和国の事実上の承認を獲得する試みであったと看做されるとしても、やはりそれは人民、民主勢力の誤謬であり、共和国政府内のブルジョア分子の公然たる裏切りの始まりであった、と考えねばならぬ》。(グーベル)

はオランダ帝国主義のむき出しの圧迫に反抗しつづけた。ハッタ政府は、傀儡インドネシア臨時政府(インドネシア連邦のこと——岡田)に参加することを拒否し、新しい傀儡諸国家を作ることに反対し続けた。オランダ帝国主義にこのような態度をとったハッタ政府は、オランダを主要な敵とみていた大衆にとっては独立闘争の先駆者のようにみえたので、これに乗じハッタ政府が民主的団体弾圧にのり出すことを容易にした。これに加えて、インドネシア共産党とそれに結びついた左翼政党が米國との妥協政策とハッタ政府の反人民的政策を暴露しなかつたことは致命的だった。(グーベル)。

だが、西イリアン解放闘争におけるハッタの役割についての次のような記述は、同じくグーベルによって批判されるべきものではあるまいか? 《八、二〇〇万の全インドネシア国民は一月二五日今なおオランダに不法占拠されている西イリアンを解放する闘争に「厳粛に思いをはせる」ため一分間の黙禱を行った。……元副大統領のハッタ博士は、この集会の決議を支持する旨のメッセージを出した。以上のようなインドネシア全国民の一致した意志表示について……》(インド共産党「ニュー・エイジ」紙、五七、二二、八)ハッタがどのような立場から西イリアン解放闘争に参加しているかについて前衛党がこれを明らかにせず「民族解放闘争は全国民一致して」という風な非階級的な思想をプロレタリアートに抱かせるならば、プロレタリアートが階級闘争で勝利を収めることは全く不可能となるであろう。その後の事態の発展はそれを明らかにしている恐らくこれが二〇回大会風の新式のやり方なのかも知れないが、そうだとすればインドネシア共産党は四八年から先駆者だったわけだ。しかしこの新式のやり方は労働者にとつて恐ろしく高いものに

レンヴェイル協定を共産党内閣が結んだのは、《アメリカの脅迫とオランダの攻撃におどかされ、同時にまたアメリカの約束を信じこみ、そして大衆運動に恐れをなしたブルジョア諸政党の強い要請におされ》(アヴァーリン)たものだと仮にしても、そんなことに義理立てする「統一戦線」なんてものでは自分自身の破滅さえ導くものだということは、もういやというほどわかつたはずだった。にもかかわらず次のようなことが起つたのである。

《共産党指導部とそれに結びついた革命的諸政党は、米帝国主義の手先になり下つたブルジョア分子の策謀をよく知っていたにもかかわらず(今度は!!)、共和国政府の新施政方針に対しては、はっきりした一線を画そうと(さえ!!)は、しなかつた。臨時議会では左翼の代表からこうこうたる非難がまきおこり、シヤリフデンを主班とする連立内閣の再建要求が出されたが、ハッタ内閣の政策は十分には大衆に暴露されなかつた。どこまでも右翼幹部との統一戦線を維持しようとしたことは、この誤つた基本方針の主な原因であった》(グーベル)。

《オランダは、リンガジャチ協定の成立後共和国の勢力が及ばない地域に自治国を樹立する工作を進めていたが、レンヴェイル協定の成立後はその努力を倍加し、東インドネシア、東スマトラ、南スマトラ、東ジャワ、バスマンダン、マドラスの六自治国と九自治区を作りあげ、「インドネシア連邦」の構成単位とすることとした。(これら諸地域の代表は連邦派と呼ばれる)さらに、オランダ議会は四八年六月、オランダ・インドネシア連合樹立に関する憲法修正案を可決した》(世界年鑑・一九五〇年版)《米國と妥協し、インドネシア民族の利益を米独占資本に売渡しつつも、ハッタ政府のみかけ

ついたので。

ハッタ政府は、「人民革命勢力を弾圧して、資源をアメリカの役に立ててくれるならオランダに対抗して独自の『援助』をしてやろう」というアメリカに、露骨な媚態を示しはじめ、四八年中に共和国の最も重要な産業をアメリカ資本に譲り渡してしまつていた。アメリカ「援助」の条件である弾圧の準備もすすめていた。このような情勢に直面して革命政党と労働団体の幹部はやつとハッタ政府と絶縁するようになった。四八年九月、シヤリールに率いられる一部の右翼社民が分裂したあとの社会党多数と、労働党、それに社会主義青年同盟も単一の共産党に合流した。

そしてグーベルによれば一九四八年九月一六日、突如マデウンでシヤリフデンを首班とする人民革命政府が樹立されたという。《だが、共産党とこれと結びついた左翼諸政党及び団体が、これまでにハッタとその一派の裏切り政策を十分に暴露しなかつたこと、軍事的、組織政治的に蜂起の準備を十分に行つていなかったことはまさに致命的だった》(グーベル)。ハッタの軍隊は二週間足らずでマデウンを占領し、シヤリフデン、サルジョノ、スリブノ、サティアジッドらは逮捕され、ムソは戦死した。

ハッタは「反乱鎮圧成功」を誇り、アメリカの援助を当てにしてオランダの露骨な要求を拒否した。だが彼の主人は彼よりも狡猾であつた。グーベルによれば、オランダはチャンスとばかり攻撃を開始したが、アメリカはもしハッタが完全に実権を握つたのならオランダの攻撃を中止させようとしていた。しかしハッタの独力では人民大衆の闘争は鎮圧し得ず、バルチザンが統々と新しい地方に出現

した。そこでアメリカは銃火によって労働者・農民を沈黙させる緊急措置に切換えて、ハッタとの約束を破ってオランダの攻撃に援助を与えた。

ハッタは勿論一杯食わされたのだが、共産党はマデウンで重大な打撃を受けた。マデウンの事件が、誰かの挑発であるとか弾圧だとかいうのは結構だが、それによって革命に重大な損害を与えることになった共産主義者は責任がなくなるわけではない。なんどもくり返したようにこれまでの共産主義者の活動のすべてがこの事態をもたらしただけであった。四重も五重もの誤りの連鎖という前提がなかったなら、ハッタ政府との断絶のあとで挑発か偶発事——それが挑発か偶発事であるとしても——があったとしても、それがこのような結果をもたらすものとはならなかったであろう。そしてまた、そういう前提が事態をそのような方向へ導いていくような党の主体的条件をもつくりだしていくものである。このことは、われわれの悲痛な経験の教えるところである。

インドネシア共産党がこの痛手を回復するのは、思いの外早かった。インドネシアプロレタリアートの不屈のたたかいと共にインドネシアの社会的条件が共産主義勢力が発展するために極めて有利であったことが大いにこれに幸いした。だが、マデウンに至る苦い教訓は党の立ち直りを早めたのだろうか。

《インドネシア共産党第五回大会はわが党の長い歴史から学び、マルクス・レーニン主義を指針として五年以前の時期から完全に脱却した。この大会の成功によって党の暗黒時代は永久に終り五年に始まる新しい時期が急速に発展した》(党創立三五周年記念講演)といわれている。

編集後記

☆第四号が、非常に遅れてしまったことを読者に深くお詫びしたい。

どんなに熾烈な闘争も、同盟の理論機関誌の発行が遅延してしまつたことを合理化するものではないことを、編集部一同、肝に銘じたいと思う。

☆本号には、同盟の綱領草案を発表することができた。共産主義運動の公認指導部が改良主義に毒されてしまつて今日、この草案が、革命的労働者、インテリゲンチヤによって注目されるであろうことを期待したい。

☆本草案は、同盟中央委員会の決定に従つて、綱領起草委員会が起草し、八月の第六回中央委員会討議を経て、加筆修正したものである。本草案は、中央委員会の討議の上になつて、同盟第三回大会に提案される同盟綱領草案となるであろう。

☆われわれは、この草案に立脚しつつ、真の科学の方針を確立するために、さらに全力を傾ける決意をしている。すべての革命的労働者、インテリゲンチヤの熱烈な討議を期待する。

たしかに、第六回大会への中央委員会報告草案によると、党員数はこの期間に急激に増大している。すなわち、《一九五二年の全国協議会当時には、党員及び党員候補の登録総数は七、九一〇人だった。この協議会は、六カ月間で党員数を一〇万人にふやすことを決定した。一九五二年末の調査では、候補を含む登録党員数は一二万六六七一人だった。一九五四年三月の第五回大会の時には、候補を含む登録党員数は一六万五、二〇六人に達していた。いま一九五八年末には、党員は候補を含めて約一五〇万あり、その一割、一五万人が婦人である。》(第六回大会への中央委員会報告草案)

それでは、なにによって《暗黒時代》が《永久に》終らせられたのだろうか？ これまでの誤りの累積の中から、どんな自己批判、どんな新しい方針、どんな思想が打出されることによつて、この「大躍進」は可能になったのだろうか？

西イリアン解放闘争と インドネシア共産党

- 序
- 一、西イリアン解放闘争の発展
 - 二、インドネシアにおける階級対立
 - 三、解放闘争における諸勢力
 - 四、インドネシア共産党の歴史(一) シアリフデン内閣次号予定
 - 五、インドネシア共産党の歴史(Ⅱ) スカルノ構想
 - 六、一二月一二日
 - 七、反革命の開始
- 後記・年表

☆本号に第一部を掲載したプロフィンテルンの活動の総括は、第二部、プロフィンテルンの活動、第三部、世界労連の活動、とつづいて三部作になる予定である。労働運動の真に科学的な総括が、未だ皆無の状況において御期待を乞う次第。

☆「西イリアン解放闘争とインドネシア共産党」は、次号で完結の予定。
スカルノ構想に屈服したインドネシア共産党に、代々木共産党が血道をあげている現在、本稿は非常に有益であろうことを期している。

☆代々木共産党六中総決議の裏切性には、すべての革命的労働者が怒りの叫びをあげている。就中、「現代の理論」に対する弾圧こそは、所感派官僚の宗派的態度の好見本だ。いづれにしても、この日和見主義の党は、ますます革命的労働者から見離されることによつて、派閥抗争の泥沼に沈みこんでいくだろう。安保闘争の中で、ただ一人かれらだけが孤立しているのは、天下周知の事実だ。

☆次号は、第三回大会を終えて、いよいよ新しい真の階級的前衛政党への発展の軌道を爆進する同盟の、当面する理論的課題に応えるために、内容と形式のより一層の充実をは

発行日 一九五九年八月一日
(年六回偶数月の一日発行)

共産主義 第四号

編集 共産主義者同盟書記局

発行所 リベラシオン社
東京都練馬区豊玉北五の八の一
振替東京三七〇九九

印刷所 東銀座印刷出版株式会社

定価 一部一〇〇円
年(六回)五五〇円

芸術的抵抗と挫折

マチウ書試論、芥川竜之介の死、民主主義文学批判、戦旗派の理論的動向、芸術的抵抗と挫折、転向論、戦後文学は何処へ行ったか、芸術運動とは何か、文学の上部構造的性、情勢論などを収録。B6上製函入 三五〇円千32

抒情の論理

エリアンの手記と詩、前世代の詩人たち、現代詩の問題、四季派の本質、日本近代詩の源流、短歌命数論、古典詩人論、戦後詩人論、現代詩の発展のために、定型と非定型など二十数篇を収録。B6上製函入 四三〇円千32

吉本隆明評論集

ゲル 哲学と資本論

著 秀明 梯

独自の構想をもってマルクス哲学思想の主體的把握をめざし、精緻な論理で「資本論」の核心にせまる最新の論稿五篇を収めた著者久々の労作
A5 函入 予価 四八〇円 九月末刊

未来社 東京・表町78 87385
東替 文京・東京

国際共産主義運動史

総論（一九一四年～一九五九年）

姫岡 玲治 共著
佐久間 元

近日発刊!

本書はこれまで続けられてきた運動史のわずかな研究の集大成である。それほどばかりか、国際共産主義運動のかくされたる事実の全面的暴露とその理論的追究の第一歩である。すべてのこれまでの闘いの中でこの前衛的活動を明るみに出すことなしに、プロレタリア革命運動の前進はない。この事業は数十巻におよぶ一大事業である。読者の絶大なご支持をおねがいする。

B6判 三〇〇頁 予価 三五〇円

リベラシオン社

東京都練馬区豊玉北五丁目八のー
振替 東京 37099